

温故知新と回想

—宗像二題—

滋賀県野洲市教育委員会 文化財保護課

花田 勝広

序

過去の事象は、世代の消滅と共に記憶から薄れ、記録として書いておかなければ、歴史から削除され、次世代に残らないものである。私たちは、生きている世代しか知る事ができない。こうなると、記録したものしか歴史にならない。他は露と消えるのだろう。

筆者は、宗像市図書館深田分館の郷土資料室に提供するために、宗像関連論文等 500 本を集め、戦前の雑誌を集成・デジタル化しているなかで、かつて研究内容や先学の書いた成果が次ぎの世代に伝わっていないものが多くあり、なぜ知識が蓄積される事なく、繰り返されるのか疑問を持つようになった。そこで本稿では、その中の気になる二題について検討する。

第1題 宗像会と出光佐三翁

明治 24 年に結成された宗像郷友会(宗像会)は、会誌『宗像』を通じて、宗像出身者の集まる東京宗像塾を基点に、全国の出身者の親睦・交友を図る会員数が千人の団体であった。出光佐三も会員の一人であった。戦後に宗像大社復興の本格的に進める原動力は、この会が母体となり、出光兄弟や出光興産幹部も会員であった。佐三の活躍を通じて、宗像の基層意識の本質と宗像会と佐三の行動と影響を検討する。

第2題 宗像の発掘調査黎明期

宗像に大規模団地の開始されたのは、昭和 40 年前半の日の里団地で、開発に伴い文化財の発掘調査が開始された。この頃に調査を実施された波多野院三先生と福岡教育大学歴史研究部考古班の活躍や文化財啓発を紹介する。併せて宗像高校歴史研究部、東海大学付属第五高校歴史クラブの活動を関係者の一人として記録として纏め、その後の影響を考えた。

目次

第1題 出光佐三翁と宗像郷友会（宗像会）

1. 宗像の基層意識の形成
 - (1) 早川勇とは
 - (2) 宗像会の概観
2. 出光佐三翁と宗像
 - (1) 佐三の事業と宗像
 - (2) 佐三と宗像郷土館・郷土会館建設への支援
 - (3) 宗像神社復興期成会会長就任と復興
 - (4) 佐三と先人の顕彰
 - (5) 佐三と戦後の宗像会
 - (6) 鎮国寺の復興、東郷公園の再建
 - (7) 福岡教育大学の移転統合
 - (8) 出光佐三の宗像での講演会
 - (9) 出光丸の竣工見学
3. 著作・評論・出版と顕彰事業
 - (1) 著作・評論・出版
 - (2) 宗像での佐三翁顕彰事業
4. まとめ
 - (1) 佐三翁はどんな人
 - (2) 今日、出光佐三翁の痕跡を探す。

2. 文化財保護と啓発活動
 - (1) 城ヶ谷古墳群発掘を通しての文化財保護運動の展開
 - (2) 城ヶ谷古墳群調査の取り組みと評価
 - (3) 城ヶ谷古墳群のその後
3. 宗像郡内遺跡の分布調査
 - (1) 調査とその内容
 - (2) 宗像町遺跡分布調査のまとめ
4. 野坂の土器と中松元古墳群
5. 考古班活動がその後に及ぼした影響
6. 高校クラブの活動
 - (1) 宗像高校郷土研究部の活動
 - (2) 東海大学付属第五高校歴史クラブの活動
7. まとめ
 - (1) 40年後の宗像の古墳
 - (2) 40年後の後悔

総括

1. 宗像の特性
2. 文化財の調査・啓発の歴史
3. 結語

第2題 宗像地域における黎明期の遺跡発掘調査

出典・参考文献

1. 波多野先生と福岡教育大学歴史研究部考古班
 - (1) 波多野院三先生
 - (2) 福岡教育大学歴史研究部考古学班の活動
 - (3) 調査活動と成果

第1題 出光佐三翁と宗像郷友会（宗像会）



出光佐三翁
(画像提供 出光興産株式会社)

彼は、宗像大社を復興し、福岡教育大学の誘致、郷里の人材育成に尽力され、今の宗像の根幹を造った。宗像をこれほど愛し、宗像人に影響を与えた人物は、歴史上に存在しない。（筆者）

1. 宗像の基層意識の形成

宗像の基層意識は、古代・中世の宗像大宮司が地域領主として、自主性を持ち独立していたものが、宗像氏貞の死去により統治権が崩壊、豊臣秀吉の九州征服により、後に黒田藩領地となることで変容する。江戸時代の黒田藩の時代は、農耕基盤の水田と玄界灘の領地・領民支配が行なわれる。唐津街道の宿である赤間と畦町に通るのみの静かな農村と漁村であった。大きく変わるのは、明治時代で、人々が自由に土地を離れ移動し、明治20年以後の鉄道開通によって大きく広がる。この流れの中で、郡民が土地を離れることにより、同胞意識の形成で宗像会が発生する。「宗像は一つ」という考えは、ここから始まる。その基層・同胞意識形成のきっかけは、幕末の勤皇志士である早川勇が関係する。

(1) 早川勇とは

天保3（1832）年7月23日、遠賀郡虫生津村に生まれ、宗像郡吉留村の医師早川元瑞の養子となる。嘉永2（1850）年、藩医の板垣養永に従って江戸におもむき、儒学を学ぶ。嘉永6年（1854）年のペリー来航で世の中が騒然とする中、福岡に帰った勇は勤王討幕の志士として活躍した。西郷隆盛、中岡慎太郎、高杉晋作らと接触し、三条実美はじめ五卿の西遷を実現させ、薩長同盟の基礎づくりに奔走した。五卿落ちの一一行は、赤間宿の御茶屋に慶応元年（1865）1月18日～2月11日に一ヶ月ほど滞在する。

ところが福岡藩の佐幕派は、勤王党の全滅を計画し、勇も幽閉される。その間、討幕の世論はいよいよ高まってゆき、慶応3（1867）年10月、薩長に対して討幕の命が下り、12月にはついに王政復古の大号令が発せられる。

この政変で勇も解放されて吉留の自宅に帰り、これを聞いた赤間、吉武方面的村民は、郷土の栄えある偉勲者を迎えるために沿道を埋めたそうである。時に明治元年（1868）1月1日、勇は38歳であった。

その後、奈良府判事や元老院大書記官を勤め、晩年は郷土の育英事業に専念し、明治32年2月、68才で亡くなる。ここまでが一般的な彼の業績で評価される。

ところが、彼が宗像郷友会（宗像会）の結成に関わり、もう一つの役割が明らかとなる。

早川翁は、何にも心に留めることもなく活潑たる心情は、晩年を子弟教育に捧げた。東京在住の時は、「その邸に入りする書生（学生）は幾百人、その邸に寄食し補助を受ける者、幾十人、当時三十間掘の孟嘗君と都下に宣伝する所」となったという。早川邸は、現在の東京都中央区銀座8丁目にあ



早川 勇

たる。しかも、「翁は極めて質素儉約にして駄奢の風ない人」また、「その晩年は、藩の後進子弟の教育に捧げ、報酬の大部分を学徒の教育費に投じて、苦学生の計報を聞き、その葬儀を行ったこともある」という。彼が、東京に上京した宗像出身者・旧黒田藩関係者を可愛がった。ここに連帶意識から宗像郷友会が生まれる。幕末の志士であるが、宗像会の精神的主柱として、戦後まで尊敬された。ただし、孟嘗君と呼ばれたころは良かったが、この後これが原因でご苦労された。

(2) 宗像会の概観

①宗像会の概要（明治～昭和前期）

明治 24 年 11 月、早川邸宅に集まり東京に在住する宗像郡出身者の間で、「郷友雑誌」の第 1 号が発行されたが、宗像会はこのとき、まず東京で自然発生的に結成されたものといえるが、中心人物は吉田良春（陵厳寺出身）で、伊東尾四郎（東郷出身）・中村哲二郎（原町出身）・伊豆直吉（武丸出身）が発起人となる。その後「宗像」を媒介として大阪・福岡・北九州・飯塚等の各市をはじめ、海外でも結成されるようになり、会員数は 1,200 人を越えた。宗像会は雑誌から機関紙へ変貌した「宗像」を通じ、会員及び宗像神社との連絡をはかるとともに、神徳を宣揚することを目的としている。ここで機関紙「宗像」の歴史をたどり、宗像会の変遷を概観すると、まず東京宗像会で発刊した会誌「宗像」は、在京の学生が輪番幹事になって編集にあたり、毎年 4 回発行して昭和 10 年に至る 46 年間に既に 144 号まで発行している。その後の経過は次のとおりである。郷友雑誌の題字は、幕末志士、早川勇による。昭和 11 年 8 月 3 日、宗像神社発行の「神光」と宗像会発行の「宗像」との合同を協議する関係者の会合が、宗像神社で開催され、その結果、両者を合同して年 4 回会員制によって会誌を発行することとなる。しかし、戦争により、会誌はつい漸次遅延し、昭和 18 年、遂に第 163 号で自然休刊の止むなきに至った。

宗像会全盛期の頃の大正 4 年に、石田和吉の記事があるので紹介する。

（宗像会と機関誌 「郷友宗像・宗像」について 『宗像』100 号 大正 4 年より引用）

「明治 24 年、11 月 9 日に、郷友雑誌として、第 1 号が発刊されてからは、号を重ねること 145 号となり、同 46 年、現在会友数千人に達している。この偉大な雑誌は、日本一で、他に類例ではないのである。名称は、初め郷友雑誌であったが、途中宗像と改称された。年 4 回の発行で、学生が余暇を利用して、編輯献身的な努力を以て今日に至らしめたのであるが、維持のための空前の灯というべき、状況に陥ったこともある。責任者と云うべきものもなく、順廻りに学生が、世話人となって、斯くも長く保っているのは、全く宗像人の着実にして、持久性に富み粘り強い気質が、この雑誌において発現したものと言わねばならぬ。また、大正 4 年 1 月号は 25 年目で第百号記念号であった。実際に堂々たる物で菊版三百余頁、宗像の誇りの偉大なるものと思われるるのである。

本誌発行の所以については、郷友雑誌第1号（明治24年11月1号発行）の巻頭の主旨を記述して宗像人の意気を示すことにする。発行の主旨たる会員諸氏の熟知するところと雖も、或は未だ其の旨を解せざる人なきを保せず、故に今其の大略を述べて広く本郡有志の士に告げ、その賛成を仰ぎ併せて会員と為せるを諾せらんことを希望するものなり。

近代世相一変し所雲四塞の小天地間に躊躇し、我が国民も我が晴朗廣潤なる蒼穹を仰ぎ万里の青涯を望んで東航西駛し、是において我郡の如き西陲隙邑の子弟も鉛を投じ超ちて中原遊ぶものあり、祖先以来十世未だ会いて四塚の麓を離れ釣川の岸を去らざるもの、今富士岳を仰ぎ太平洋を眺め利根隅田の河畔に吟じ、或は賀茂の清泉を掬し東山三十六峯の景を眺め、或は朝瞰金鯱に輝く奇景を賞し、或は更に進んで落機山に登り蜜櫛此河に浮かぶものあり。斯の如く一郷の士にして四方に離散し復した昔日の感にあらず、この本誌発行の止む能はざる所以なり。乞う詳に之を云わん、物相離れて情潮々疎なるは常なり、然れども離れて情喻々切なるものは故郷なるべし。故郷の光榮なる所は父母兄弟の住む所なり、疎ならんと欲すと雖も得ん、況んや少時遊嬉眺望せし、所の山川草木の美景は決して眼底を去らざるを、是を以て郷を離れるもの未だ会で故山を望みて其の他の災なからんことを希に父兄諸友の恙なからんを、祈らずんばあらず、郷にいる父兄諸友もまた懷慕して、故に各自の消息を報じ各地の状況を告げ兼ねて本郡の幸福増進の道を論じて本誌に掲載し以て親愛の情を表す交誼を全うせんと欲す、これ本誌発行の理由の其の一なり。

郷を同じくする人々は父子兄弟の情あり、老いては教え少なくは問ひ長き率い幼は従う、之自然の勢なるのみならず實に年少、徳乏しき者は長老の戒飾を仰ぎ幼学者は先進者の鞭撻を受ける必要あり、然れども山海阻絶ん相見ることを得ずんば何を以て其の胸憶を陳べ其の志念を談ることを得ん、今本郡子弟の他郡に遊ぶもの常に30~40人、長老の人豈憂慮する点なしとせんや、又本郡高等小学校を卒するもの50~60人、豈先進の士一言の其の志氣を躊躇することなくして袖手傍観するに忍びんや、故に此雑誌において老幼少長各其の胸を披き、情を蓋し戒飾し鞭撻し以て老は安んじ少は楽しむ境域に進まんと欲す、是れ本誌発行理由の第二なり。

我郡は、古来、宗像神社の鎮座しますを以て、中古親王公卿が下りて、祭祀を司り賜う例ありし故に、民俗徳化に風靡し古より孝子節婦の後世に伝うべきもの少しとせず。且つ宗像氏數十世の居城なるを以て一個独立の歴史を有す、此等の遺事古聞を蒐集せば、故事の煙没を担ぎ風化の万一に補うなしとはせず、是本誌発行理由の第三なり。

且つ近世学術の探究日に切に、之に従事する者山河を跋渉し湖海を横航し物事を見風俗を察し兼ねて名山に攀じ、大川を淨うじて活氣を養うの徒、会員中数頗る多きを知る、故に此等の人々の記事必ず見るべきものあらん、且つ才能富みその文章詩歌を投稿せられ又文学上の好雑誌たるを疑わず、これ本誌発行理由の第四なり。

其の他本誌の直接または間接の目的は多かるべしと雖も要するに郷友の考説を厚くし知識を交換し徳行を奨励し老幼少長其の責任を書し以て本郡の福利を増進するにあたり、会員諸氏幸に善く此の意を諒し投稿の労を敢えてくつす僻することなかれ。



郷友雑誌



宗像



再興 宗像

昭和38年9月

”

②宗像会と宗像塾の実態

宗像会は、昭和の高度成長期までは、有名な団体であったが、この団体を纏めたもののがなく、昭和61年の占部玄海『郷土歴史資料叢書 人物往来』第3輯が最初で唯一のものである。東京の宗像塾で生活していた学生の柴田節郎の回想録「宗像塾の思い出」の収録があり、詳しく当時を知ることができる。以下、引用する。

雑誌「宗像」の発行 宗像会は、宗像会の機関紙「宗像」の編集発行をしていた。宗像会は本部を東京宗像塾におく旨の会則にある。しかし、宗像会の歴史は塾よりももっと長い。明治24年に第1号が発行されている。宗像出身の東大生が中心であった。誌名も当初は「宗像郷友会雑誌」といったが、31年、35号から「宗像」となった。はじめの頃の幹事をあげると、吉田良春（法学部、住友重役）、中村啓二郎（工学部、住友重役）、安部正也（工学部、国際汽船重役）、深田千太郎（法学部 朝鮮総督府、実業にて活躍）、伊東尾四郎（文学部、福岡県立図書館長）、八波則吉（文学部 五高教授）、平田知夫（法学部 駐ロシヤ大使館一等書記官）、入江海平（法学部 拓務次官）氏等、そうそうたる顔触れで、後年実業界、官界、学界、教育界等で活躍された宗像の代表的な人々である。宗像塾が「宗像」を編集するようになって、ここに宗像会本部が定着したのである。「宗像」は郷里

を出て、愛郷の念やみがたい人たちと、郷土宗像との連絡の欄であった。会見消息と郡地のたよりが主要な記事であった。その他、論説、文苑等の欄があつて会員の投稿による充実した内容の高級な記事がのつた。本誌によって、宗像を離れた人は望郷の念をいやすことかでき、郡地の人は各地で活躍している人の動静を知ることができた。在米会員の多かったこともうなずける。会員数は最盛時には1,200人に達したという。関東大震災で休刊するまで120号を出している。随分発行されたもので、今でも旧家にはこの雑誌が何号か残っている筈である。表紙の「宗像」という風格のある字は、教育家、書家として有名であった、田島の興聖寺の住職手嶋宥峰氏の揮毫であるという。この人の記念碑は興聖寺の前に今もある。この由緒ある雑誌も、あらゆる会員雑誌同様、会費の未納による財政難に悩まされたうえ、郡制廃止後は郡よりの補助金も打ち切られ、大震災後、塾の解散と共に自然体刊となつた。

宗像塾のはじめ 宗像塾は「浩々居」の弟分ということになっている。では「浩々居」とは何か、福岡の生んだ宰相広田弘毅の伝記には必ず出てくる名前である。広田が一高時代、耕友の平田知夫とはかり、同郷の学友5人で、明治33年小石川に小さな家を借りて、自炊をはじめたのか「浩々居」のはじまりと言う。この平田知夫は私の伯父で修猷館、一高、東大、外交官と、広田と行動はしたか、モスコー駐在中病を得て40才にして世を去った。だんだん入居者もふえていったか、その中には宗像出身の人たちもいた。主な人をあげると、入江海平（上八出身、拓務次官）、林繁蔵（徳重出身、朝鮮殖産銀行頭取）、高武公美（在自出身、福岡市助役）、釜瀬富太（野坂出身、九州学園理事長）がある。そのうち、「浩々居」にはいれなくなった宗像人たちが、当時、東京外語の学生であった滝口亮造を中心として、平田と相談し、「浩々居」の近所に家を借りて作ったのが宗像塾である。その後、塾生もふえ、住所は小石川白山御殿町、原町、本郷千駄木町と変わったが、「清々居」との友好関係は続き、中には両方に籍をおいた人もいたくらいである。

宗像塾の発展 もともと宗像は教育熱心な郡、上級学校に志すものは多かつたが、現在とちがつて殆どの学校は東京だったので、上京者は年と共に増えた。さて子弟を上京させるとなると、父兄の関心は子弟が病気にならず、悪の道に迷わず、学に励んで無事学業を終えてくれるということに尽き、一方学生の方も、田舎から出てきて大都会の一隅で、一人で暮らすことは心細いことかぎりない。同郷の者が生活を共にし、共に戒めあい、共に学び、共に楽しんでいる宗像塾は、父兄、学生双方にとって頼もししい所であった。その存在価値を貫わって、郡からも補助金が出ていた。宗像塾が在京宗像学生の中心となったのも無理はない。創立後十年たつた大正4年までに、塾に席をおいた人は70名を超えたというから、その盛況のほどか偲ばれる。

前期の終わり 全盛をほこった宗像塾も、本郷千駄木町時代、大正12年の関東大震災のため、家が大破し、塾生もちりぢりとなって解散のやむなきにいたつた。しかし、この間数多くの人材を送りだした。今、千駄木町時代の在塾生中より全国的に活躍された人をあげると次の人々がある。倉田主税（東京高工、日立製作所社長）、安永渡平（東大、八幡製鉄所副社長）、古野清人（東大、学士院会

員)、出光計助(出光、出光興産会長)、安部隆任(一橋、三井物産重役)など。古野氏は九大教授を経て、独協大、駒沢大、都立大教授をされているが、52年学界最高名誉である学士院会員に列せられ、更にフランス政府からパルム・アカデミック勲章を受けられた。安部降は現在福岡市在住、会社顧問の傍ら、福岡宗像会の会長をしておられる。

『宗像』の復刊「宗像」が大震災を機として宗像塾の手をはなれたことは前に述べたが、宗像会本部は宗像中学におかれ、中学で何回か発行されたまま中断状態となっていた。しかし、この由緒ある雑誌を何とかして復刊させたいという意見や希望か会員間に多く、昭和5年の宗像会夏期総会は、暑い最中すきやき鍋というのか総会の慣例であった。出席した塾の阿部正彦を通じて、塾にたいして「宗像」引受の交渉があった。当時塾は阿部正彦、寺野泰雄(3回、東大)、安川太朗、永野高雄、趨智汎愛と柴田兄弟の7人であったが、協議のうえ、できるかぎりやってみようということで引き受けることにした。「宗像」復刊がきまると旧会員の反響は強かった。各地からの消息は集まるし、投稿も多かった。伊豆先生はじめ伊東尾四郎、深田千太郎、服部音太郎、石田和吉氏等、昔の幹事の方々より喜びのことばをいただきて一同大いに気をよろしくした。石田氏は「宗像」最盛時の幹事で、文名は関係者間に鳴り響いていた。原稿の割り振り、印、校正等、型通りの苦労を経て、昭和6年5月1日に復刊第143号を出すことができた。会員は当時450人位だったと思うが、帯封を書いて発送し、帰ってきて一同で打上げのスキ焼鍋をついたときの楽しみは忘れられない。このように、苦しみと喜びを交えながら何号か出したが、先輩と同じように原稿難と会費未納には手を焼いた。この苦労は勉学中の学生の手にあるものであった。何号か出したまま、また「宗像」は郷里へ戻った。今度は宗像大社で戦争まで発行された。昭和16年12月26日発行第162号が私の手許にあるさいごである。私も東京の委員として、集会の記事や会員消息を送った記憶はあるか、戦後はどうなったであろうか。塾での発行は長づきしなかったが、尊い経験だった。

塾の終焉 天神の塾は十年以上もつづいたが、借家の悲しさ又家主の都合で立退かされ、昭和15年中野上高田に移った。塾ははじめから終わりまで借家住まいであった。兄貴分の「浩々居」が早くから自前の家を持ち、財団法人となっているのと対照的であった。何とか自分の家を持ち落ち着いた気分で暮らしたいというのが、歴代の塾生の願いであった。これは先輩から引き継がれた悲願ともいるべきものであった。しかし寄付金を募り、土地を買い、塾にふさわしい家を建てるということは、年々に交代していく学生にとっては無理な仕事であった。先輩の中服部吉太郎、出光万兵衛は熱心に協力して下さったが、いろいろのいきさつもあり実らなかつた。その間、時局は急進し、上京学生は少くなり、塾生も5人となつた。上高田にいること一年、とうとう塾も解散のやむなきに至つた。かくして宗像塾は、明治37年創立以来昭和16年まで、一時の中斷はあったが、約40年つづいた輝かしい歴史の幕を閉じたのである。しかしその間に送り出した人材は200人に近かろうと思われ、その人々がそれぞれの分野で活躍していることを思えば、宗像人発展の礎石としての任務は充分に果たしたわけである。塾時代の思い出は各人の胸の中にいつまでも続いている。

”

この雑誌は、明治 25 年の 3 号に河邊稔が「教育家諸君の左右に致す」と教員の推進が書かれ、安部正也によって家庭教育の必要が説かれている。明治 33 年には、宗像教育会があり、女子教育の問題が議論されるなど、教育関係記事から始まる。明治の気風を強く持つ雑誌で、郷友の交友と新知識の取得や切磋琢磨を目的としている団体であった。

注目されるのは、吉田良春（法学部、住友重役）が提唱者で、中村啓二郎（工学部、住友重役）、安部正也（工学部、国際汽船重役）、深田千太郎（法学部、朝鮮総督府、実業にて活躍）、伊東尾四郎（文学部、福岡県立図書初代館長）、八波則吉（文学部、五高教授）、平田知夫（法学部、駐ロシヤ大使館一等書記官）、入江海平（法学部、拓務次官）等、そうそうたる顔触れで、後年実業界、官界、学界、教育界等で活躍された宗像の代表的な人々である。「郷友雑誌」1 号には、早川勇が 60 歳で元気であり、投稿されている。もちろん内容は、幕末の勤皇志士のことである。伊東尾四郎は後に、『福岡県史』・『宗像郡誌』等を編集・発刊するが、大学生の頃に貝原益軒の「続筑前國風土記」、青柳種信の「続筑前國風土記拾遺」の史料の重要性を指摘し、自らまとめることを宣言している。4 代目の編集長である。年四回の編集は、彼の能力を鍛えることになる。大正 12 年（1923）9 月 1 日にマグネチュード 7.9 の関東大震災が起こる。関東大震災前の編集長は、古野清人（東大、のち学士院会員）で、災害で印刷所がつぶれる中、ガリ刷りにより同年 13 年 1 月に 134 号を発刊した。何があろうと郷友の為、停められなかつたのだろう。しかし、印刷所の復興が遅れ 2 年間ほど中断し、大正 14 年 8 月に 135 号が発刊される。後に、古野は昭和 12 年に宗像で宮座の民俗調査を実施している。この時は、古野の名が通り調査が容易に出来たようだ。古野は宗像への想いが強く、戦後に『農耕儀礼の研究-筑前宗像における調査-』1970 年 東京大学出版会から刊行される。この発刊は、宗像会への回想に近いものだったのだろう。関東大震災後、一時は再興したが、東京から宗像会本部が宗像神社に置かれ、宗像辰美（宮司）・石田和吉が昭和 10 年～終刊の編集長であった。会員数は、名簿で拾うと明治 31 年に 262 名、明治 37 年に 423 名、大正 4 年に 1,005 名、最高で 1,200 名、昭和 14 年で 920 名となる。当時の有力者や知識層の殆どが入会している。

このように、当時、宗像名物は「教員・鶏卵」と云われるほど、福岡県下で有名であった。鶏卵は、江戸時代後期には黒田藩の検地や奉行などの役人視察の際は、常に卵がお土産であり、明治時代になると大阪に輸出する櫨実（はぜのみ）と共に一大産物になり問屋もあった。地元の宗像会の多くのメンバーは教員が多く、今日までこの伝統は続く。

戦前の地方雑誌としては、第 1 卷～第 163 号まで、51 年間も続いた同人雑誌は殆どなく、当時より全国一と評価されている。宗像は一つと意識される基層意識は、この会の影響に神郡宗像の歴史性が後に付加したものである。『宗像』には、興味深く検討すべき内容があるが、ここで留める。

2. 出光佐三翁と宗像

(1) 佐三の事業と宗像

佐三は、明治 37 年（1904）4 月、中野吉三郎の紹介により 19 歳で宗像会に入会する。記事によると、「赤間の人、目下福岡商業学校に在学中」とある。中野吉三郎は、「朝町の人、目下上京、下谷区車坂町 88 番地に御寄留の由、法律学校入学の準備中」とある。福岡商業学校 4 年の時であり、進路を考えていた頃である。会員であった兄の雄平が脱会し、佐三が入会する。明治 42 年（1909）までの 5 年間会員となり、神戸高商（神戸大学）に在学中までである。したがって、商業学校卒業後も宗像の情勢は、『宗像』の会員通信を通じ知っていたと思われるが、酒井商会の丁稚となり脱会している。卒業証書を捨てた頃である。

大正 6 年（1917）に門司で出光商会が軌道に乗った頃に、石田和吉の紹介で佐三（32 歳）が、再び宗像会に入会する。当時、明治 44 年に日田重太郎から資金を渡され、6 月に門司市に出光商会を創業し、7 年後である。数年前に南満州鉄道に車軸油の納入に成功し、事業が軌道に乗り出した頃である。石田は、雑誌『宗像』100 号の特集号を発刊した編集長であり、同郷の出光に入会を持ちかけたものである。関門海峡で「海賊」と呼ばれた頃である。以後、時系列で宗像の活動と彼の石油事業をまとめよう。なお、宗像の視点で彼の足跡を追う。

貴族院議員 昭和 12 年（1937）貴族院多額納税者議員に出光佐三が選ばれ、2 月に宗像神社に参拝する。52 歳のころで以後、貴族院議員（多額納税）として登院し、貴族院が廃止されるまで議席を持っていた。次の昭和 13 年の記事には、出光の 53 歳で「貴族院議員、門司商工会議所会頭、満州国名誉理事として公務多忙の模様であるが、又一面、出光商会の家業も繁盛し、去る 6 月 10 日には、新鋭油槽船『日章丸』を進水させた。この船は三菱造船所の製造で一万一千トン、400 万円を投じたと云う巨船ですから、益々出光商会は発展するであろう。本会としても郡としても喜びに堪えない」とする。入会から事業に多忙であり、ほとんどこの間の記事は見られない。昭和 14 年に再選される。高橋昇委員の出光評に「氏は、明治 18 年出生と云いますから 55 歳。福岡商業高校を卒業後、神戸高等商業高校に学び明治 42 年に卒業された。在学時は外交官志望であったが、父上より・・・諭され独立自営の意を固めたと云う。」と紹介があり、先鋭の事業家として、認識されている。

郷土館寄附 昭和 13 年（1938）4 月に出光に関係者が、宗像郷土館の増資の懇願、郷土館建築状況の報告に行き、最終的に建設費用の 32,000 円のうち 2,500 円を贊助している。最も多い寄附である。開館は、12 月に宗像郷土会館と共にオープンする。

昭和 14 年（1939）に貴族院議員に出光佐三が再選され、『宗像』158 号に報告される。翌年に宗像会の終身会員となり、3 月には出光興産株式会社を設立、8 月には、『宗像』に出光の躍進記事があり、宗像出身者の事業家として、郡民にも広く知られる。昭和 16 年（1941）の宗像会創立 50 周年、弟の出

光弘が終身会員となる（160号）。12月には、太平洋戦争が始まる。昭和17年3月、出光興産本社を東京の東銀座に移転する。

昭和17年（1942）11月に宗像神社復興期成会会長に出光佐三を選任される。昭和20年（1945）の8月に敗戦となる。宗像郡の当時人口は54,321人である。

敗戦 8月 出光佐三は、終戦の2日後、従業員に対し「愚痴をやめよ。世界無比の三千年の歴史を見直せ。そして今から建設にかかり」と訓示した。60歳の還暦でも、我意思を通す人である。当時、多くの企業が人員を整理する中、出光佐三は約1千名の従業員の首を切らないことを宣言した。そして、タンク底油集積を経て、昭和22年10月、石油配給公団の販売店指定を受ける。11月に出光商会と出光興産が合併し、出光興産として再出発する。昭和25年（1950）6月には、朝鮮戦争が起り福岡県板付飛行場は最前基地となり、F86戦闘機など一日約300機が発着する。また、朝鮮戦争で北九州に警戒警報が発令される。出光の石油輸入基地の室蘭・川崎・神戸油槽所竣工がなされる中の7月に「宗像神社」を書かれている。さらに、法事で宗像郡赤間町にもどり、町長や有志と会い懇親を広め「夢」を書く。これらは、『四十年間を顧る』に纏められる。

昭和27年（1952）4月には、平和条約締結（サンフランシスコ平和条約）により、占領軍から日本が正式に独立する。

日章丸事件 昭和28年（1953）5月に、日章丸事件となる。石油事業を国有化し大国イギリスと係争中のイランに、日章丸二世（1万9千トン）をイラン石油輸入のため、イランのアバダン港から、ガソリンと軽油を満載し川崎へ入港する。英國アングロイラニアン社は、積荷の所有権を主張し、東京地方裁判所に提訴した。出光の奇策により出光の勝訴が決定し、日本国民を勇気付けるとともに、イランと日本との信頼関係を構築する。この時に出光佐三は、東京地方裁判所の北村良一裁判長に「この問題は国際紛争を起こしておりますが、私としては日本国民の一人として俯仰天地に愧じない行動をもって終始することを、裁判長にお誓いいたします」と答えた。歴史に残る有名な話である。宗像ではこの年、6月に台風により北九州豪雨、釣川が氾濫し宗像大洪水害が起こる。宗像低地の海拔4.5mライン以下は水没し、田畠に水害を与えた。記録に残る最大のものである。8月に宗像神社の拝殿修理などに国庫補助53万円と文化財愛護委員会が発表した。昭和29年（1954）5月、沖ノ島1次調査が実施される。12月に沖ノ島を国営漁港として4億5,000万円で修築することが決まる。昭和30年1月に復興事業で田島・高宮の土地が買い上げられる。9月には、孝子、武丸正助翁の遺徳しのび福岡松源寺で、200回忌讚仰法会が行なわれ、翌日父の松寿の13回忌を赤間法然寺で行なわれ、9日に武丸正助廟での200回忌に遺徳をしのび、正助伝記3,000部を寄附される。ここに序文を書かれる。12月の復刊宗像に「宗像族の雄心」を書く。この年に沖ノ島2次調査が実施される。昭和31年（1956）7月の復興宗像2号に「アメリカを観察して」が掲載される。昭和33年（1959）3月、念願の出光興産の徳山製油所が竣

工する。昭和 35 年（1960）に宗像高校にて記念講演（創立 40 周年）で講演する。4 月には、出光興産がソ連石油を輸入し、マスコミに赤い石油と呼ばれる。

教育大学の統合移転 昭和 35 年（1960）12 月、高山勉町長が福岡刑務所の吉武地区への移転を断り、学芸大学の統合移転が検討される。昭和 36 年（1961）に「こころの世界」を書く。昭和 37 年（1962）3 月、沖ノ島出土の銅鏡などが国宝に指定される。鎮国寺の護摩堂が完成する。9 月には、宗像神社の長久手神事と呼ばれた「みあれ祭」が約 400 年ぶりに復活し、漁船 180 隻が参加する。この年に『人間尊重五十年』が出版される。復興期成会会長代理に出光泰亮（佐三の弟）が就任し、宗像神社の復興業務を取り仕切る。

一匹狼 昭和 38 年（1963）に出光興産の千葉製油所竣工（1 月）、出光興産が石油化学工業へ進出（4 月）する。出光興産は 11 月には、生産調整に反対し、石油業法に反対し石油連盟脱退を決める。マスコミに出光脱退が「業界の一匹狼」が檻を出たと呼ばれたところである。『「人の世界」と「物の世界」-40 の質問に答える-』が、出光興産社長室より出版される。復興された宗像会の会誌に再興宗像 1 号に「宗像会に寄す」書く、名誉会員となる。10 月 22 日、学芸大統合起工式に出光佐三社長が出席、城山中学校講堂で講演する。昭和 39 年（1964）、「年頭所管」で教育大学の設置の抱負を再興宗像 2 号に書く。4 月、宗像神社宝物館の本館が完成し引き渡しが行なわれる。5 月に東京で福岡県人会総会、会長に出光佐三に就任する。5 月 21 日に墓参り帰福し、八所宮・綠風園・武丸正助廟に参る。8 月に武丸正助翁の伝記 3,000 部を配布する。この年に『題名のない音楽会』が放映開始される。11 月に宗像神社宝物館が竣工する。

昭和 40 年（1965）1 月に宗像神社宝物館の開館、矢次ざまに宗像大社が宗像大社由緒記を作成、4 月に配布する。5 月に NHK「自然のアルバム」で沖ノ島を放映、『宗像神社史』上巻・下巻、『続沖ノ島』が完成し、全国の図書館・大学の研究施設に配布される。9 月 26 日、宗像高校で「宗像人の使命」再興 8 号を書き、宗像郡町村会館で宗像青年会議所の臨席講演が行なわれる。

出光丸の建造 昭和 41 年（1966）4 月、福岡教育大学が赤間に統合移転した。出光佐三が、出光興産の社長を退き、会長に就任する。出光丸は石川島播磨重工横浜工場で建造され、同年 12 月 7 日に竣工した。当時、このタンカーは世界最大であり、かつ史上初めての 20 万重量トンを超えたタンカーである。ペルシャ湾と出光興産徳山製油所を年間平均 9.5 往復して日本への原油輸送に大いに貢献した。10 月、本社に出光美術館が開館する。12 月の出光丸竣工には、全国の中学生 15,000 人を招待する。昭和 42 年（1967）4 月、再興 14 号、石田正實が「出光丸」を書く、8 月に沖ノ島 3 次調査が開始される。昭和 43 年（1968）7 月、早川勇翁像の除幕式を吉武村役場跡に建設され、会長代理として出光弘が出席、併せて、早川勇の伝記を桧垣元吉教授が出版（6 月）される。10 月、宗像会機関誌「宗像」廃刊、神社広報誌「宗像」へ吸収する。

昭和 44 年（1969）4 月 20 日、宗像高校体育館で 3 度目の出光佐三の記念講演会が行なわれる。宗像高校創立 50 周年事業の一環である。その後に宗像高校創立 50 年に、千万単位の多額寄附が行なわれる。9 月、宗像神社神官の太田可愛らが『宗像史話伝説』を出版する。12 月、宗像神社本殿の解体が始まる。昭和 45 年（1970）1 月、宗像神社国宝展が小倉井筒屋で開かれ、九州初公開される。8 月、沖ノ島丸（25 万 4 千トン）が完成する。12 月、宗像神社祈願殿が完成し、新殿祭が執り行われる。

昭和 46 年（1971）4 月、宗像神社史の付巻が刊行される。27 年かけて 3巻が完成する。4 月、宗像神社境内が国指定史跡指定となる。6 月、東郷橋にあった九州一の大鳥居が神社正面に引っ越しする。11 月 11～12 日、総工費 10 億円をかけて神社復興事業が進み、遷宮大祭が行なわれる。また 11 月、出光佐三が三島由紀夫の葬式で弔辞を読む。

店主 昭和 47 年（1972）5 月、佐三は 87 歳で店主となる。7 月、出光佐三の生き方を描く映画「日本人」を福岡で上映。昭和 48 年（1973）2 月、瀧口凡夫（後の宗像市長）の『創造と可能の挑戦 出光佐三の事業理念』が生前に出版される。

昭和 49 年（1974）9 月に伊勢神宮の古材を移した第二宮・第三宮の造営工事が始まる。

昭和 50 年（1975）に『永遠の日本-出光佐三対談集-』が出版される。

昭和 51 年（1976）1 月に、出光佐三が自ら買い集めた中世の宗像神社文書を宗像神社に奉納（寄贈）する。昭和 52 年（1977）10 月、宗像神社から宗像大社に名称の変更が認められる奉告祭が行なわれる。

出光佐三翁と宗像会、宗像地域の主な歴史の概観

元号	西暦	月	宗像神社と出光佐三	調査・報告	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主要な事項	社長
明治44	1811	6	門司市に出光商会を創立する。		26	津田崎の塩田が廃止される。	日田室太郎(資産家)が、別荘を売却して得た資金8,000円を渡され、満26歳で独立。その条件が「風流ついてい、『だらかるのだから返さないでいい』、利子もしない」。事業の報告もしなくてよい。君が好きに営め。ただ、独立を貢献すること。そして兄弟仲よくやってれ。』といつものであつた。福岡県門司市に出光商会を設立。	
大正元	1913				27	明治天皇の崩御。	下戸で諭美燃料の販売に着手。	
大正2	1914				28	4月、東郷駅が開業		
大正3	1915				29		南九州鉄道に車輪油の納入成功。	
大正4	1915				30		諭美燃料油の販売拡大、下関支店を開設。	
大正5	1916		雑誌『宗像』100号を発刊する。		31		事業拡大で、資金繰りの悪化する。	
大正6	1917		宗像会に石田和吉氏が紹介し、佐三が再入会。(138号)		32			
大正7	1918				33	米騒動が全国に広がる。	洲州燃造、車輪油措置本店の統発。	
大正8	1919				34	4月、宗像中学校が開校	諭美の地、洲州で車輪油が凍結し、貨車のトラブルが頻出していた青洲鉄道に「2号冬装車輪油」を無償で提供。当初は使われてはならなかったが、単身蒸川にわたり済日本社に直談判し、現地で試験を行い、事故を一掃した。1927年(昭和2年)済鉄創立20周年でときに、感謝状と銀杯が贈られた。	
大正9	1920				35		佐三、チフスで死難を彷彿う。	
大正10	1921				36		創業10周年、博多支店の開設する。	
大正11	1922				37	大峰山頂に東郷平八郎を祭る公園が造られる。	合同会議出走する。	
大正12	1923				38		9月、熊本大震災に際し、全店員に禁煙を呼びかける(2ヶ月間)。	
大正13	1924				39		第一銀行(現・みずほ銀行)から25万円の借入金引き揚げ要請が来たが、二十銀行(現・大分銀行)の林清治支店長が肩代わり融資を決め、蔵庫を脱する。この後、自殺説までささやかれる。	
大正14	1925				40	沖ノ島船が津田崎町に払い下げられる。		
大正15	1926				41	7月、宗像郡役所を廃止		
昭和2	1927				42	7月、委員で東京→福岡間、赤間→海老津間のトンネルが不通。		
昭和3	1928				43	昭和天皇即位記念、『津浦富』を櫻掛正木を出版する。		
昭和4	1929				44	博多港鉄道の宮地岳站が電化される。	新劇における石油開拓改正のために奔走。	
昭和5	1930				45	7月、暴風雨で宗像郡に24戸全壊。		
昭和6	1931				46		創業20周年、済州事変が起こる。	
昭和7	1932				47	田中幸夫による宗像での発掘調査が始まる。	門司商工連盟会頭に就任。	
昭和8	1933				48	『宗像郷土誌』を田中幸夫が刊行する。	高島奥地に進出する。	
昭和9	1934				49			
昭和10	1935				50	『宗像の旅』を田中幸夫が刊行する	『溝州國』の石油專制に反対。	
昭和11	1936				51			
		1	貴族院多額納税者證員に出光佐三が選ばれる。			沖ノ島砲台施設の地鎮祭		
昭和12	1937	2	このころ宗像神社に参拝する。沖ノ島に砲台が建設される。		52	7月、虚偽債事件。	2月 貴族院多額納税(多額納税)として発院。以後、貴族院が廃止され今まで蔵庫を持つ。	
		2	雑誌『宗像』150号を発刊する。				3月、企画会社大華石油設立に反対。	
		4				出光に増資の懇願、郷土館建築状況の報告する。		
		6				事務局が出光に5,000円で郷土館助懇願する。		
昭和13	1938	7	田中幸夫が門司出光商会に再び1,500円で懇願。宗像の歴史を説明する。		53		日暮丸(一世)就航する。	
		8				宗像に出光の記載あり。		
		12	宗像郷土館・宗像会館の開館、出光は参加せず。			12月、宗像郷土館・宗像会館が落成する。		
昭和14	1939	9	佐三、樺木素三宮司と復興計画を協議する。		54	4月由田幸夫による宗像での発掘調査が終わる。	中華出光興業株式会社・溝州出光興業株式会社設立する。	出光 佐三
		12	貴族院議員に出光佐三が再選					
昭和15	1940	3	佐三、宗像会終身会員(158号)となる。		55	大政翼賛会が発足する。	3月 出光興業を設立。上海泊港所竣工。	
		8	宗像に出光の謹賀記事			11月、英紀2800年式典		
昭和16	1941	11			56	6月、川端橋が流失、吉田の交通がマヒする。12月、太平洋戦争が始まる。	北支石油協会の設立に反対。創業30周年。12月、太平洋戦争が始まる。	
		4	28日、佐三、樺木素三宮司と復興計画を協議する。宗像会創立50周年、出光弘、終身会員となる(100号)					
		2			57	味噌、醤油も配給、衣料は点数割となる。	味噌、醤油も配給、衣料は点数割となる。	
昭和17	1942	8	佐三、竹間保史宮司と復興計画を協議する。			金属回収による強制征派命令発動により町内内の寺社の鐘や仏具はじめ一般家庭会属品を回収する。	6月、南方に石油配給員を派遣する。	
		5					出光興業本社を東京に移転	
		11	社社復興組合 会長に田中幸三が選任。					
昭和18	1943	4	佐三、復興期成会で上・下高宮の復興保存を決議する。		58		石油販売に反対。	
		6	8雑誌『宗像』163号を発刊が止まる。				11月、仙臺岡を会支店に配布する。	
昭和19	1944	8			59	6月、宗像郷誌の全3巻が完成。12月、津屋崎国防訓練場が開場する。		
		2						
昭和20	1945	8	8月、沖ノ島の下脚重砲兵7中隊が沖ノ島から撤去。敗戦		60	5月、本土決戦で歩兵第145師団が配備される。7月、歩兵第351師団が配備される。敗戦。	8月 出光佐三は、終戦の2日後、従業員に「愚痴をやめよ。世界戦の三千年の歴史を見直せ。そして今から建設にかかる」と訓示した。当時、多くの企業が人員を整頓する中、出光佐三は約1千名の従業員の旨を切らないことを宣言した。	
		11	佐三会長、①復興問題は時機を待つこと、②調査資料は本印刷を延期することとの今後の方針が示される。			10月、福岡市に占領軍の軍械部が設置される。11月、宗像郡人口54,321人。	10月、石油記念会社から業界復興を断られる。	
昭和21	1946	1	1月、昭和天皇の人間宣言が行われる。2月、GHQにより、官幣大社を廃止する。		61	2月、公職追放令の発布。	4月、旧海軍タンク法の集積作業を行う。	
昭和22	1947	10	第2次の農地改革による農地買収、壳り達しが行われる。		62	11月、池野村の池田炭鉱が操業開始する。	出光、石油配給会社の販売店指定を受ける(10月)。出光興業と出光興業が合併して出光興業として再出発(11月)。	
昭和23	1948	4	立部住職により、荒廃していた宗像神社の記事が書かれる。		63	鎮西宮守候の立部瑞祐が復興住職として来る。		
昭和24	1949	8	宗像郷土館が復興となる。		64	4月、鎮西宮の音山式が行なわれる。	3月、石油元売り会社に指定される。	
		4	公職選挙法を公布する。		65	6月、朝鮮戦争が起こり坂付飛行場は最前基地となり、F86戰闘機など一日約300機飛来	出光興業、石油製品の輸入を主張。	
昭和25	1950	7	宗像神社を書く(人間尊童五十年)			朝鮮戦争で北九州に緊急警報が発令される。	石油輸入基地の宝島・川崎・神戸油槽所竣工する。	
		6	法事で赤間町にものどり、町長や有志と会う。「夢」を書く				11月、川崎・神戸に輸入基地を設置する。	
昭和26	1951	9			66	池野村池田炭鉱に埋藏量300万トンの新炭層が見つかる	『四十年間を顧る』	
昭和27	1952	4	平和条約を締結、アメリカの占領が終る		67	6月、北九州豪雨、宗像大洪水、鈴川が氾濫する	米国から高オクタン・レガソリンを輸入する。	
昭和28	1953	5	5日幸丸事件		68			
		8	鉄道修理などに国庫補助53万円と文化財整備費が発表。				6月8日日幸丸事件、石油を国有化し米国と係争中のイランから石油輸入、アバラン港から、ガソリンと軽油を満載し、川崎へ入港する。	
		12	9日、佐三、復興した高宮祭場に参拝する。				高宮祭場が保存整備される。	

元号	西暦	月	宗像神社と出光佐三	調査・報告	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
昭和19	1954	12	沖ノ島を回富漁港として4億5000万円6年計画で修築することが決まる 「水を呑み冷暖自ら知る」を『知性』12号に書く。	5月、沖ノ島1次講習	69			
昭和30	1955	4	田島、高宮の土地買上げ、祭壇整備が竣工する。佐三ら多数が参列する。			4月、沖ノ島で密航朝鮮人39人が逮捕される。		
		8	沖ノ島漁港の修築に国庫補助3,500万円が決まる			8月、徳山旧海軍燃料貯蔵地を払い下げが決まる。		
昭和31	1956	9	孝子、武丸正助翁の追憶のひ『福岡松原寺で200回忌賛仰送金』		70	6月、水産高校校舎が完成する。		
		10	武丸正助翁、松寿の13回忌を法然寺、正助伝記3,000部を寄附。序文を書く。			鎮国寺に誕生堂の工事が着手される。	10月、佐三、初めて渡米する。	
		12	復刊宗像1号に「宗像族の歴史」を書く。			12月、復刊『宗像』が発刊される。		
昭和32	1957	7	復刊宗像1号に「アメリカを視察して」を書く。	沖ノ島2次	71	6月、玄海国左公園の指導を受ける。		
昭和33	1958	3	『沖ノ島』が刊行される。	『沖ノ島』	72		3月、徳山精油所の起工式。	
昭和34	1959	9	沖ノ島出土品が重要文化財になる。		73	2月、河東鉄道で落盤、生き埋め3人となる。	3月、出光興産の徳山製油所が10ヶ月で竣工する。	
昭和35	1960	6	文化財収蔵庫を三才答附し、竣工する。		74	7月、東郷に潮流、約川の堤防が決壊、氾濫する。		
		2	宝物館の計画を協議する。					
昭和36	1961	5	20日、佐三が宗像沖ノ島に渡島、参拝する。		75		4月、出光興産、ソ連の石油を輸入する。	
		5	宗像高校にて佐三の紀念講演(創立40周年)				5月、徳山精油所の第2期増設工事完成。	
		12	高山勉が福岡刑務所の移転を断る。					
昭和37	1962	1	「心の世界」を書く		76		創業50周年。	
		1	宗像大社が復刊誌「宗像」を復刊	『続沖ノ島』				
		2	『宗像神社史』上巻の刊行、「『続沖ノ島』が刊行される。					
		3	沖ノ島出土の銅鏡が宮内省に指定される。				2月、副業の恩人、日田重太郎が死去する。	
		5	佐三、東京で田島小学校の頃地利用を協議する。			4月、鎮国寺に誕生堂が完成。		
		7	復興期会長代理に田出光泰亮が就任、宝物館建設設置委員会の発会式。		77		7月、生産調整に反対し、出光興産、石油業法に反対。石油連盟脱退を決める。	
		9	みあれ祭が約400年ぶりに復活し通船180隻が参加する。				9月、『人間尊重五十年』が出版される。	
		11	宝物館建設の募金集めを開始する。					
昭和38	1963	3			78	3月、再興宗倉会金の創設総会。鎌崎海岸で戦争中のビストル弾丸1400発が見つかる。	出光興産の千葉製油所、竣工(1月)。出光興産、石油化学工業へ進出(4月)。「人の世界」と「物の世界」—40の質問に答える『出光興産社長室』	
		8	再興宗像1号に「宗像会に寄す」を書く、名誉会員となる。				本社丸の内一丁目(パレスビル)に移転する。	
		10	29日、学生大統合式、出光佐三社長が出席、城山中学教諭課で講演する				11月、出光興産、石油進歩から一時脱退する。	
昭和39	1964	1	再興宗像に「年頭感想」を書く		79	1月、山田・畠から経営、町会議が頃地調査を行なう。	1月、石油生産調整問題で、福田と会談。	
		4	宝物館の本館が完成引き渡し			1月、宗倉会が再興「宗像」が復刊する。		
		3	高山勉が落選する。					
昭和40	1965	3	東京で福岡県人会総会、会長に田出光佐三を選ぶ。		80	5月、佐三が芦屋航空自衛隊の訪問する。		
		5	21日、基参り、八所宮・御園(福丸正助翁)廟に行く。					
		8	武丸正助翁の伝記3,000部を配布				『題名のない音楽会』の放映開始する。	
		11	宝物館の開館披露式				9月、出光石油化学会社の設立。	
		1	宝物館の開館する。					
		2						
		4	宗像大社が宗像大社由縁作成、配布			宮地旗神社の宝蔵庫が破られ日本刀が盗まれる		
		5	NHK「自然のアルバム」で沖ノ島を放送する。			宗像御土産から宗像高校に資料を移動する。	5月、慈山市に出光金庫建設。	
		6	『宗像神社史』下巻を配布する。					
		5				上妻屋雄が英語「福間の又べい」出版		
		8	28日、佐三が宗像高校「宗像人の使命」を講演、宗像郡町村会館で宗像青年会議所講演講演、教育大学講和が実現する。			上野古墳群で横穴式石室を発掘	9月、千葉精油所に世界最大のLPGタンクを完成。	
		11	30日、宣誓会を行なう。				12月東郷田地で弥生中・後期の竪穴住居を発掘	
		12					上妻屋雄が『宗像伝説風土記』出版される。	
昭和41	1966	4	福岡教育大学の統合、赤間に移転する。		81	宮地旗古墳の保存修理が3か年で開始される。	・『マルクスが日本に生れていたら』春秋社	
		9						
		10	出光美術館の開館(東京)				10月、佐三が「出光興産の社長を退き、会長に就任。	
		12	出光丸竣工、宗像の中学生を招待する。			12月、鈴川県道拡張計画で大鳥居の移転する。	出光丸25万キントンタンカ一竣工、全国の中学生15,000人を招待	
昭和42	1967	4	喜島1号、石田正美「出光丸」を書く、大造営計画の協議		82	8月、宮地旗・國宝の意匠器の補修が終わる。		
		7	昭和大造営計画の打ち合わせを行なう。	沖ノ島3次講習				
		3	沖津宮・中津宮・辺津宮の境内を宮古跡に指定する。			4月～7月、校長着任招答願券が行われる。	・『マルクスが日本に生れていたら』春秋社	
		6				早川勇の伝記を福岡先哲教授が出版する。		
昭和43	1968	7	早川勇伝記の除幕式在吉村役場。出光弘が出席、宗像社大造営計画のため募金の開始される。		83		5月、出光石油化学会社第2期工事完成。	
		8	神社、白アリ被害で木版と柱殿の改良申請する。				8月、出光美術館で「宗像大社国宝展」を実施する。	
		9					9月、大峰山頂に東郷公園再建の造成が始まる。	
		10	宗像機関誌「宗像」発刊、神社広報誌「宗像」へ吸収する。				11月、大阪市立博物館で「宗像大社国宝展」を実施する。	
昭和44	1969	4	17日に宝満会で倉田主税と佐三が参拝する。20日、佐三が、宗像御体修理工事に着手。	沖ノ島3次	84	4月、宝満会メンバーが宗像神社に参拝する。	1月、松寿丸竣工。	
		5						
		7				6月、津幡透御手金会の結成。5月、宗像高校創立50周年	5月、計画社長が石油連盟会長に就任する。	
		8	宗像神社本殿解体修理に着手。			7月、早川勇の歌碑が吉武村役場前に建立される。	・『働く人の資本主義』春秋社	
		9	停電、太田可變らが『宗像史話伝説』を出版	沖ノ島3次				
		10	沖ノ島調査團が神湧へ宮地掛の古墳の調査			11月、倉田主税が逝去する。		
		11	三笠宮が宗像神社を参拝、11日に沖ノ島を視察。					
		12	神社の木版の解体が始まると					
		1	大和勝理事、大造営事業の視察。					
		2	復興期成会事務局を福岡支店より、宝物館内に移す。					
		3	宗像神社復興地顕祭・起工式。					
昭和45	1970	5	宗像高校創立50周年で岡崎敬の「沖ノ島について」の講演。	沖ノ島3次	85	宗像神社国宝展が小倉井筒屋で開かれる。九州初公開。		
		7				6月、頸園寺住持立部瑞祐が冥言宗御靈派大僧正となる。		
		12	宗像神社祈願殿が完成、新設祭。			7月、天保年間の沖ノ島御番所などを大宰府で発見される。	8月、沖ノ島丸25万キントンが竣工。	

元号	西暦	月	宗像神社と出光佐三	調査・報告	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
			4 宗像神社史の付巻が刊行。27年かけて3巻が完成。			1月、宗像神社宝物館で沖ノ島神宝展を開く。	11月、出光、三島由紀夫の葬式で弔辞を読む。	
			4 宗像神社境内の古跡指定名録が記載される。			3月、三郎丸古墳群の調査が実施される。	創業50周年。	
			6 九州一の大鳥居が正面に引っ越し。『宗像神社史』付巻。					
昭和46	1971	10	佐三、昭和大造営の進捗を視察する。		86	10月、桜京古墳を発見する。		
			11 江口、総工費10億円をかけて神社復興事業が終わり、遷宮大祭、佐三ほか出光関係者など、1,000人が参列する。			11月、宗像神社遷宮大祭が執り行われる。		出光計助
昭和47	1972	1	佐三が出光興産の店主となる。				1月、出光興産の会長を退き、店主に就任する。	
		3・4	佐三、宗像大社に参拝する。大造営の大廟・高麗会鑑。		87	5月、玄海町桜京古墳の発見を新聞が伝える。		
		7	出光佐三の生家方舟が映画『日本人』を福岡で上映。					
		8	宗像神社復興期成会を縮小、収支決算する。			9月、津丸古墳群で住居を発見する。	8月、佐三、米寿となる。	
昭和48	1973	2	浦口貞夫『創造と可能性の挑戦 出光佐三の事業理念』の出版。		88	宗像郡4町が遺跡の分布調査を開始する。	2月、佐三、白内障手術。4月、出光興産、ソ連石油輸出公団と契約。	
		9				大石岡ノ谷古墳で、銘文古墳が見つかる。	9月、北海道精油所の完成。	
		10				10月、桜京古墳を県指定に答申される。	12月、第1次石油危機	石田正實
昭和49	1974	5	総額1億1千万円で、第二宮・三宮の復興を決定する。		89	3月、三郎丸・城ヶヶ谷古墳群で、源氏詔明鏡が開催される。		
		9	第二宮・第三宮の造営工事始まる。					
昭和50	1975	5	宗像神社第二宮・第三宮遷宮の挨拶「御神徳の幕さ」を行い、復興期成会は300人を參集する。		90	7月、津屋崎福岡山笠保存会の発足する。	『永遠の日本-二千六百年と三百年- 出光佐三対談集』	
昭和51	1976	1	出光佐三らが古文書を神社に寄贈追贈する。		91	2月、津屋崎町勝浦峯ノ雅古墳で、石柱構造が見つかる。		
		2	宗像大社昭和大造営史記が出版。全国に配布される。					
昭和52	1977	10	宗像神社から宗像大社に名跡変更が認められる奉告祭。		92	7月、フランス共和国文化勲章コマンドール受章。		
		11				宗像の古代文化を考えるシンポジウムが実施される。		
		10	神室館の起工式が行われる。			津屋崎町妙正園古墳から劍・鏡・勾玉が出土する。		
昭和53	1978	11	宗像市名誉町民1号となる。		93	4月、上妻国雄が『宗像伝説風土記』上・下を出版する。		
		12	「宗像」宗像大社一間に名譽町民の祝辞が書かれる。					
		1				1月、宗像町久戸遺跡の調査が終わる。		
		2				2月、領国寺本堂を茅葺きから銅板葺きにする。	2月、イランで革命が起こる。第2次石油危機	
		3				3月、福間町・大門古墳の須恵器が盗まれる。		
昭和54	1979	4	沖ノ島の香炉・高機が重文指定答申される。		94	5月、宗像高校創立80周年、記念誌が出版される。		
		6	宗像高校創立80周年誌に石田正實が佐三の言葉を紹介。			宗像郡で歴史資料館建設準備委員会発足する。		
		9	沖ノ島の国宝・重文の修復するための修理委が発足する。					
		9						
		11	沖ノ島出土品147点を内田義真が大社に返還。					
		12						
		13	南嶋敬が『宗像沖ノ島』を刊行する。	「宗像・沖ノ島」				
昭和55	1980	10	11月、神宝館の開館する。		95	5月、津屋崎町今川遺跡から鉄鏡・金玉が見つかる。	1月、イラン・イラク戦争が起こる。	
昭和56	1981	2	社報『宗像』満20年、240号までを縮少版の製本し記念。		96	2月、日暮丸四世の竣工。出光創業70周年。		
		3	名譽町民、出光佐三の逝去、赤前に埋葬される。			4月、宗像市市制を施行する。	3月7日 97歳で死去。出光店主室『我が60年間』追憶を出版。	
昭和57	1982	4						
昭和58	1983	5				八所宮氏子が広島県戲島神社に返却の申し入れる。		
昭和59	1984	6				松前文書館が『さき古文書4点を公頃する。		
		7				須磨ケンヒ・浦古墳の発掘が終わる。	・『道徳とモラルは完全に違う』出光興産	
		9				宗像高校『堆土資料図版・目録』を占部玄海が出版する。	『出光の言葉』出光興産	
		11				八所宮に慈島神社の鍵が借用される。		
		12						
		13				8月、故出光佐三生誕100年祭が行なわれる。	出光興産店主室『我が60年間』第1~4巻を出版する。	
昭和60	1985	8	17日、記念式を中心公民館大ホール、故出光佐三生誕100年祭で映画上演、生家公開する。宗像市商工会主催。			宗像市文化財保護条例が施行する。		
		9				久原遺跡から鎧形埴輪が出土する。		
		11				教育大学旁古賀が久原遺跡説明会を開く。		
昭和61	1986	1	4 沖ノ島の神宝3,000点が修復が終わる。			古都玄海が『宗像の文学遺跡』を出版		
		4				宗像郷誌が復刊される。		
		6				松崎武俊の著作集の刊行する。		
		11	出光計助『二つの人生』			石井忠、荒瀬物語集が刊行する。		
昭和62	1987	9	出光昭介が『半子丸・正助伝始終』に序文を書く。			『孝子賞丸・正助伝始終』と遺稿彙考集が出版		
昭和63	1988	4				『宗像の歴史と文化財』を出版する。		
平成元	1989	4				宗像高校四塚金瓶の竣工、市史編纂室の設置。		
平成4	1992		『宗像大社文書』第1巻の刊行。					
平成11	1999		『宗像大社文書』第2巻の刊行。					
平成15	2003		出光真子『ホワット・ア・ラーマンめいど』の刊行。					
平成21	2009		『宗像大社文書』第3巻の刊行。			田熊石碑遺跡が国指定史跡となる。		
平成22	2010	3	川崎鼎亮『宗像高尙同窓会会報』に佐三のことが記される。					
平成23	2011	6					6月、出光創業100周年記念日には「日本人にかえれ」の名言が新聞広告に掲載された。	
平成24	2012	7	『海賊とよばれた男』講談社が出版される。			海の道 むなかた館の開館する。		
平成25	2013	4	『海賊とよばれた男』が本屋大賞となる。					
平成26	2015	3~5	むなかた館『出光佐三農』に27,000人が見学する。			田熊石碑遺跡の開園する。	3月、RKB毎日放送で『出光佐三と宗像大社』を放映する。	

宗像神社復興の完成 昭和 53 年（1978）10 月、神社神宝館の起工式が行なわれる。11 月に、宗像町名譽町民 1 号となる。社報「宗像」に宗像神社一同で賛辞が書かれる。

昭和 54 年（1979）6 月、宗像高校創立 60 周年となる。11 月、沖ノ島出土品 147 点を内田義真が大社に返還する。同年、岡崎敬の編集『宗像・沖ノ島』が刊行される。

佐三の逝去 昭和 56 年（1981）3 月、名譽町民の出光佐三が逝去、赤間に埋葬される。

（2）佐三と宗像郷土館・郷土会館建設への支援

経過 郷土館建設の気運は、宗像高等女学校に昭和 7 年（1932）9 月に赴任した田中幸夫教諭が郷土教育資料として授業の合間をみて郡内の各地に現れ、土器・石器・文献史料等を採集されたことに始まる。これらの考古資料は、空室の 2 教室を埋める状況となった。

昭和 11 年 2 月に田中は、『宗像の旅』の刊行による収益金 300 円を郷土館建設とする条件で、許斐仙太郎校長に寄付した。許斐校長が中村堅太郎（宗像町村会代表）を通じ町村会に相談したところ、貴重な品物が集められていることは郡のために非常な喜びであるから、相当の保存方法を講じようとの機運が進んだ。その話を知った、宗像高等女学校後援会や学校から、「教室を使うのは不便で困るだろうから、ぜひ保存の部屋を設けたい」と熱心な希望があり、昭和 11 年 7 月には、発起人会の第 1 回委員会が開催され、教室に似たような建物を設けることで、建設計画と予算 6,000 円で決議を得た。その内訳は、本館 54坪・戸棚・書籍等の備品・落成記念印刷物・庭園費などである。10 月には、建物を木造から鉄筋へ計画変更となつたため総額 1 万 5,000 円として当初予算が決まった。そして、郡内外の有志に向かって建設趣意書が発送された。

佐三への資金依頼 昭和 13 年（1938）4 月、出光に事務局が、宗像郷土館の増資の懇願、郷土館建築状況の報告に行き、6 月に 1,000 円で郷土館建設の賛助懇願に行き、再び門司出光商会に 1,000 円の同額で承認、再び 1,500 円で田中幸夫が再度懇願するなど、郷土館建設で最も資金賛助に期待されていた。最終的に建設費用の 32,000 円のうち 2,500 円を賛助している。最も多い寄附である。開館は、12 月 5 日・6 日に宗像郷土会館と共にオープンする。当時のことを出光は、「狭しとも誰しもが神郡宗像人百年の大計を確立すべき瀬戸際と奮闘したこと」に千円の追加賛助を了解した。この時に、田中は宗像出身の財界人を訪ね全国に訪ねたが、昭和 13 年 7 月 11 日に 1 時間近く熱心に聞いたのが出光佐三と回想している。佐三は、昭和 12 年 2 月に貴族院議員当選の御礼詣に行って宗像神社の荒廃を宮司に聞いていたので、熱心に聞いたのではないかと思う。田中は、賛助資金を集めるため「目的の為に我慢強く語った。更に追加一千円を受け、なんたる鉄面ぞ」と記している。そのため、「宗像郷土会館」の額の文字を佐三の父松寿に依頼している。佐三は、「郷土館落成の御盛典を祝し、新日本の重責に任すべき有為なる後進の輩出を祈る」と祝電を送る。開館には、3,000 人が見学に参加している。

意義 当時の米価を基準に現代価格にすると、1億7千万円に相当する。この時期、九州地方において、歴史資料館建設に寄付されたものとしては破格である。また、寄付金の筆頭2,500円は、出光佐三である。中村委員長をはじめとした、各委員の行動力と熱意はすさまじい。寄付金贊助者は、宗像会員で福岡県433名、東京28名・大阪20名など他府県から協力を受けたことが判る。郷土館の開館から閉館まで収蔵資料は、考古・古文書・古写真・図書・参考書、委託品76点などの内訳となり、総数1,493点となる。落成式の昭和13年12月5・6日には、寄付金贊助者、宗像高等女学校生徒、郡内の小学校生徒などが多数、来館した。また、参観者も九州大学の中山平次郎・竹岡勝也・春日政治・長沼賢海・鈴木清太郎・鏡山猛、東京国立博物館の後藤守一、国学院大学の大場磐雄、考古学者の森本六爾、京都大学の梅原末治・小林行雄、京城大学の藤田亮策、当時の学者たちが来館している。

事業期間は、昭和11年2月～昭和14年5月までの3年4ヶ月である。田中幸夫は、『冒形（むなかた）』に、詳細な目録と事業報告が纏められる。しかし、教育改革により、戦後に廃館となる。以後、放置された。

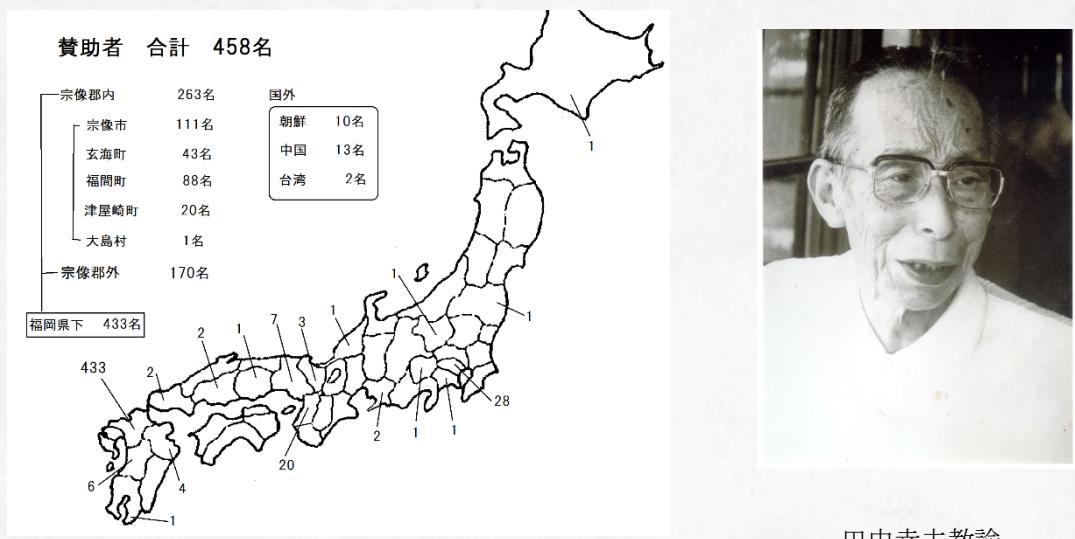


建設中の宗像郷土館と宗像会館(昭和13年) 占部玄海氏提供

田中幸夫先生（左端）と宗像の旅



宗像の旅



田中幸夫教諭

宗像郷土館の資金賛助者

(3) 宗像神社復興期成会会長就任と復興

復興の発端は、佐三が昭和12年2月に貴族院議員の当選のお礼詣りに、「拝殿の屋根の屋根が暴風で破損していて、そこにトタン板がかぶせてあるのを見た。なぜ修繕しないかと聞いたら、この建物は国宝であるから勝手に修繕できないと宮司さんの話であった。宮司さんは神社の縁起から国宝建築物の由来等について次から次と話された。私は愕然と驚いた。国民の祖神であり、神社のはじめであり、伊勢大神宮と表裏一体であらせられるところの宗像大神の御神域、御社殿は荒れるがまま放置してある。私は驚懼した」とある。また、「宗像神社の復興のために神社史の編纂を企画しておりますが、往昔の御神域の広大なるとその祭祀の盛大なるは、今さらながら、驚くほかありません。宗像神社の祭祀を知れば、神社の祭祀はすべて含まれるということである。全国の神社の数は三万社足らずと思いますが、そのうち九千社は宗像大神が御祭神であることから見ても、その御神徳の一端を知ることができます」と『人間尊重五十年』「宗像神社」の章に書かれる。神社の縁起と「裏伊勢」と話したのは、櫻本憲昌宮司とされる。

昭和17年（1942）11月22日に、清明殿で出光佐三・出光万兵衛・出光弘・伊東尾四郎・山本忠三郎・竹間保史宮司・小鳥居三思・宗像辰美などの氏子有志が宗像神社復興期成会会則を可決し、会長に出光佐三を選任する。昭和18年に①造営整備に関して現在の所を拡張すること、②上・下高宮の聖地として復興保存する事などの方針が決定された。



宗像神社復興期成會長 出光佐三氏の揮毫

昭和 18 年 8 月に発刊された『宗像』163 号に高橋昇「宗像神社復興計画の趣旨と経過を延べ神郡郷友一般の噴起協力を望む」に設立趣旨、経過、議事録が掲載される。併せて、宗像志江の「宗像神社復興期成会の設立」に会則が会員に報じられる。この前年には、出光興産本社を東京の東銀座に移転する。

事業は大きく、昭和 17 年～43 年までの第 1 次復興と、昭和 44 年～昭和 54 年までの昭和大造営事業の第 2 次復興に区別すると理解しやすい。

第 1 次復興 復興には、神祇院に宗像神社の由緒・学問的調査の報告が必要であり、同 18 年に神社史編纂が開始される。神祇院は、神宮に関する事、官國幣社以下神社に関する事や神官および神職に関する事、敬神思想の普及に関する事項を掌る機関であった。ところが、昭和 20 年（1945）の 8 月に敗戦になり、中断を余儀なくされる。

昭和 20 年 11 月 23 日に会長により、①復興問題は時機を待つこと、②調査資料は本印刷を延期することの今後の方針が示される。しかし、進められていた神社略史の稿本が、昭和 21 年 12 月が完成する。

竹原元凱が「宗像沖ノ島」の中で、「戦後、皇室や海の守り神としての海軍関係者からの庇護を受けた官幣大社も国家神道の禁止や農地改革などで窮屈していた。神官 3 人も内職でやっと食いつなぐ状況だった」と、当時の状況を記述する。

昭和 23 年 1 月に入山した鎮国寺住職の立部瑞祐は、『心の旅路』の中に「辺津宮は、結構大きいものの、さびさびとした、閑古鳥が鳴いている社でした。当時団体で寺社に参ってはならない、教職にあるものが寺社参拝をしてはならない、寺社が寄附を募ってはならないほど、マッカーサー司令部の施策が浸透して、とくにこういう旧官幣大社からは人心が離反していたように思われます。広い社務所に 7～8 名の神官が手持ち無沙汰に屯している」と、当時のことを記述する。

昭和 27 年（1952）4 月には、平和条約が締結され、政情が安定してきたので、再び、宗像神社の復興期成会が動き始め、2 月に宗像神社の拝殿などに国庫補助 53 万円と文化財愛護委員会が発表された。5 月からは、神社史の編纂が小嶋鉢作を中心に再開される。これ以降は、上高宮・下高宮の主要部分の用地購入が進められ、以後、継続して用地購入と民家の建物・墓地移転が行われ、昭和 32 年までに大半が境内地に登記される。実施したのは、期成会傘下に「宗像神社文化財復興奉賛会」が昭和 27 年に組織され、会長に貝島太市、理事長に出光弘、顧問が出光佐三となる。会員は、宗像郡下を中心に福岡

県下の数千人とされる。事業は、神社の文化財の本殿・拝殿の修復、祭祀の復興、高宮の復元、宝物館等の施設に資金3,700万円を募集し、下高宮の整備などを行う。そして、辺津宮拝殿・境内域の整備も国庫補助事業で、昭和30年にはほぼ竣工を見た。昭和30年に活動を終了される。

当時のことを葦津嘉之宮司は、「社殿修繕のみとする出光佐三の提案を多く者が支持していたが神官達が断ったと語る。そして「立派な社殿をつくつても参詣人がいなくては何もなりません。参詣人を呼ぶのはご祭神の神徳です。宗像は千五百年以上、人々の崇拝を集めました。その由来と歴史を解けば、神徳を慕って参詣人がつめかけるでしょう。カギは沖ノ島にあると思います。ここをぜひ調査してください。」と話したと竹原元凱が記す。

また、沖ノ島避難港整備で、遺跡の荒廃を心配した福岡県教育委員会の武藤正行は、調査の必要性を説いていた。そこで、復興事業に伴う神島調査の問題が検討され、昭和28年11月に開催された神社史編纂委員会で、沖ノ島の発掘が正式に決まる。

昭和29年(1954)5月、沖ノ島1次調査が実施される。12月に沖ノ島を国営漁港として4億5000万円(6年計画)で修築することが決まり、港の設置に伴い、遺跡の荒廃の心配が懸念された。この予想は的中し不幸なことに、港湾工事関係者の盗難があった。発掘調査を実施しなければ、多くの出土品が失われたと思う。昭和30年1月に田島・高宮の土地買い上げられる。高宮の地は、古代・中世の頃まで神域であったが、整備前は、私有地の畠地や山林となっていた。ここが古代風の祭場として再現された高宮祭場となる。

沖ノ島出土品は、昭和33年9月と同34年に重要文化財となり、昭和37年(1962)3月、沖ノ島出土の銅鏡などが国宝に指定される。沖ノ島の報告は、昭和33年『沖ノ島』、同36年に『続沖ノ島』として刊行される。驚くべき沖ノ島調査の成果は、あまねく寄附頒布されたが、頒布希望が多く、配布は一千冊となる。発掘関連経費は、5,632,765円とされる。

第1次は、沖ノ島調査を含めた神社史の解明と、聖地高宮などの用地購入と拝殿の保存修理と整備がほぼなされる。

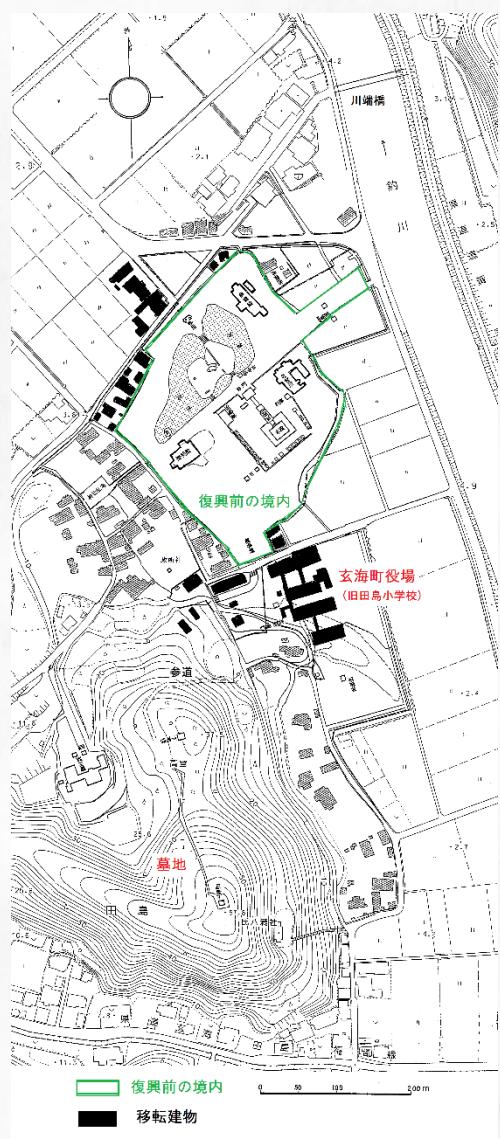
昭和37年9月には、長久手神事と呼ばれた「みあれ祭」が約400年ぶりに復活し、漁船180隻が参加する。この年9月に『人間尊重五十年』の普及本(A5版466ページ)が出版される。郡内の広範囲に280円の安価で頒布される。

さらに、復興期成会会長代理に佐三の弟の出光泰亮が就任し、宗像神社の宝物館の実務を取り仕切る。泰亮は、沖ノ島調査団の調査員(団長)として、第1次~3次調査に参加される。宝物館は、昭和35年に「宗像郡文化財共同収蔵庫」として建設計画が協議され、昭和37年に建設委員会が結成される。国庫補助事業の決定を受け、資金の募金が始まる。浄財は、総事業費の4,020万円中の2,890万円が、多くの宗像会関係者をはじめ、出光興産、倉田主税(日立製作所)などの

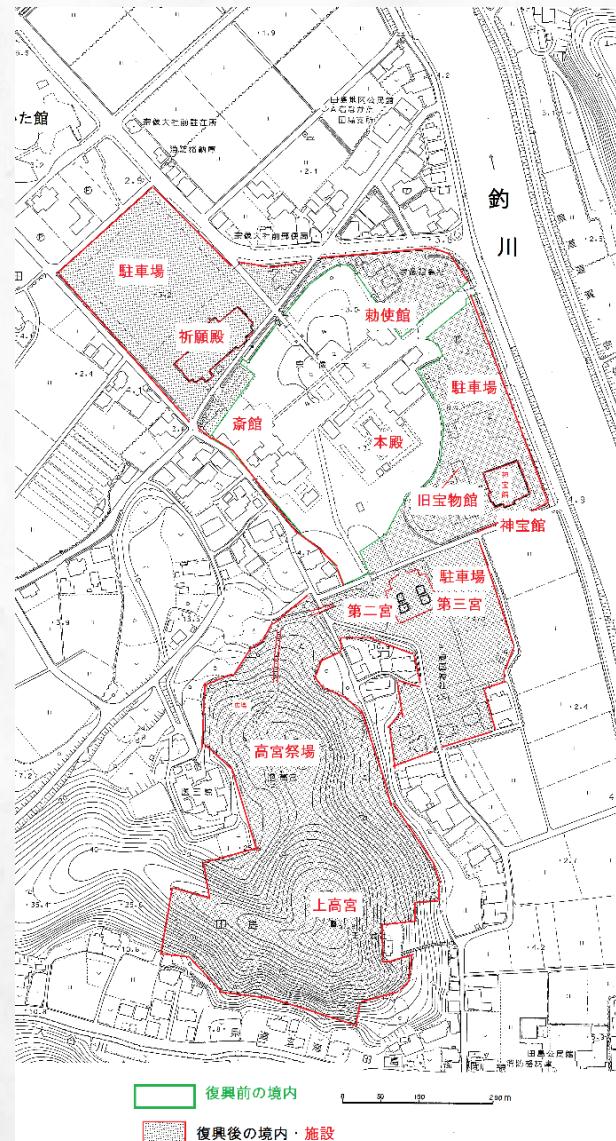
経済人からも支援を受けている。

昭和 40 年（1965）1 月に宝物館の開館、矢次ざまに宗像大社が『宗像大社由緒記』を作成、配布（4 月）する。NHK「自然のアルバム」で沖ノ島を放映（5 月）、『宗像神社史』上下巻・『続沖ノ島』が完成し、全国の図書館・大学の研究施設に寄附配布される。『宗像神社史』の完結 3 巻の関連経費は、2,902,947 円で、27 年間かけて刊行された。昭和 43 年 8 月には、東京の出光美術館で、「宗像神社国宝展」が開催され、1 万 5 千人の見学者があった。

上記の『宗像神社史』の調査・編集・刊行費、沖ノ島発掘調査費や整理・報告書刊行費は佐三の全面支援によるものである。



復興前（昭和 17 年）



復興後（昭和 54 年）

第2次復興 昭和大造営を行うために宗像神社期成会の組織強化・変更を行い、本殿の解体修理、宝物館、神社の祈願殿・齋館・勅使館等の諸施設、第二宮・第三宮、神宝館などの参拝者を呼ぶ為の諸施設を増設することになり、沖ノ島 3 次の学術調査が実施されることになる。出光興産の現地事務所が開設され、幹部社員を置き復興事業が本格化する。

昭和 44 年（1969）、4 月に沖ノ島 3 次予備調査が開始される。また、重要文化財本殿の解体保存修理が実施される。昭和 45 年（1970）1 月、九州で始めて宗像神社国宝展が小倉井筒屋で開かれる。

昭和 46 年（1971）4 月、宗像神社史の付巻が刊行される。4 月、宗像神社境内が国指定史跡指定となる。10 月に田島放生会に続いて翌月の 11 月 11・12 日、総工費 10 億円をかけて神社復興事業が進み、遷宮大祭が行なわれる。この時のことを滝口凡夫が書き留めている。「多年の念願を成就され、誠におめでとうございます。」参拝者のひとりがこう挨拶すると、佐三は「ありがとうございます。しかし多年じやありません。一生の念願でした。私にとってこんなうれしい日はありません」とある。翁が復興期成会を組織し、自ら会長として奔走してから、30 年を経過していた。

昭和 49 年（1974）9 月に、玄海町役場（元田島小学校）の移転で遅れていた第二宮・第三宮の造営工事が始まる。

昭和 50 年（1975）5 月に、第二宮・第三宮の遷宮の挨拶「御神徳の尊さ」、直会で永遠の日本を話す。昭和 51 年（1976）1 月に、出光佐三が自ら買い集めた中世の宗像神社文書を宗像神社に寄贈する。同月に『宗像大社昭和造営誌』が全国の図書館や神社、研究機関に無償寄附配本がなされる。昭和 52 年（1977）10 月、宗像神社から宗像大社に名称の変更が認められる奉告祭が行なわれる。

昭和 53 年（1978）10 月に、神宝館の起工式が行なわれる。11 月に佐三が、宗像町名誉町民 1 号となる。社報の「宗像」に宗像神社一同で賛辞が書かれる。

昭和 54 年（1979）11 月、沖ノ島出土品 147 点を内田義真が大社に返還する。同年、岡崎敬の編集『宗像・沖ノ島』の刊行がなされ、ほぼ事業は完了する。沖ノ島の調査成果は、岩上→岩陰→半岩陰→露天祭祀への変化を捉えた。社殿が出来る前のヤマト政権～律令国家の祭祀の様相が明らかになった。これ以後も、御神体を発掘した事例はほとんどない。

宗像神社の復興計画は、大正末年から何度も請願活動がなされたが進まず、出光が会長となる復興期成会を組織し、自ら会長として奔走してから、37 年を経過し、現在の宗像大社の景観と施設が整備された。その力の入れようは、現地事務所を開設し、幹部職員を配置するほどであった。

境内地は、『宗像神社史』の研究成果に基づいて古代・中世の境内範囲の用地購入や民家・墓地移転、玄海町役場移転までして整備がなされ、復興前の 5 倍の面積になり、現在の保存・整備された景観が出来上がる。祈願殿と駐車場部分を除いて、国指定史跡となる。

同様に大島の中津宮、沖ノ島においても用地購入・景観整備が実施される。そして総工費 10 億円の内、4 億円の浄財が出光興産の会社、従業員、販売店からの寄附によるものであり、出光関連企業で総額 7 億 4 千万となる。さらに、出光弘の新出光石油からも寄附があり、つまり、8 割が、佐三の人徳となる。そして、出光佐三と泰亮・弘の兄弟が一致協力して進められたことは特記される。同時に宗像神社宮司、宗像会、神社氏子会の強力なバックアップも見逃せない事実である。詳細な内容は、『宗像大社昭和造営誌』1976 年に纏められている。宗像大社が世界遺産の候補になりうる基盤は既にこの時期に、出光佐三と云う個性で結実したと見なしても過言でない。また、自ら計画・実施すること決めたならば、突き進むことを宗像人に示したことに意味がある。

(4) 佐三と先人の顕彰

①武丸正助の顕彰と維持（宗像市武丸）

武丸正助は、寛文 11 年（1671）に宗像郡武丸村に生まれ、宝暦 7 年（1710）に郡に親孝行が認められ、米 12 倍および田（1 反 7 畝）を貰う。さらに享保 14 年（1729）に福岡城に呼ばれ、親孝行で自田の税が免除され、農民の身分であるが「武丸」姓を授かる。宝暦 7 年に逝去する。黒田藩の褒賞で、有名人であった。黒田藩の領民政策の一環で、節婦も褒美が与えられた。地元では、戦前まで「節婦阿政（おまさ）」と武丸正助は共存した意識であった。

武丸正助の最初の記念碑は、明治 26 年の「郷友雑誌」で宗像会の吉田良春の呼びかけで建設される。

昭和 27 年に吉武村は、福岡県の農村振興計画指定を受け養老院（緑風園）と幼稚園の設置、正助翁顕彰会結成を進めていたが、前者は実施できたが、後者は資金不足で中断していた。時の村長であった立石昇、山下議、高山徳七郎が奔走していて、赤間出身の出光佐三に上京し、陳情の結果、「それは是非実現して貰いたい」と 20 万円の寄附がなされ、顕彰会の結成となる。昭和 28 年に武丸正助廟堂が改築・新廟となる。総事業費は、477,155 円の 213,000 円で 2 分 1 の援助である。

昭和 29 年（1954）9 月孝子、武丸正助翁の遺徳しのび福岡松源寺で、200 回忌讚仰法会が行なわれる。10 月 5 日には、200 回忌に遺徳をしのび武丸正助廟堂で、奉贊会祭主の出光佐三の祭文に続いて、子孫の武丸正兵衛の焼香があった。続いて、西本願寺の大谷光明上人の法話、高田旭操師の筑前琵琶、平田坂月師の博多仁和加などの余興も実施された。当時、西鉄の臨時バスも出されたと云う。佐三は、祭典にあやかり亡父藤六（松寿）の 13 回忌を赤間法然寺で行った。そして、佐々木滋著『孝聖武丸正助伝記』が 3,000 部を寄附配本して、供養される。佐三の挨拶が、『宗像』復刊 1 号にあり下記に紹介する。

「わたしは、子供の時から正助翁の親孝行のことを両親からいつも聞かされていてこの孝行な聖人があやかりたいと思っていた。今回はからずしも奉賛会のお世話をいたすことになって非常な喜びを以て、郷里に帰って来た次第であります。戦後日本の道義も廃退いたしまして、忠孝と云うことが軽んじられてきましたが、この傾向はこのままで終わるものではなく、日本人も又目覚める日があることを信じています。戦後十年の月日が経過いたしましたが、この間どうゆう変化があったかということを考えて見ますと、まず海外では“もう戦争はこりごりだ”といつていながら相変わらず戦争の用意が続けられている。誠におかしな現象であるが、これは言えば何事も理屈一点張りではいかんということあります。いい事した人は必ず恵まれぬ。このようなことは裏を返せば孝子正助さんのような誠実な人間に全世界の人々が成っていたならば、世界はとっくに昔に平和なっていると思うのであります。深い人類愛が人間鬪志の間をしみとおつていれば、あんな悲惨になくなつて済んだと思うのであります。また翻って国内の事情を考えますと、この頃の日本人はしょうがない。道義は退廃してどうしようもならぬと日本人を馬鹿の標本みたいに云う。これは日本人自身であります。ところが、外国人はどうかと云うと、“日本人は立派だ。日本の国は富士山のように立派だ。勤勉な国民だ。”という。軍人も一般人も褒める。日本人は決して悪い国民でない。正助翁がその手本である。この正助翁の心を心としていけば間違いない。立派な世界平和に貢献する事ができる。と私は思うのであります。」

昭和39年5月21日、赤間に墓参り帰福し、氏神の八所宮、緑風園・武丸正助廟に参る。8月に武丸



武丸正助墓



「孝」



「恩」

正助翁の伝記3,000部を配布する。ここに序文を書かれ、経済的支援がなされる。

この本は、子供向けに書き下ろされたのである。昭和39年6月、孝聖武丸正助翁遺徳顕彰会の代表である滝口凡夫によって、『武丸正助さん』が刊行される。本は、A5判38ページで、200円の安価で配布される。

昭和 41 年 4 月 25 日に正助翁 210 年祭が遺徳顕彰会によって行われる。宗像会との協賛である。以後、滝口雪雄により、昭和 62 年に『孝子武丸正助拾遺』が刊行される。その中には、出光興産の出光昭介（5 代目社長）の「眞の日本人を育てる鑑に」の序文が寄せられている。

「父は青年時代から、理想を掲げて実業界に入り、97 年の一生かけて、日本人の事業経営のあり方を実証してきました。その体験の上に立って、今日の世界は権利思想で行き詰まつてるので、この混乱を救うものは日本の道徳・互譲互助の精神であるという信念をもって、日本人の世界的使命を全国の青年や経営者たちに訴えておりました。父の頭に描かれていた、道徳の日本人の原型と言うべきものは、恐らく子供心に知った、宗像の先生や地域風や私の家風であり、殊に正助翁の姿であつただろうと思います。その意味で、正助翁の教えは正に、今日の日本及び世界に大きな示唆を与えるものであり、この度、正助翁の伝記・資料が集大成されたことは、非常に有意義なことであると思います」

滝口は、「善を積む」・「孝養を尽す」・「仁徳」・「恩愛」・「正義」等の道徳再興を大事とする良き宗像人の創造を願求する情熱の気魂がある方であった。彼は、元宗像町職員で教育大学移転の企画室課長で手腕を発揮した。そして、出光の精神を受け継がれた。武丸正助廟の改築移転も佐三の了承と援助なくては不可能であった。

平成 4 年（1992）正助ふるさと村がオープンする。

このように、武丸正助翁の顕彰事業に深く関与し、経済的にも多くの支援を継続的に行われていた。佐三の「孝」や「恩」の基層意識を窺うことができる。

②早川勇顕彰碑（宗像市吉留）

昭和 43 年（1968）7 月 22 日、明治 100 年に併せて計画されていた早川勇翁像の除幕式を吉武村役場跡で行われた。再興宗像会が会誌で、寄附を呼びかけたものである。早川勇顕彰会は、代表は石田重成町長、顧問が出光佐三となる。式典には、早川勇の子孫や、佐三の代理として出光弘（新出光石油）が出席、350 人が参集した。併せて、6 月に早川勇顕彰会より依頼されていた早川勇の伝記を桧垣元吉教授により 5,000 部が出版される。建設碑は、250 万円の浄財で建立された。

早川は、宗像会を組織するにあたり中心的な人物で、後進育成に尽力しており、佐三と共に通する部分が多くあったと思う。ただし、出光の書いたものに、早川の記述は殆どない。その原因是、早川が勤王のための家族を疎かにし、佐三の家族観と合わなかつたのかも知れない。

（5）佐三と戦後の宗像会

雑誌名が同じであるが、出版の経緯が異なるので、復刊宗像と再興宗像に区別する。

復刊宗像 戦後、昭和30年12月1日、神湊町在住の中野正之によって、復刊記念号雑誌「宗像」が個人名義で発行された。復刊の目的と心意気の言葉がある。

「故郷は祖先の墓のあるところ、父母兄弟の住むところ郷を離れ故山を望む懷かしむものであるまい。各自消息を報じて、親愛の情を表わし、郷友の交流を厚くし、知識を交換し、徳行を奨励し、老幼少長その責任尽くし、郡の福祉に邁進するとある」とある。戦前の『宗像』の趣旨を継承し、進めるためとする。



復刊の要望は、東京・福岡の他郡の要望に応えたものである。当時、東京・津屋崎・福岡県人会・八幡・門司・飯塚・中間・遠賀宗像会などの親睦会は残っていたが、中間宗像会と有高巖（立正大学）、さらに宗像出身の多い出光興産の幹部からも熱望があり、それに応えたものである。編集の主幹は、中野正之、編集長は吉田和三である。

復刊記念号雑誌「宗像」の復刊宗像に佐三が「宗像族の雄心を」の祝辞を書く。

「宗像神社は単なる一つの地方的な宗派神道の社でなく、畏くも天照大神の御神勅により建立された社でありまして、宗像郡民の精神的中枢であるというような、小さなものではありません。実はわが日本国民の信仰の中心であると信じています。戦後日本人は、神ながらの道を忘れ、祖先の道を忘れて、精神的な心のふるさとを亡失してしまったような感じがします。そうした意味からいつでも日本国民子々孫々相伝えて祭祀し奉るべしと御神勅に示されたこの宗像大社の神威を広く国民にしらしめん心の寄りどころを失って、右往左往している国民に、神に帰一して奉るという先祖崇拜、国民一致の精神を教え示すのは、我々宗像大社の氏子いうなれば、永らくこのうまし国土に住みついている宗像族に与えられた使命ではないかと考える」

と、宗像神社史・沖ノ島調査の成果を取り入れた独自の考え方を披露する。復刊には、交流を深めるために戦前の宗像会のメンバーのこの雑誌に対する期待、会員の顕彰記事が多くみられる。戦後の民主化

で多様な記事となり、檄文を書くのは出光翁ぐらいである。地域史に関するものが多くなり、歴史系雑誌の色彩が強くなる。その中で、日並文夫、上妻国雄、安川弘堂が執筆する郷土史記事が多い。2巻で終刊、会員は232人前後であった。

再興宗像 昭和38年3月8日には宗像町東郷で有志が会合し、宗像会の会則を基礎として、新しい宗像会が発足した。その翌39年1月15日、東郷にある町村長会事務所内の井原元彦名義で、再興の「宗像」第1号が発刊された。再興宗像1号に「宗像会に寄す」に佐三の祝辞が書かれ、名誉会員となる。再興宗像には、交流を深める為に戦前の宗像会のメンバーのこの雑誌に対する期待や会員の顕彰記事が多くみられ、上妻国雄（津屋崎町在住）が編集長となり、安川淨生・筑紫豊・松崎武俊・田中嘉三・安部郁郎・小方正人らが執筆者となり、懐古録と歴史記事、会員通信となる。

この頃の著名出身者は、安部清美（参議院議員）・赤間文三（大阪府知事・法務大臣）・有高巖（立正大学教授）・吉田法晴（参議院議員）・倉田主税（日立製作所社長）・梶木治郎（熊本営林局長）・安永渡平（八幡製鉄所副所長）・石松正鉄（住友石炭）・釜瀬富太（九州学園校長）・阿部徹（俳優）・真武直（福岡教育大学教授）などが知られる。会員数は、約800人であったが、組織の賛助会員が多く、4年間で19号まで刊行し終刊となる。

この時期は、高度成長期を迎える人々の移動が当たり前となり、閉鎖的な共同体（同胞意識）が崩壊し、テレビの普及や出版物が多数あり、雑誌の役割が終えたと見る。昭和43年（1968）10月、宗像会機関誌「宗像」廃刊、神社広報誌「宗像」へ吸収する。

昭和45年4月10日、東郷の宗像会発行の「宗像」と神社発行の「宗像」とが合同して、宗像神社から一元的にこれを発行することとなった。昭和50年1月、現在の発行部数は約5,000部とある。

（6）鎮国寺の復興、東郷公園の再建

①鎮国寺の助成（宗像市吉田）

安部照生の「鎮国寺」『神郡宗像8号』2015年に記載があり、立部瑞祐の自伝『心の旅路』昭和57年が出版されていることを知った。安部によると、「昭和30年は開基1,150年を迎える。・・・昭和33年落成の大護摩堂建設費に175万円を寄附される」とある。現在の価値としては、当時の初任給が1万5000円であるから、10倍ぐらいとなろう。

鎮国寺は、弘法大師が唐より帰朝後、日本で最初に開基された由緒があるとする名刹であるが、昭和23年に瑞祐師が特命の復興住職としてこの寺に来た時、まず驚いたのが荒れ果てた寺の様子だった。屋根がはぐれて雨漏りする。床は朽ち果て落ちたままという荒廃ぶりで、箸一膳、茶碗ひとつなかつた位だから、もちろん明日の米の蓄えなどない。本尊の五体仏以外は既になくなっていたようだ。出

光美術館蔵の両界曼荼羅図は、流失品が購入される。本図は江戸時代前期～中期まで鎮国寺に所在が確認される。

瑞祐住職と佐三との出会いは、「鎮国寺の入山当初（昭和23年）にさかのぼる。このとき鎮国寺復興の抱負を語ったところ、社長は予定を変更して寄ってくださり、年に二度、三度、宗像神社に参詣される時はこちらも参ってくださる」とある。

大護摩堂の建立（昭和33年）した頃で、勧業行脚に全国を募金で歩いていた。建立の負債の175万円を抱え、身動きが取れず佐三の弟の出光弘（新出光石油社長）を通じて、佐三に会うことになる。立部瑞祐の自伝『心の旅路』が引用する。

「鎮国寺の事情を説明し、高利貸しから金を借りているときつい叱りを受けた。口調は丁寧だったけど佐三氏の言葉はわたしの肺腑を抉ってきて、じっと首を垂れていたが、・・・わたしの命のある限り・・・絶対にお返します。・・じつは生命保険にはいつております。死ぬつもりはありませんが、返済できないときは死ぬような成行きになるかも知れません。[わたしもずいぶん大勢の人と付き合ったけど、あんたは本当に命がけやな]と、返済額を融資された。・・1年三ヶ月後に返却するが、このお金を差し上げましょうと」

と詳しく記述される。そして、瑞祐門跡は、「わたしの人生にとって、これは涙の出るほど嬉しかった思い出の一つです」と回想される。佐三は、和尚の命がけの心意気に鎮国寺の復興を確信し信頼したのだろう。

また、鎮国寺の復興事業を親身になり、宗像郡人会を結成し、出光泰亮・吉武辰夫を幹事となり奔走し、東京虎ノ門の共済会館で発会式となる。顧問は、佐三と倉田主税（日立製作所社長）となる。会は、宗像会の結成と考えた人が多く、一杯食わされたと冗談を云われながらも、鎮国寺の寄附集めの会であった。この会でのそううたる人脈が、後日の募金行脚の旅に役立つことになる。この宗像郡人会は、後に東京宗像会となる。

瑞祐住職は、大護摩堂建設後に、境内拡張整備、客殿、諸堂宇、駐車場の整備を完成させ、名刹の大寺院を復興する。こうした苦境を乗り越え 2,500 万円に及ぶ淨財を独力で集め、鉄筋コンクリートの大寺院を建立し、西国随一を誇る大寺院にまで築きあげた。「寄附は余計に集めようという精神では集まらない」と云い、「誠のあるところ以心伝心、おのづから淨財は集まる」と云う師の言葉には、苦行を乗り越えた行者の信念を含んでいる。

立部瑞祐は、佐賀県鳥栖市生まれ、8歳で久留米市安国寺に入ったが、のちに伊予小松の香国寺に修行された。彼は、後に自坊を離れ本山の京都市の仁和寺に出仕することになる。この頃は、出光弘の好意と支援を受け、後に第43世の仁和寺門跡と真言宗御室派管長に推戴される。

鎮国寺の復興は、佐三・弘の兄弟の支援・寄附と宗像会の結束によるものである。また、神湊魚屋の女将、吉武りゅう・繁子の入山後に粹な支援で支えられた。

こうして現在の境内は、諸施設が復興整備され、宗像大社と共に宗像の由緒ある寺院である。寺院の歴史については、「中世宗像神社と鎮国寺」を『むなかた電子博物館紀要4号』（2012年）に書いたので参照して頂きたい。

②東郷公園の再建

東郷公園の助成（福津市渡） 東郷平八郎元帥の遺徳顕彰施設として戦前に大峰山に完成していた。津屋崎港口には、日本海海戦で捕獲されたロシアの「アラキシン」が昭和14年に海軍から払い下され、港に繋がっていた。海軍思想普及の展示館となっていた。明治百年を記念して、日本海海戦60周年を契機に東郷神社改築と宝物館を計画中だった「東郷神社宝物館及び養真閣再建期成会」では宗教法人の許可もあり、昭和43年5月27日に郡内外の名士参列のもとに、地鎮祭を行なった。敷地外郭に4千坪を発起人の安部正弘が寄附、造成が行なわれた。約2千坪の社殿及び宝物館建設用地と駐車場が6月8日に完成し、本殿の工事を着手、同44年5月に竣工している。宗像会会員の安部正弘が、佐三や倉田主税の寄附を呼びかけたものである。安部正弘は、倉田主税の子供の頃からの知人であった。

宗像には、日本海海戦の記念物が多い。沖ノ島の現地大祭は、この日が契機となり、今日も続く。明治38年5月27日には、沖ノ島沖海戦の砲音が玄界灘から聞こえたとの証言が多い。戦後は、戦争に関するものは全て負の遺産と考えられていたが、今後は平和学習の資産として活用できると考える。

（7）福岡教育大学の移転統合

福岡学芸大学誘致と福岡刑務所誘致については、当時の宗像町長であった高山勉の『たった1460日されど1460日-神郡宗像に挑戦した男-』（平成4年）があり、行政側の具体的な内容がある。また、川口洋一「刑務所と学芸大」『宗像市史』近現代編に詳しく経過が纏められる。併せて読むと興味深い。これらを引用しながら、要点を纏めた。昭和34年秋に福岡刑務所の宗像誘致の話があり、地元吉武の要望もあり、ほぼ決まる方向で進み、残る水問題で水源探しに全力を挙げていた。

昭和35年5月29日に町長選挙で、「教育・文化・住宅都市」を掲げた教員出身の新人である高山勉が当選した。町長に選ばれた高山は地元吉武であり、誘致を好ましく思っていなかった。東京に上京し、出光佐三社長に挨拶に行った。当時のことを下記に引用する。

“

「出光社長は、法務大臣から教えられはじめて知ったという刑務所誘致にひどく不快感を示した。現状は水問題を残すだけで九分九厘決定済みの説明を受けると、・・・その夜に宗像出身の在京大手社長を集めて懇談の場が設けられた。そろって反対の意向。・・・町長の持論の政策（教育・文化・住宅都市）に共感を得て、刑務所誘致見直し思い立った」

と高山・河口により記述される。当時の法務大臣は、岸信介2次内閣の井野碩哉である。

帰郷後に議会で経緯を説明し、再度議員が上京し出光社長に刑務所誘致反対の意向を確認し、学芸大学誘致への3億円寄附の支援も約束された。以後、昭和36年12月、高山勉町長が、福岡刑務所の宗像移転を断り、昭和37年7月、福岡学芸大学設置促進協議会が宗像町で発足した。町長や行政は多大な困難を乗り越え、昭和38年4月、福岡学芸大学の宗像移転が決まる。建設予定地は、赤間・陵巖寺、石丸地区にまたがる城山山麓一帯で、山林・田畠・県伝習農場跡・民家7戸・町営住宅12戸の所在地で、12万坪で(39.6ha) あった。当時の国立大学では、収容学生数に比して全国最大であった。用地買収費は、7千万円と見込まれ、当時の宗像町年間予算が2億円前後であり、3分の1の額であった。用地買収費は、7千万円は出光興産から借り入れた。後に、3千万円は宗像町へ寄付される。誘致の条件の10万坪以上の国への無償譲渡の用地買収は進んでいたが、文部省の宗像移転は決定されていなかった。無謀と云える取り組みは、昭和38年4月に文部省の学芸大学統合移転の決定がなされ、軌道に乗る。

この困難を極めた用地買収承認の地主説明会での、出来事が記述される。土地地権者は、180人とされる。佐三の説明が記述される。

「出光社長が宗像神社参拝のため宗像にきておられるので、社長にも出席いただきました。席上、社長は学芸大をこの赤間の土地に建設する建設するために努力しているので、どうか皆さんも協力して下さい。先日町長、議員さんたちが上京されたとき、もし大学統合が実現しなかった場合、買収地はどうなるか心配のようだったので、私の意向を伝えておきましたが、そのときは私立の出光工業学校でも建設する覚悟をしています。・・・福岡県教育会のため、町と赤間発展のために御協力下さいと懇願された。」

と高山町長が回想する。

昭和38年10月22日、福岡学芸大学の統合起工式に出光佐三社長が出席する。昭和40年11月、福岡学芸大学の赤間統合校舎で授業が始まる。昭和41年(1966)4月に福岡学芸大学の統合、赤間に統合移転し、福岡教育大学となる。昭和39年に「年頭所管」で教育大学の設置の抱負を再興『宗像』2号に書く。

「国民の祖神宗像神社の神域である宗像の地にも再び黎明が近づいて、城山の山ふところに教育大学が生まれんとしている。日本民族は数千年の長い間、皇室の恵みによって平和を楽しんできたが、こ

の民俗を育てていくものが、日本特異の教育であり、これは学問の切り売りでなく人間の育成を中心とするものである。その意味において、聖地宗像に教育大学ができるることは非常に意義あることである。

権利思想に基づく対立闘争によって完全に行き詰ってしまった世界の人々が、皇室を中心として一致団結している日本民族のあり方を認識し、その民族を育てた教育のあり方を研究するようになるのは当然の筋道である。宗像の教育大学はこれに対して必ずやよい回答を与えるであろう。年頭に際して、この意義ある教育大学を抱く神郡宗像人はいかなる心構えをもって進むべきか、相ともに考えたいものである。」

赤間は出光生誕の地元であり、九分九厘決定の刑務所移転を高山町長と共に学芸大統合に転換し、福岡教育大学の統合移転となった。昭和35年～38年の出来事である。出光は、学芸大学誘致に関することを昭和26年3月の『人間尊重五十年』「夢」の中で赤間町制50年の事を、下記のとおり記す。

「赤間の町会に来て皆に会ってもらいたいとのことであった。仏事の中を抜け出した。町長や有識者の話の中に、昨年町制50年のお祝いをしたが、町はいっこうに発展しないで困っているとの紋切型の話があった。私は次のような所感を述べた。事業には立地条件があるから、条件の悪いところには事業は起こらない。宗像郡は昔宗像神社の御神域である。大神の御神徳によって人情敦厚、気風剛健の特色を持っていて、多くの教育者を出している。人間をつくることには優秀の立地条件を備えている。事業を起こして金を儲けるだけが人間の事業でない。人をつくることこそ事業中の大事業である。この方向で進まれることをお勧めする。ただし、こんな大事業は簡単に短時日の間に出来るものでない。ことにお互い現代の国民は戦争をもとどめえなかつたような弱い落第生であるから、われわれの子供や孫の時代にこの事業を完成する覚悟があらねばならぬ。まずお互いの家庭教育から始めるべきである・・・・私の言う人は、他人の金や恵みを期待しているような依頼心をもつ人をつくれと言ったのでない。まず自分のことを完成し、その余力をもって人のために尽くすような人を希望するのであって、依頼心のある人などは将来とても人のために尽くす人でない。排除すべき人である。・・・人間尊重は郷里へも徹底していない。人に頼る、さらに人より奪う、この思想は権利思想の履き違いである」

と答えたことが記述される。昭和25年の事と思われる。学芸大学の誘致10年前の事である。彼は、思量深いので、宗像の特性を見抜き、早い時期から宗像を教育者の町とすることを考えていたようだ。



城山より赤間を望む（昭和30年頃） 福岡教育大学の移転前の景観 神山義信氏提供

ところで、高山は2期の町長選挙で落選する。前掲の本人自著に教育大学の誘致が原因と記す。

「用地の立木などで・・・普通の買収慣例に従って一歩引いて地主主張通りに決定した。この価格決定が将来、私の政治生命を短くした原因になるとは、このとき思いもしませんでした。」

落選した数日後に陵厳寺の佐三の兄宅で、出会っている。昭和39年5月20日前後のことである。その時の佐三の会話が記述される。

「今回ることはまことにすまなかつたね。刑務所の件で君に無理押しをして、ついに落選へ追いやつたことに対して、ほんとうに申し訳ないと思っている。深くお詫びするよ。しかし、決して力を落とすなよ。神郡宗像に刑務所は絶対ふさわしくないという君の力強い信念と、戦後荒廃しきった福岡県教育界の立て直しのため福岡学芸大学の統合に全力を尽くして、全国で何人とも成し得なかつた大事

業を見事に成し遂げた君の事跡は、宗像教育界、福岡県教育史に一番の功労者として永く残るだろうと・・・」

と賛辞があり、慰められたとされる。苦労人の佐三の義理・人情を知ることができる。そして、3千世帯が赤間に集まり学園都市を形成する。

以後、宗像は高山町長の「教育・文化・住宅都市」へと進み、昭和41年の東海大学福岡教養部・付属第五高校が開校する。佐三の影響を受けた滝口凡夫が、平成13年に日本赤十字九州国際看護大学を誘致し、学園都市となる。出光佐三が福岡教育大学の統合移転を実現したことにより、50年後の今日を方向づけたとも云える。

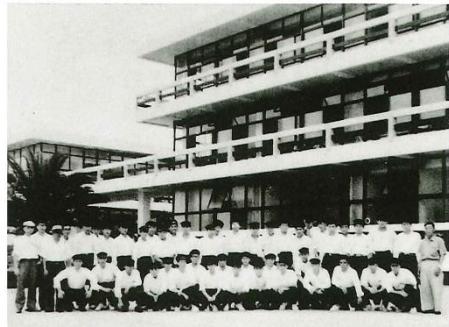
(8) 出光佐三の宗像での講演会

講演会は、知見したところでは、宗像高校、城山中学校・青年会議所で行われている。城山中学校の講演は、福岡学芸大学の統合起工式に出光佐三社長が出席した際に、実施されている。城山中学校は、彼が入学した赤間尋常小学校の跡地に戦後に開校していた。

宗像高校の講演は、高山勉町長の時代で、出光興産の石田正實・麻生和正が出身高校によるところが大きいと思う。昭和35年(1960)に宗像高校にて記念講演(創立40周年)で講演する。翌年から数年間にわたり、施設見学は出光興産徳山工場へ行くことになる。



出光興産社長 出光佐三講演会(昭和35年)



出光興産(徳山工場)見学 昭和36年

また、昭和38年10月22日に城山中学校講堂で講演する。この前に城山中学校の旧体育館建設、旧赤間尋常小学校の図書室、赤間保育園に助成が行われる。

昭和40年(1965)9月26日、宗像高校で2回目の講演会「宗像人の使命」を行う。再興宗像8号にその内容が収録される。

同年9月に宗像郡町村会館で、宗像青年会議所の出光佐三の臨席講演が行なわれる。

昭和44年（1969）4月20日、宗像高校体育館で3度目の佐三の記念講演会「日本人の世界的使命」が行なわれる。『出光佐三翁生誕百周年記念誌』に講演趣旨が収録される。この後に、宗像高校創立50年に後進育成のために、千万単位の多額寄附が行なわれる。

昭和45年（1970）5月、校舎の全面建て替えがなされ、宗像高校創立50周年が実施される。続いて、新体育館が佐三の助成により建設される。

宗像高校の出光講演録

「宗像人の使命」

今度の戦争に敗けて日本人は腰を抜かしてしまい、その上更に占領政策によって徹底的にいたみつけられ完全に外国色に塗りつぶされてしまっている。しかし本来の日本民族というものは、人を中心として心のあり方を知っている、世界で唯一の民族である。ところが外国は物を中心として対立斗争してきた民族である。その外国が今は完全に行き詰まって、いつ核爆発を頭上にうけて全滅するかも知れないというところまで追いこまれてしまっている。そこに日本民族の人間を中心として平和にしあわせに暮らすというあり方が、大きく浮び上ってきたというのが今日の世界の情勢である。

日本と外国のあり方がどうしてそんなに大きく違ってきたのかということであるが、それは一言でいえば祖先の違いであるが、外国の祖先は我欲の祖先であり、征服革命の連續が外国の歴史である。そういう征服、圧迫、搾取に対して出てきたのが自由や権利を主張する思想であり、自分や物に頼る個人主義、物質尊重の考え方である。ところが、日本の祖先は無私無欲であり、国民に平和にしあわせに暮らすとを教えられてきた。それをもっともよく現わしているが、無防備の皇室と無防備の国民である。そこで日本人は平和に、しあわせに暮らすことを第一義とし、物や金は第二義的なものとするようになった。そして主張することにより譲るという互譲互助の精神とか、恩を知るといいうようなことを大切にするようになった。こういう日本民族のあり方が世界の平和と福祉をつくるものであるが、外国人にはその体験がないからどうしてもわからない。そこで日本人が早く本来の日本人に帰って、世界に平和福祉のあり方を教えなければならない。私が日本人に帰れとか、日本人の世界的使命とかいっているわけもそこにある。

ところがその日本人の中でも、その急先鋒の役目をしなければならぬが、宗像人である。宗像という土地は宗像神社の御神徳によって醇風美俗の地方色をもったところで、宗像人は非常に素直でやさしく一致用結する。而も人間的に芯が強く、積極的な性格も持っている。宗像人はそういう人間として大切な秀れたものを持っている。私は出光の経営がどうしてそんなに力強いのかと聞かれた時、順序立てて説明する場合には必ず自分が宗像に生れたお蔭であると、冒頭に言う。私が他の土地に生まれて他の学校に行っていたならば、今日の私はなかつたと思っている。

私の子供の時は、宗像というところは小学校の名校長、名教員を出すので有名であつた。そしてそれは宗像神社の御神穂のお蔭であるということを聞かされていたので、子供心にも神の存在を知った。一方この醇風発俗の土地にも、一般の良民から毛虫の如く嫌われている人が何人かいたが、その人々は外国の権利思想、自由思想の人であるということを聞かされて子供心に外国思想は悪いという観念を持つようになった。これは外国思想の悪い面のみを見せてつけられて、良い面は知らされなかつたということだが、私は今日では日本人として自分育つのに非常に良かったと思っている。そういうわけで私の体験からしても、宗像人は本来醇風美俗で、人間として大切なものをもっているわけですから、この宗像人が本来の宗像人はどうあるべきか、真剣に研究されて、そして日本人が本来の日本人に帰る急先鋒となって貰いたい。幸い昨年（昭和39年）のオリンピックで日本人も漸く目覚めてきたので、君たち若い宗像人が、日本民族が世界に平和と福祉のあり方を教えなければならない。そのチャンピオンは宗像神社のもとに育った自分たちであるというような高い尊い目標をもって進んでもらいたい。

宗像高校における講演要旨（再興宗像8号 昭和41年11月）より引用

”

「日本人の世界的使命」

今日の世の中くらい簡単になった世の中はありません。これを、複雑に考えて理屈ばかり言っておれば、これくらい複雑な時代はありませんが、簡単に考えれば、これくらい簡単な時代はありません。

これはどういうことかと言うと、今日の世界は、個人主義、権利思想、自分のことばかり考えて権利を主張する、その結果対立闘争して行詰ってどうにもならなくなっているということです。そしてそれを救うものは何であるかと言えは、すこぶる簡単なことで、お互いに譲り、お互いに助け合う、互譲互助の精神であります。戦後おこったことに、二つ大きなことがあります。

一つは交通が非常に早くなつて、世界中を一日で廻れるようになっておるから、世界は福岡県よりも狭くなっている。次に核爆発が発明されて権利思想で対立闘争しておれば、それが頭から落ちて世界の人類が全滅するという、この二つのことです。

交通が非常に早くなつて、世界が狭くなつた。そこに百数十の異民族が住んでいる。それで、個人主義、権利思想で対立闘争することは、もう、許されない、時代遅れであるということです。権利思想の善し悪しを論ずる余地がなくなつておるということです。そういう簡単な時代なのです。そして権利思想で行き詰った世界を救うのは、日本の互譲互助であります。

まず、産業界が日本人の和の力を發揮して世界を驚かす、これは既にやっています。その次に、日本の教育が立派になる。先生の尊さと先生の教えによって、人間が育てられることを示す。政界も、今のように喧嘩、なぐり合いの場所ではなくて、日本の国政を真剣に討議する本当の議場にする。そうすると、このような日本を世界から見て、何と立派な国かということになって、外国人が自発的

に、日本人の在り方を研究するようになる。その時に、はじめて日本の互譲互助とか、道徳が理解されて、世界の平和、人類の福祉の基礎になると思うんです。そこに、日本人の世界的使命があります。

「出光佐三翁生誕百周年記念誌」（昭和44年4月20日）より引用

石田正實（出光興産会長）は、これより10年後の昭和54年（1979）に、『宗像高校60周年誌』に「宗像の歴史と伝統に自覚と誇りを」を記し、宗像中学4回生の思い出と佐三翁の言葉を紹介している。

「私が宗中を卒業したのは昭和2年ですから今年で52年が過ぎたことになります。しかし当時の思い出は今でも鮮やかに残っております。私の家は赤間の陵巖寺ですから東郷までは約一里の距離です。それを毎日、下駄をはいて歩いて通学したものです。今でも足腰が強くて健康に恵まれているのはその時のお蔭だと思って感謝しております。

当時の校長は初代校長の松木五郎先生で修身を担当されていましたが厳格な方でした。また体育の吉武先生も厳しい中に人間味あふれる先生でした。宗中の草創期でしたから全学に活気が満ちて、質実剛健の校風が培われつつあった時です。いまからふりかえって、私の人生の極めて貴重な時代であったことを痛感します。

私は出光興産に入社して今日に至っておりますが、出光興産の創業者である出光佐三氏も赤間の出身です。今年95才になる出光氏はかねがね「私の今日あるのは、自分が宗像に生まれ、宗像大社のご神徳の恵みを受けたからである。」と言っております。

宗像大社といえば、私どもは子供の頃、田島放生会のお祭りに、友人と手をとり合って長い釣川の土手にそって二里の道を歩いてお詣りしたものです。今でもその頃、一面の田に黄色くなった稲穂と釣川の土手に咲いていた彼岸花の美しさが思い出されます。

この宗像大社は御承知の通り、天照大神の三人のお姫様（田心姫神（沖ノ島）瑞津姫神（大島）市杵島姫神（田島））をお祀りしております。この天孫降臨に先立って、三人のお姫様は天照大神のご神勅を奉じて宗像の地にお鎮まりになられたのです。そのご神勅とは「汝ら三はしらの神、宜しく道の中に降りまして、天孫を助けまつりて、天孫に祭かれよ。」というもので、ご神勅の第一号と言われております。これは日本書紀に書かれております。

出光佐三店主に言わせますと、これは結局、日本の皇室と国民の間柄を示したもので、皇室に対する国民としての基本がここに示されているというのです。宗像大社が国民の祖神と仰がれ、また裏伊勢と呼ばれて尊崇される所以です。このご神勅はいま大社の拝殿に大きな額になってかけられていることは宗像の人はご承知のとおりです。私どもの会社にも宗像大社がお祀りしてあって、ご神勅の小さな額もかかげてあります。

宗像郡は、昔は宗像大社の神領になっていたために、神郡宗像といわれてきました。そしてご神徳をうけて、古来、醇風美俗の地方風ができており、昔から小学校の名校長、名教員が出るので有名でした。わが宗中、宗高の伝統もその根源を辿れば、宗像大社に帰することは間違いないと思います。

さて、今日の世界の様子をみてみると、対立と闘争が世界的に広がっています。世界中の人々が平和と福祉を望んでいるにもかかわらず現実の世界は反対の方向に進んで益々行き詰まっています。これについて出光佐三氏は「日本以外の外国は物を中心とした“物の世界”であり、権利思想、個人主義の国である。日本は人を中心とした“人々の世界”であり、和、互譲互助、道徳の国である。今日の世界の行き詰まりは、物の世界、物質文明の行き詰まりであって、これを解決するものは日本古来の道徳であり心のあり方である。」と言っています。私もそうだと思います。

このように日本人のあり方が世界的に注目され、殊に欧米では日本が盛んに研究されているということは、結局、世界の行き詰まりを解決するために日本のもの、東洋的なものに精神的活路を見出さんとしている実証だと思われます。

そういう世界的な状況の中で、日本人としては、現在の自分の姿をかえりみて、真剣に自問自答し、眞の日本人の姿に立ち帰るよう努力しなければならないと思います。その点では宗像は先にも述べたように、昔から神郡宗像といわれ、名校長、名教員を輩出した尊い実績と風光明媚な自然環境と醇風美俗の地方風をうけ継いでいます。宗像はいわば日本人の心のふるさとと言ってもいいと思います。宗像人の一層の自覚が望まれる所以です。そして特にこうした時勢の中において、宗像の中心的存在たる宗高の責任は極めて重いと言わねばなりません。」

昭和 56（1981）年、96 歳で出光佐三は逝去する。石田正實は、眠る佐三の横顔を見ながら、「この人は、生涯ただの一度も私に〔金を儲けろ〕とは言われなかつた。40 年を越える長い付き合いだったので……」と嘆いたそうです。

（9）出光丸の竣工見学

日本の将来を担う中学生にも出光丸を見せたいと、宿泊や交通費もすべて会社で負担、全国の中学生 15,000 人を招待する。この時、宗像郡からも中学生が参加する。佐三が発案し、11 ヶ月の日時をかけて周到に計画され実行された。

石田正實の「出光丸」が、再興宗像 14 号に記事が収録される。彼は、宗像の赤間町出身で宗像会終身会員、出光興産の三代目社長である。

出光丸は、全長 342m、重量 21 万トンの世界一タンカーで、東京湾を後にして、ペルシャ湾に晴れての処女航海に発ったのは昭和 41 年 12 月 12 日であったが、3 月 12 日には、第二航海を終えて徳山港に入港した。世界注視の中で、極めて順調に運航して、その威力を發揮している。

石田によると、「ペルシャ湾の標準運賃はトン当たり 10 ドル（3,600 円）であるが、出光丸の場合は約 500 円である。3,000 トン級の内タンカーの運賃でいえば、東京－名古屋港間の海上運賃と同じで、中近東から日本に運べるわけである。まさに海上運賃の革命といってよい。現在世界の原油の埋蔵量の 60%は中近東にあるといわれているし、日本に輸入される石油の 80%が中近東からである。その中近東からの運賃が、東京－名古屋間の内航運賃に等しいとは、中近東の莫大な石油資源が日本の内地にあるといつてもよい」、しかも石油の消費量は年々増加して、昭和 42 年度は 1 億キロリットルを超えることになり、昭和 60 年には 4 億キロリットルを超えるという、エネルギー調査会の報告がある。

石田正實「出光丸」再興宗像 14 号に収録を下記に引用する。

「出光丸の竣工に当つて、昭和 41 年 12 月 7 日から、11 日まで、5 日間にわたって、横浜根岸で竣工披露を行った。第 1 日は、高松宮、同妃両殿下の御臨席を得て、盛大に引渡式、竣工披露が行なわれ、第 3 日には、皇太子殿下の御台覧を仰ぎ、第 5 日目には、佐藤総理、大橋運輸大臣等の見学があった。この 5 日間の総見学者数は約 3 万人、そのうち、1 万 5 千人は、北は北海道から、南は鹿児島県までの全国中学生、及び同伴父兄である。明治以後百年間、英國その他の先進諸国を抜いて、現在日本の造船能力は世界の王座を占めるに至っている。昭和 40 年の世界造船量は 1,221 万トンであるが、日本の造船量は 536 万屯で、世界全体の 44%を占めている。かつての造船王国の英國の造船量は 107 万トンで、日本の 5 分の 1 も足りない。このことは、日本民族の優秀性と和の精神の成果であるとの出光会長の信念で、戦後日本人としての自信と誇りを失ってしまった現在、是非とも次代を背負って立つ少年に見せたいとの念願から行われたものであつた。

全国から集って来た手紙 1,000 通は、世界一の出光丸の勇姿を見ると、全く驚きと悦びに輝いた。なでるようにしてまた走るようにして、船内くまなく見てまわる姿が今も眼前に思い出される。感想はと聞いても、ただ大きい、デッカイという以外の表現をもたなかつた。

彼等が帰校してから約 3,000 通に余る感想文や、お札状が送られて來た。これらを整理してみると、面白い結果が出て來た。東京都の学校からは 1 通も來なかつたし、大阪、名古屋、横浜の大都会からは極めて少なく、地方の農村、山村の学校からは殆んど全員が書き送つて來た。都市と農村の世相を反映しているといつても良い。

内容の方から分析してみると、全体の 7 割が、王選手・3 回ホームランを打つても届かない長さとか、碇の一つの重さが大鵬より重いとか、主として外形の觀察とどまって、2 割がこの世界一を生んだ日本人の力と、優秀性を認識し、最後の 1 割ぐらいが将来自分たちも、こんな大きな船を作る人になりたいとか、出光丸のエンジンのような力の持ち主になりたい等と自己の自覚と、希望を述べている。最後のグループは、将来国民の指導者になる素質を存じているといつてよかろう。

3,000通のうち、3通ほどがこの見学を批判し、一通は接待の弁当がまずいし、待遇が悪かったと非難していた。しかも、それらの3通が何れも宗像から来た学生のもので、残念というより、むしろ嘆然とした。世界一出光丸よりも、一糸乱れず、整然と、かゆいところに手の届く出光社員の行動に、より称賛の言葉を送って来た一般招待者に比すれば、なおさらのことである。出光会長は、これは神慮の顕れであるといっておられる。

神郡宗像の土徳に育まれて、幾多の名校長、名教員が出た。早良巡回に宗像教員というのが、私どもが子供の時からよく聞かされた言葉である。宗像卵とともに郷土宗像の誇りであったのである。宗像人の純粋性の故に、戦後の思想の変化に対応しきれずに、押し流されてしまったのではなかろうか。健康な人ほど病菌に弱いともいわれる。

故郷を離れて、時に静かに目をとじて憶えれば、山紫水明の宗像の山々の姿、野の美しさが、過去の追憶とともに甦ってくるのは、誰でも同じであろう。宗像の発展と、宗像人の誇りを望むこと切なるものがある」

とある。当時、3通の批判の手紙が、それが宗像の中学生であり、石田・出光ともに驚いて残念がっていると記されるが、意外とそうでもない。筆者の友人の姉がこの中学生参加に選ばれ、彼女や友人は非常に喜んでいたのを覚えている。家庭の事情で、いつも社会科見学・修学旅行も参加できなかった。中央中学校の先生の粋な計らいで参加できたのだろう。出光佐三と出光丸のことは、友人の笑顔と共に、記憶の中に鮮明に残る。

3. 著作・評論・出版と顕彰事業

(1) 著作・評論・出版

出光の逝去後、彼が書いたものが続いて出版される。出光興産店主室『我が60年間』追補が出版される。

以後、昭和58年に『道徳とモラルは完全に違ふ』 出光興産、昭和59年に『出光の言葉』 出光興産、昭和60年に出光興産店主室『我が60年間』 第1~4巻が出版される。評論としては、昭和48年(1973)2月、瀧口凡夫より『創造と可能の挑戦 出光佐三の事業理念』が出版される。

昭和61年に出光計助『二つの人生』、平成2年に高倉秀二『評伝 出光佐三』、平成15年(2003)に、佐三の娘である出光真子『ホワット・ア・うまんめいど -ある映像作家の自伝-』が出版される。以下、数多くの代表的な著作は下記の通りである。

- ・木本正次 小説「燃える男の肖像 出光佐三」1982年

- ・高倉秀二『評伝 出光佐三』プレジデント社 1990年
- ・堀江義人『石油王 出光佐三 発想の原点』三心堂出版社 1998年
- ・滝口凡夫『決断力（中）』日本工業新聞社 2001年
- ・佐々木聰編『日本の戦後企業家史—反骨の系譜—』有斐閣選書 2001年
- ・水木楊『難にありて人を切らず』PHP研究所 2003年
- ・滝口凡夫『出光佐三 魂の言葉』海鳥社 2012年
- ・水木楊『出光佐三 反骨の言魂』PHP研究所 2013年

また、平成24年（2011）に佐三をモデルとした小説、百田尚樹の『海賊とよばれた男』 講談社から刊行され、翌年に本屋大賞となり、再び関心を集めることになる。

（2）宗像での佐三翁顕彰事業

出光佐三の逝去後に顕彰の記念事業や追悼記事などがあり、原文を引用しながら、彼と宗像の関係者の繋がりを集めた。

出光佐三翁生誕百周年記念事業

昭和60年（1985）8月17日・18日に宗像市商工会青年部主催で、故出光佐三翁生誕百周年記念事業が、開催される。記念式を須恵の中央公民館大ホール、生誕100年祭で映画上演、赤間の生家公開が行なわれた。記念誌は、『日本人 出光佐三翁生誕百周年記念誌』に詳しく纏められる。地元で、唯一の佐三の業績・評価を知ることができる本である。

堤宏は、記念誌の中で「今から20年前（昭和43年）、当時の宗像は宗像高校の校長着任拒否闘争、勤評闘争等教育闘争の拠点として高名を馳せ、教育現場は大混乱でした。昔から神郡宗像、教育郡宗像と言われ、著名な教育者を多数輩出した、教育界の雄郡でしたが、当時はその面影もない惨澹たる状況がありました。このように憂慮すべき状況を耳にされた出光店主は、地元青年代表を東京に招かれ、宗像の現状を憂い“宗像の若者よ立て”この混迷する宗像に何の生きがいを感じるか。このすばらしい環境に恵まれ、良き先輩をもつ幸せな若者よ、醇風美俗宗像の若者よ、勇気をもって奮起せよ。先輩に負けない人になれ、郷土を愛する人になれ。何事にも感謝し、互譲互助の精神をもって眞の日本人のチャンピオンになれと激励され、その言葉に目覚めた当時の青年有志が集いも我々は将来の宗像

の礎になると結成されたのが宗像青年会議所の前身であります。」とあり、発足 10 周年記念誌に「宗像大社の御神徳を頂いている宗像人は特別の使命がある。それは実の日本人のあり方を、身をもって示して世界の平和、福祉に貢献しなければならぬ使命をもっている。そういう高い目標に向って進みなさい」の一文を寄せられ、「日本人のチャンピオンたれ」「日本人のあり方を示すことが、日本人の世界的使命である」など、世界的視野にたたれての御教示を賜わりましたと」と述べられる。

この高名を馳せたのは、昭和 43 年 4 月に福岡県高校教職員組合は、校長推薦者を巡って、全国でも例のない校長着任拒否闘争が始まった。学校の正門には組合員らがピケを張り、着任しようとする校長に対して阻止した。宗像高校の場合は 67 日後の 7 月 17 日にやっと着任したとされる。津屋崎町の水産高校でも組合員が、ピケを張り警察権力が介入することになる。佐三の誘致した教育大学のお膝元の出来事であった。

かつての宗像の教育は、「一人の子を粗末にする時 教育はその光を失う」・「地味だが堅実、一人ひとりに食いついて行く人間教育」とする安部清美や八波則吉などの思想があった。昭和 33 年～昭和 43 年にかけて福岡県教職員組合の勤評闘争が激化することになる。

小学校の頃、休みであった宗像神社の放生会も政教分離が進み、休日でなくなった。

川島照亮は、宗像高校と佐三翁との繋がりと感謝が書かれる。

「出光佐三翁の深い心」　『宗像高校同窓会 平成 22 年会報』

「現在の宗像高校の歴史を語るに出光佐三翁の名前を外すことはできない。・・・中略・・・翁はいつも言っておられました。「今の自分があるのは、宗像に生まれ育って宗像大社のご神徳に浴したお陰である。宗像は昔から名教員を輩出する教育郡であったが、私もその尊い先生に教え育てられ人の尊さを知った。それで私の会社の在り方は、人間尊重の精神が中心になった」と。そういうご自身の体験から、翁は郷土宗像に対する感謝、報恩の心が強く、それを色々の会に実行されたのです。50 年程前（昭和 35 年）には宗像高校で講演をされ、日本人の使命や宗像の若い人たちの役目を説かれました。また、創立 50 周年記念行事や新体育館の建設に際して、千万単位の多額のご寄付を頂きましたが、寄付のことは絶対口外しないでほしいと言われました。そして、この宗像から将来の日本を担う若い人が育つのが、一番の楽しみとも言っておられました。かく言う私も現在の伊豆会長、当時常任幹事だった故天野昭夫氏らと共に翁に直接激励を受けた一人であります。「宗像の若者よ立ち上がり。」と語られた翁の慈顔を今でも忘れるることは出来ません。」

そのような翁と宗像高校をつなぐ掛け橋となって、今まで多面にわたってご尽力を頂きました同窓会顧問の麻生和正氏には感謝の念に堪えません。」

昭和 53 年 11 月、宗像町民名譽町民 1 号となる。この時の『宗像』社報の記事がある。

「郷土に対する永年の助力に町民挙げて感謝 昭和 53 年（1978）2 月号

「人口約 5 万 2 千を数え、昨年末に新庁舎の落成を見た宗像町では当町初の名誉町民として、出光佐三氏（93 才）を選び、名誉町民章の贈呈式が去る 11 月 16 日に新庁舎会議室で行われた。当日出光佐三氏は、高齢のため欠席されたが、出光興産株式会社取締役の麻生和正店主室長が代理で出席され、天野町長から名誉町民章証書を受けられた。出光佐三氏は、明治 18 年 8 月 22 日、宗像町赤間（旧赤間村）に生まれ、赤間小から東郷高等小、福岡商業をおえ神戸高等商業学校を卒業。明治 44 年に門司市（北九州市門司区）で出光商会を設立。昭和 15 年に今の出光興産株式会社と社名を変え、今日の基礎を築かれた今日の間、同氏は教育郡宗像の教育環境整備への援助として、福岡教育大学の統合誘致、旧赤間小学校の図書館、城山中学校の旧体育館、赤間保育園の建設等々、郡内のある教育機関へのおしみない助力がなされた。

更に氏は、神郡宗像の文化向上のためにも、沖ノ島第 1 次から第 3 次にわたる学術調査を基として、宗像神社史上・下・附巻の編集、宗像大社昭和の大造営事業、宗像大社宝物館建設等、神郡宗像の発展に多くの功績を残されております。しかし、これ等の功績は郷土宗像のみならず同氏の著書「人間尊重」や「永遠の日本」などで述べられているように、会社の運営を通して、日本全体の教育と文化の向上に貢献するという出光精神の現われでもあります。また、これらの御功績に対し去る昭和 33 年には旧門司市名誉市民章も受章されています。このたび、出光佐三氏におかれましては、宗像町、初の名誉町民になられましたことを心からお祝い申し上げます。今後共、益々御健勝・御長寿を心より祈念申し上げます。」

昭和 53 年 12 月吉日 宗像大社宮司・葦津嘉之、外職員一同 社報「宗像」編集部

昭和 60 年 8 月 27 日に福岡 RKB 毎日放送による特別番組「われ天地に愧じず」が放映され、彼の生涯と事業、友人のコメントが紹介される。出光興産の提供である。

平成 23 年（2011）、出光創業 100 周年記念日には「日本人にかえれ」の名言が新聞広告に掲載された。イラストの日章丸（2 世）は、イランのアバダン港に石油を購入し、ペルシャ湾で大国イギリス軍に撃沈される可能性があるにも関わらず、新田辰男船長が航海し、川崎港に帰港する。出光の存在を示す世界的な出来事である。タンカーには、航海安全の宗像神社が祭られていた。この時も、「宗像大神」が加護してくれたのだろうか。

平成 27 年 3 月 24 日～5 月 10 日に、宗像市海の道 むなかた館で『日本人にかえれ-出光佐三展-』を実施し、期間中に 27,000 人の入館があった。

佐三と宗像の繋がりが、逝去 36 年を経て再び蘇る。

4. まとめ

(1) 佐三翁はどんな人

佐三について、弟の計助（出光興産 2代目社長）は、『二つの人生』に、「店主の場合は、物事を実行するに当たっては、事前に徹底的に調査、研究する。その結果、一度やると決めたら、だれがなんと言おうと絶対あとには引かない。非常に頑固だ。だから、たとえば、いったん怒り出したらそばには近寄れないくらい激しい。人並みはずれて頑固なところがある半面、実に情にもろい。女性や子供には無条件にやさしかった。逆に相手が強い役所などで、曲がったことがあると、とことん反対した。若いときから苦労ばかりしているから、いろいろとよく気がつくし、義理、人情を非常に大切にする。しかも、普通の人なら、苦労が続くとくじけて止めてしまうが、店主は苦労があってもへこたれない。禍いを次々と自分の栄養分にしていく。山を越すと、次の大きな険しい山をめざしていく。性格は父親に似て、楽天的で明るい。」とされる。

また、店主も明治44年、初めて門司に店を出したときは「これで両親や妹、弟たちの窮状を救えれば…といった程度にしか期待していなかったのではないだろうか。晩年、計助、出光がこんな会社になるとは思わなかつたと述懐するのを何度か聞いたことがある。」と回想される。

佐三翁の好物は、赤間城山の山芋で、「青年会議所の人たちが、城山の山芋を持参すると、オレの堀り残したものを持ってきたと喜んだ」と、滝口凡夫は記す。

以下、いろんな方がエピソードと感謝が記される。『日本人 出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985年宗像市商工会青年部より引用する。

宗像大社宮司の葦津嘉之は、復興期成会の頃に彼の宗像気質を下記のように書いている。

「宗像の人々は宗像大神のご庇護をいただいて、先祖代々醇風美俗の地方風を生み出し、それを良く受け継いで現在に至りました。その美わしい人情と素朴な地方風と、宗像大神の広大無辺なご神徳の中で私は生れ育ちました。今日の私がありますのは、全く宗像のお蔭です」といつも故郷宗像に対して、格別に報恩感謝の念をお持ちであります。かつて、教育正常化の嵐に郡内が見舞われた時、宗像にも赤旗を振り廻して教育を荒廃させる悪い奴が多勢おりますよ。と申し上げたら、にっこりと笑われて、宗像人は純情、純真、無垢だから悪の色にも染まりやすいのです。しかし悪いとわかればすぐ治りますからご心配なくと、心から宗像の人々に対して愛情をもって弁明された時は返す言葉もなくただただ頭が下りました。」

天野敏樹町長は、下記のとおり回想する。

「当市におきましては、昭和41年4月福岡教育大学の誘致を始め、孝子武丸正助翁の遺徳顕彰事業、旧赤間小学校の図書館の建設、城山中学校体育館の建設等の公共事業に多額のご援助をいただき、市財政の苦難の時代を乗り切ることが出来ましたのも、ふるさとをこよなく愛されていた現れであり、・・・宗像住民のシンボルであります宗像大社を氏貞が再建して以来約400年ぶりに、巨費を投じて修復されたことは・・・「宗像の心は一つ」という言葉がありますが、古代より宗像大社の秋季大祭を中心とする各種の祭りに氏子が集まり、情報交換、コミュニティ形成の重要な拠点となり、神郡宗像の意識が熟成されてまいりました。」

伊豆善也県会議員は、高山勉の政策を引き継ぎ、下記のとおり評価する。

「出光翁の郷土に尽された精神的、経済的ご貢献ははかり知れないものがあり、これほど郷土の為に尽くした経営者は他に類を見ないことでしよう。また、宗像の戦後の政治、教育の荒廃を深く考慮され、その健全化のため、陰に陽に尽力されたご功績を忘れてはなりません就中、教育大を城山山麓に私財を投じて統合、設置されたことは特筆すべきことであります。」

安永武一郎学長は、学芸大学統合移転を振り返り、回想する。

「当時の金で3億という巨額の寄附を下さった。大学側が「その金で出光会館を建設しましょう」との申し出も断わられ、御自分を表面に出す事をなさらなかつたのみならず学生への奨学金を毎年継続して下さり「国家の役に立つ教師になって欲しい」との念願をこめて今も続けている。」また、教育諸氏に広く外国の実状を知り、教育の場で生かして欲しいと、助成の恩恵を賜つた教官は既に100名に達している」

文部省が「福岡教育大学のみに援助せずに、他大学にも及ぼしたら……」と言った時、出光は「それなら私は寄附を止める」と断言されたと云う。

滝口凡夫は、出光翁については身近にあり多くの著作を書かれており、翁の実像を知る上で欠かせない。彼も宗像出身であり、佐三の宗像に対する基層意識とその影響を分析する。彼は、元宗像市長である。複眼的視野で書いておられる著作は下記のとおりである。

- ・滝口凡夫「出光佐三さんと私」『出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985年
- ・滝口凡夫『創造と可能の挑戦 出光佐三の事業理念』西日本新聞社 1973年
- ・滝口凡夫『決断力（中）』日本工業新聞社 2001年
- ・滝口凡夫「あるべき人間の姿を求めて」『出光佐三 魂の言葉』2012年

以下は、滝口凡夫「出光佐三さんと私」から、興味深い記述を下記に引用した。

互謙互助精神 どのような生き方をされ、どのような考え方を持っておられたのか、もう1つは佐三さんが生きてこられた人生、あるいは出光興産の経営理念と宗像との関わり、「日田重太郎に君の主義を貫き両親を大切に、兄弟仲良く暮しなさい」と教えられた。

「佐三さんはこの教えを、ずっと守り、出光興産の基本理念とされた。人間の出会いというもの、常識では説明できないほど神秘的だし、偉大な結果を生むものです。」

戦後に、「創業いらい宮々と築いた販売網は終戦によってすべてなくなり、残ったのは210万の借金だけでした。60歳といえば今では停年の歳で、この歳から事業を起こすなど普通の人の考えではできません」そして、「佐三さんの考え方の基底にあるのはやはり宗像大社です。私達から考えますと佐三さんの生きた道は本当に一直線です。これは非常にむつかしい事で、誰にでも出来る事ではありません。ですから佐三さんは、人からも悪口を相当言われています。業界の一匹狼などとも言われています。これは徳山製油所もできて出光興産も一人前になった昭和58年、業界の生産調整に反対し、消費者本位の石油政策を主張して石油連盟を脱退したときのことです。」

根本思想 さらに、佐三さんの考え方の根元にあるのは宗像大社です。「宗像大社に行きますと拝殿の所に木の額が掛けてあります。【天孫を助け奉りて、天孫に、祭かれよ】と書かれています。天孫とは天照大神の子孫で天皇家です。その天孫をお助けするとともに、天孫からお祭りを受けられよ、という神勅です。佐三さんほど純粋に豊かに生きた人はめずらしいですね。しかも自分だけでなく出光興産の事業経営の中で、それを実践して見事にやり遂げられた。これは宗像の人だけでなく日本人の人がどれだけ勉強してもいい人物だと思います。」、「おもしろいことにタンカーに大嶋丸や沖ノ嶋丸、赤間丸、高宮丸など宗像にかかわりのある名前がつけてあり、いかに佐三さんが宗像や宗像大社のことを考えておられたかの証拠だと思います。」

宗像とは何か 佐三さんは、宗像大社の神領で、宗像大社の御神徳によって、これだけの醇風美俗の風土ができた、と言われています。「宗像とは何か」が問われなければならない。佐三さんは宗像、宗像と言われますが私は佐三さんの故郷は宗像だけじゃないと思います。逆説的ないい方になりますが、つまり日本人としての本当の在り方、人間としての本当の在り方を求めていくのが佐三さんのねらいであって、それがたまたま純粋な形で宗像にあった。そしてその宗像に佐三さんが生まれた。何も、宗像だけに日本人が住んでいるわけではありません。昔からの日本の農村、山村など、私は土に近いほど、自然に近いほど純粋な人間が育つと思いますが、その宗像という所は純粋な日本人の在り方を示す一つの地方である、ということです。宗像人だけが日本人じゃありません。

いづれにしても、今宗像がこんなに大きく変っている。そして佐三さんが自慢されたほどの宗像の醇風美俗、その人間のよさというものもだんだん変わってきている。

そして、滝口は『出光佐三　魂の言葉』の中で、その本質を「出光には人間尊重を初め互譲互助、資本は人なり、努めて難問に挑め、などの理念、教訓のたぐいが多いが、これはすべての土に生きた自作農民の発想から出たものだ」と考えている。

以上のように、宗像会の結成から戦後を経て、宗像会・出光佐三翁の宗像への影響や尽力の実態に眼を向け、歴史の観点から宗像の基層意識の形成を探った。本来は、佐三翁の嫌う金目のことは書くべきではないが、本来の実態がわからないので、記事のあるもの記述した。

幕末志士の早川勇の人徳で、宗像会が結成され、企業・官界・学会に人材が育ち、特に多くの教員が生まれ教育郡となる。大正期に再び入会した出光は、事業の成功と共に宗像会を代表する起業家となり、宗像神社復興期成会の会長に就任する。戦争で宗像会は停止に追い込まれる。戦後、出光は戦前的一切のものは失った。60歳の年齢であったが、人を資産とする起業を再びはじめ、再び石油業界に戻る。併せて、自社の建物等が戦災に遭わなかつたのは、宗像大神の力と信じ、自らの経営思想の実現を目指す。宗像神社の復興は、沖ノ島出土品などで神社の由緒と神徳を独自の理解を深め、武丸正助顕彰により自らの信念を確信することとなる。そこには、「日本人」をキーワードとした明治精神が加味される事になる。戦後は、宗像会のリーダーとして、念願である神社の復興に奔走しながら、宗像地域の武丸正助顕彰事業、宗像会の再興に進む。宗像会で育った教育をベースに昭和25年頃には、宗像は教育で進むことを構想している。昭和35年の福岡刑務所の移転計画は、反対意思を高山町長と共に示し撤回させ、福岡教育大学の統合移転の積極的支持者として私財を投じ実現させる。合せて、学生の奨学金制度を始める。こののち、再興宗像の激文を書く一方、宗像商工会青年部の若者を東京に呼び、激励すると共に、宗像高校・城山中学で講演会を行い、「宗像人」の育成に激を飛ばす。「日本人のチャンピオンたれ」「日本人のあり方を示すことが、日本人の世界的使命である」と諭す。出光丸竣工の中学生の15,000人を招待する考えも、これらを契機に生まれたものかもしれない。



出光佐三の郷里（赤間町 昭和 23 年）

上部が赤間宿で、左下部が昭和 41 年に統合移転する福岡教育大学の造成前の城山山麓の景観となる。

昭和 46 年 11 月の宗像神社の遷宮大祭は、「一生の念願」という。宗像大社が世界遺産の候補になりうる基盤は既にこの時期に、出光佐三と云う個性で結実したと見なしても過言でない。また、自ら計画・実施すること決めたならば、突き進むことを宗像人に示したことにも意味がある。

彼の宗像で行なった行動（事業）は、戦前の教育郡を再び呼び起こすことであり、その基盤を作ったことに意義がある。「宗像は一つ」から「宗像の心は一つ」と郡民意識は、戦後に引き継がれたのは、出光の鮮烈な個性によるものであり、彼の激が宗像会の同胞意識に強烈に影響を与えた。

彼は、常に自慢げに力強く語る。

「それは宗像大社のご神徳ですよ。これを今の若い人に言ったら「何をいうか、このおいぼれが」ということになる。宗像大社は、日本国民の祖神といわれておる。お伊勢さまは皇室のご先祖であり、宗像大社は国民の祖神であるといわれておる。『皇室を助け奉って、皇室に祭られよ』という御神勅の第一号がこの宗像神社にある。・・・このご神徳が、どういうふうにあらわれたかというと、まず学校の先生にあらわれた。私が小学校に行っておる頃は、小学校の先生は尊いと思ったものですよ。

私の育った宗像郡（福岡県）は教育郡で有名だった。今は福岡県が日教組のご三家だが、昔は福岡県と長野県はよい方のご三家で、福岡県は日本で有名な教育県であった。その教育県の中でも宗像郡は特に教育郡として有名で、多くの小学校の名校長、名教員を出した」

と昭和42年5月に「仲よくする力」『八幡製鉄幹部研修会』の講演会記事がある。以上のような、激を聞けなくなつて35年が経過する。

宗像の人は、古代より神郡の氏子という意識が強く、自尊心と自立心に富むと言われている。佐三はその典型である。彼の行動や経営を彩る多分に観念的なところは、この宗像の氏子という代々踏襲される基層意識と無関係ではない。

宗像会、出光佐三翁の活躍は、世代交代と共に記憶から薄らいつつあるが、それは既に基盤となり基層意識の中にあると思う。たとえば、保存整備された宗像大社や鎮国寺の景観であり、教育大学などの大学施設、教育者と云う資産であり、宗像人の基層意識に存在する。多くの人々が恩恵を受けているはずである。しかし、基層意識は、無意識の中にあり、地元にいるとほとんど意識されることはない。

(2) 今日、出光佐三翁の痕跡を探す。

彼に関するものは、生家・お墓ぐらいで痕跡が少ない。お墓は不謹慎なので触れない。

彼は、明治18年に赤間村で生誕し、赤間尋常小学校、東郷高等小学校卒業後の19歳まで主に過ごしている。その後、福岡商業学校に通学している。

毎日、汽車で赤間駅を「朝5時ごろの汽車に乗って夜9時、10時の昼夜兼行であった」と回想する。商業学校時代も家業の手伝いで、藍玉の注文取りなどを手伝っている。佐三が直接的に宗像を郷里とするのは、26歳ごろまでである。明治42年ごろに佐三の意に反して出光家の家族は、家業を閉店し、追われるよう宗像を去っている。

出光商会を開業し門司市に居住していたが、27年間の空白がある。大正6年に宗像会に再入会するが、会誌をどの程度読んでいたかわからない。本人は、視力が弱く、積読であったと云う。その後、昭和12年の貴族院議員に当選してから宗像神社復興完了まで昭和50年まで間、頻繁に帰ることがなる。52歳から90歳の出来事である。

佐三生家（宗像市赤間） 赤間宿に佐三の生まれたころは、染料のある藍の卸商を父が営んでおり、徳島県から藍玉を仕入れて、郡内や福岡、久留米などに販売していた。赤間は、吉留にある八所宮の氏子であり、総社の宗像神社の氏子、いわゆる二重氏子である。菩提寺は法然寺である。

明治9年の赤間村の人口は、987人、197戸であり、唐津街道の宿場町であった。

法然寺には、「出光良元」の墓があり、弟の歴史好きの泰亮が調べたところ、宇佐八幡宮大宮司家の一族とされ、宗像へ移り住んだと云う。江戸時代の天明年間には、赤間宿で屋号を「中ノ紺屋」、後に「松屋」に変わったが家業は染物業であった。

佐三は、父から「一生懸命働くこと」・「質素であること」・「人のために尽くすこと」を毎日云われ、厳しく教え込まれた。母は、人前に出ることが嫌いな人であったが、何かことが起こると、「芯の強い女性」であった。出光兄弟が後に、一致団結するのは、両親の家風の影響が大きいと思われる。

赤間尋常小学校（宗像市赤間） 小学校は、明治18年8月に太政大臣の岩倉具視が、教育令改正で設置されたもので、当初は赤間本町の米屋（日新）を改造したものであった。まもなく、正式なものが御茶屋の跡に造られた。黒田藩の赤間宿にあった御茶屋の後の建物であった。

ここは、岩倉具視などが五卿落ちとなり、一行は赤間宿の御茶屋に慶応元年（1865）1月18日～2月11日に滞在する。自宅の裏山が学校となる。城山中学校のグランドにあたる。

宗像高等小学校（宗像市田熊・田熊石畠遺跡公園内） 東郷村田熊にあった校舎で、明治24年に建設される。後に宗像農学校・宗像高等女学校、宗像中央中学校となる。明治の校舎は、写真が残っている中央のものである。現在、国指定史跡の田熊石畠遺跡内である。建物は残っていないが、発掘調査の際に校舎基礎が発見される。遺構は、布堀の基礎掘方がコの字状に配置され、床の基礎より建物の間取りが分かるので、写真を元に復元図を作成した。洋風の建物で、一階は教室・職員室・事務室、二階は、講堂として使ったと記事がある。

校長は、教育熱心で有名な名校長である牟田尻出身の大森達である。漢詩や書を嗜み、宗像教育会で手腕を發揮する。佐三の2年生の時（明治29年）の教員は、深田澄之助教頭、石松国太郎・真武民五郎・釜瀬新平（後の九州学園創立者）・伊豆房太郎・安部正威・薄知行・安部ミキ・釜瀬定蔵・松尾潔などの教員が知られ、翌年に天野開作・宗像マス子が赴任する。学年が、二つ上の有吉巖（後の立正大学教授）によると、4年生は、生徒が60～70人であった。但、他の資料によると、1年生は、130人もあり、学年を上がることに生徒数が減る。この原因是、農業従事者の子は、生業に追われやめる子が多くいた。佐三の同郷には、四つ下に倉田主税（後の日立製作所社長）がいる。当時には、宗像教育会が組織され、会員59名が知られ、先生の給料は本科が16円、準教員が8円であった。

1年生 佐三は、宗像高等小学校に入学し一年生となる。東郷の校舎には、1年しか通っていない。通学路は、赤間の自宅-唐津街道辻田橋を曲り、釣川北側の堤防道とおり田久橋を過ぎ、野添橋を過ぎ、釣川鉄橋前の踏み切りをわたり、天理教西海教会前を曲り-東郷橋を渡り、田熊の学校につく。明治31年作成の陸軍陸地測量部の地図があったので示す。

興味のある方は、歩いて頂きたい。この道は、当時の幹線の旧国道34号である。佐三翁は、「瓦となるな」『出光オイルダイジェスト』11号（1966年）に記す。

「私どもの尋常小学校は赤間にあったが、明治 28 年に尋常小学校を卒業して高等小学校に通うようになった。ところが、高等小学校は宗像郡の中心である東郷町に一ヶ所しかできなかつた。そこで私どもは一里半の道を歩いて通学することになった。川土手の吹きさらしを通学するので当時 9 歳位の私どもには、この通学がつらかった。今でも忘れられないのは、冬は「赤ゲットウ」をまとめて西から真正面に吹き付ける雪を、ことともせず通ったことである。70 年前はよほど寒かったらしいので、雪がたくさん降ったことを覚えている。互は帽子に日覆いをかけて、その土手を炎天下に通つた。ある時は台風に川土手の道の真ん中に吹き倒されて、寝転んでいたこともあります。この寒風、炎暑、台風によって私どもは鍛えられたことを、今は非常に有り難いことと思っている。空が黄色くなつた、また大風が吹くよと平気で、むしろ面白がっていた子供時代が思い出される。子供時代に大風に吹き倒されんとしたり、またあるときは危うく渦流に吹き落とされんとしたり、近所の人たちの避難で家中坐る場所もないごつたがえした脆弱な光景などが、時代の風潮がそうせしめるのであろうか。交通の発達しなかつた旧藩時代には、今までいう風水害というものは、その土地で自分の力で跡始末をなし、人の厄介になることを潔しとしなかつた」。その後、「こうして天に試され、地に培われ、父母に諭されて、天を怨まず地を呪わず、神の試練として己れを励み、父を疑わず母を尊み、眞の慈愛の呼吸を悟り、これらのことどもが数百年、数千年の長きにわたつて九州男児といふものが出来た」とも云う。

これは、1 年生の時の記事である。東郷の高等小学校に通つてゐる時であり、風の強い場所は、釣川添いの東郷橋-田久橋間であり、おそらく釣川鉄橋付近と推察される。大雨洪水は、明治 26 年 9 月のもので、未曾有の大雨水で村民困窮、家屋倒壊と過去帳の記事がある。彼の話によく出てくる。勤勉に釣川の堤防道を毎日片道 5~6km ほど通つたとされる。

2 年生~6 年生 高等小学校の 2 年の時に、赤間に仮校舎ができた。勧善舎という芝居小屋を一時的に改修したものであると記述される。この時に林繁蔵と出会う手記が残され、占部玄海により『郷土歴史叢書-人物往来-』昭和 62 年に下記のとおり、紹介される。

「高等小学校の二年の時に、赤間に仮校舎ができた。勧善舎という芝居小屋を一時的に改修したものである。そこで私は林君と机をならべて勉強したらしい。なぜそれをおぼえているかといえば、机の



佐三少年(12才) 右側店主

(出光興産株式会社 提供)

蓋をあけて二人とも青い梅に塩をつけてかじっていた。それを見つけられて番止（放課後二時間立ち番）させられたことがあった。このことで私は林君をはっきり記憶している」

と書かれる。林繁蔵は、後に朝鮮総督府の官吏（財務局長）となり、佐三の朝鮮進出の石油販売事業に協力する事になる。『旧宿場町 赤間』によると、「公立小学校も明治24年、尋常小学校が御茶屋のあった辺に造られた。高等小学校は、明治31年に町役場の二階に置かれた」とある。したがって、2年～4年生に赤間の「勧善舎」→5年～6年生に赤間町役場二階の高等小学校の授業となるようだ。番止は、筆者の小学校時代の昭和38年ごろまであった。

伊豆先生 「ひとすじの道」『我が60年間』に先生のことが語られる。

「小学校時代の伊豆という先生でしたね。私は宗像郡の赤間という人口三百くらいの町に育った。これは農村の街ですね。私はからだが弱かつたくせに、いたずらっ子だったですな。だからいたずらをすると、父が「伊豆先生をちょっと呼んでこい」というのですよ。それで呼びに行くんですが、この先生は藁葺きの小さい家に住んでおられた。そして背が低くて、風采があがらず、実にみすぼらしい恰好をされていた。しかしそれが子供に何となく尊く感じられた。……そして先生のおともをして家につくと、先生は、そこに父と並んでわられるわけですね。そこで父が私をおこるのだが、そのおこる父はあまりこわくなかったのですな。ところが伊豆先生は、ニコニコと笑って、父をなだめたり、私を戒めたりしておられるのだが、その先生がこわい。そして尊いのですね。これが、人間の感じじゃないですか。理屈じゃない。人間と人間との感じだと思いますね。それで先生というのは尊いものだと子供心に感じたのです。七つ八つのときですからね。この先生の尊さが私に非常な影響を与えた。」と云う。そして、「われわれの育った明治時代は、尊い人といえば小学校の先生でしたが、宗像郡はその尊い先生を出すので有名で、その先生は「宗像教員」といわれた。このように立派な教員が出るのは、宗像大社のご神徳の賜物であるというふうに私は聞いておりました。」そして、「私はその後、神戸の高商に行って、投機で金を儲ける大阪商人のあり方をみたのです。買い占め、売り借しきをやって人を搾取することの上手な人が利口な事業家となつておった。人を搾取して金を儲けることが事業の本質だとなつておったですよ。それをみて私は、社会は人間を中心である、人間が大事だ、金が何だということを感じるようになった。これは伊豆先生や校長先生あたりの尊さからでてきておると思います。」

と宗像高等小学校の先生のことが記載される。おそらく、大森達校長であり、赤間居住は伊豆房太郎先生ではないだろうか。共に宗像会の草創期の地元会員であり、宗像教育会の人々であった。伊豆は、養蜂の論文を『郷友雑誌』4号に書かれる。伊豆は、明治38年に鞍手郡の小学校に転勤、大森校長は明治31年に宗像郡視学となる。彼の少年時代の基層意識は、江戸時代の幕藩体制が終えていたが、明治

維新後も農村社会の慣習や伝統は色濃く伝えられており、一新されているものでない。大きく変わるのは身分社会がなくなり、学制改革に伴う教育の場が提供された事だと思う。

同郷の倉田主税 主税（ちから）は、明治 22 年に宗像郡神興村津丸（現在の福津市津丸）で生まれた。明治 28 年に神興小学校入学、明治 32 年に東郷尋常高等小学校に入学し、同 36 年まで通学する。学制変革で、東郷尋常高等小学校は現在の東郷小学校である。小倉工業学校卒業後、東京の宗像塾に 1 年間居住する。仙台高等工業を卒業後は、久原鉱業所から日立製作所に入社。戦後、公職追放により社長に就任。昭和 22 年に日立製作所の二代目社長となる。そして、日立を世界の企業に育て上げた人物である。昭和 44 年に 80 歳で逝去する。

倉田主税は「私の履歴書」1982 年に敬神崇祖と祖国について書く。

「自分が生まれ、育まれた家庭を愛する心は全く自然の感情であり、麗しい心である。また自分が生を享け、生活している郷土を愛し、国を愛するのは、これまた自然の心であり、理屈ではない。祖国を愛する心を持つ国民に満ちた国ほど将来の繁栄が約束されるものである。第 2 次大戦がわが国にもたらした弊害の中で私が最も残念に思うのは、国民一般に祖国愛をうとんずる風潮が出てきたことである。戦後の変革があまりにも大きかったためか、戦前にあったものがすべて悪いものだとする考え方があるようだが、これはあまりにも偏狭な見方だと言わなければならない。先人が遺した正しい道徳や人間の道を深く身に付け、さらに進んで新しい伝統を産み出していくことは、われわれに課せられた義務であろう。

もとより、政治的な意図より出た、誤った愛国心の昂揚などは、避くべきものであることは、歴史の教えるところであるが、人間の本性に訴えた純粋な愛国心の昂揚は、忘れられるべきではない。」

さらに、昭和 30 年の復刊宗像 1 号に「放生会の想い出」、再興宗像 1 号に「科学技術の振興に想う」、再興宗像 5 号「年頭所感」を寄稿している。

鎮国寺復興のため顧間に佐三と共に、経済的支援を行う。東京宗像会の中心人物の一人であった。久保輝雄（宗像神社宮司）は、昭和 38 年に神社の沖ノ島出土品が国宝・重要文化財の指定を受け入れ、宗像神社宝物館建設の浄財の寄附のため、日立本社に依頼に訪ね、寄附を受けている。質素で口数のすくない、古武士のような人と評されている。

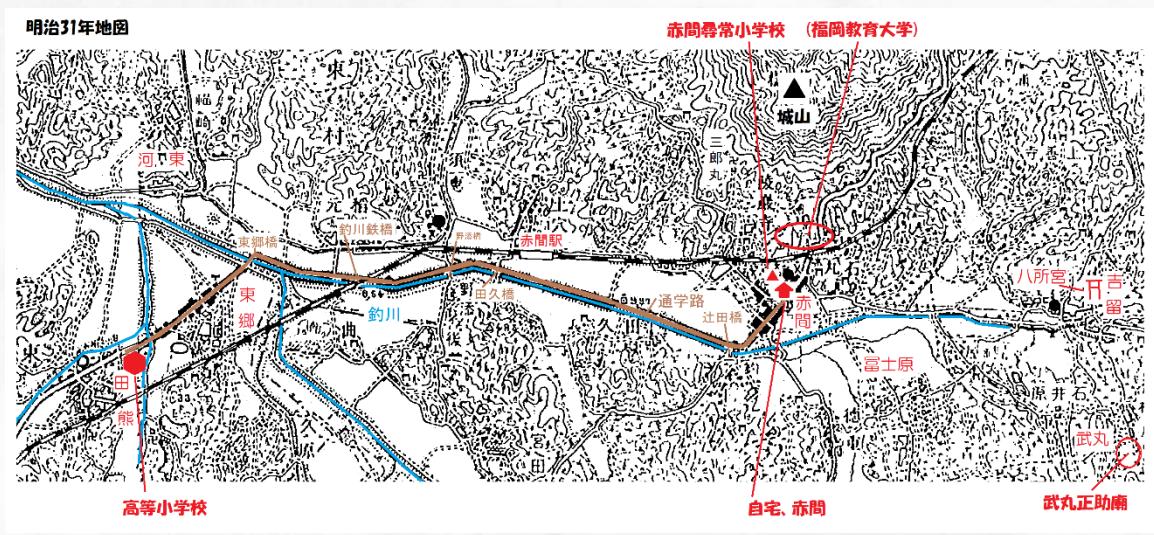
彼は、日立製作所の会長退職金（2 億円）を寄附、財団法人国産技術振興会を設置し、国産技術確立に貢献している。また、本籍を決して東京に移すことなく、宗像に置き、神郡宗像人たる氏子意識は生涯を通された。なお、津屋崎町の東郷神社の復興に助成される。

佐三とは、昭和35年頃に結成された福岡県の同郷実業人が20人あつまつた宝満会でも交勧された。逝去される同44年まで、宗像のために尽力された。紀元節の復興に熱心で、佐三翁とも共通の敬神崇祖が強かった。これは、明治時代の宗像の気風だろうか。

宗像神社への敬神崇祖は、祖父より代々繋がっており、どうも国粹主義と云つた次元ものでなく、宗像の明治精神の方が実態に近い。



倉田主税が通学した
東郷尋常小学校
(宗像市東郷小学校 昭和45年)





昭和 30 年ごろ(生家) 神山義信氏提供



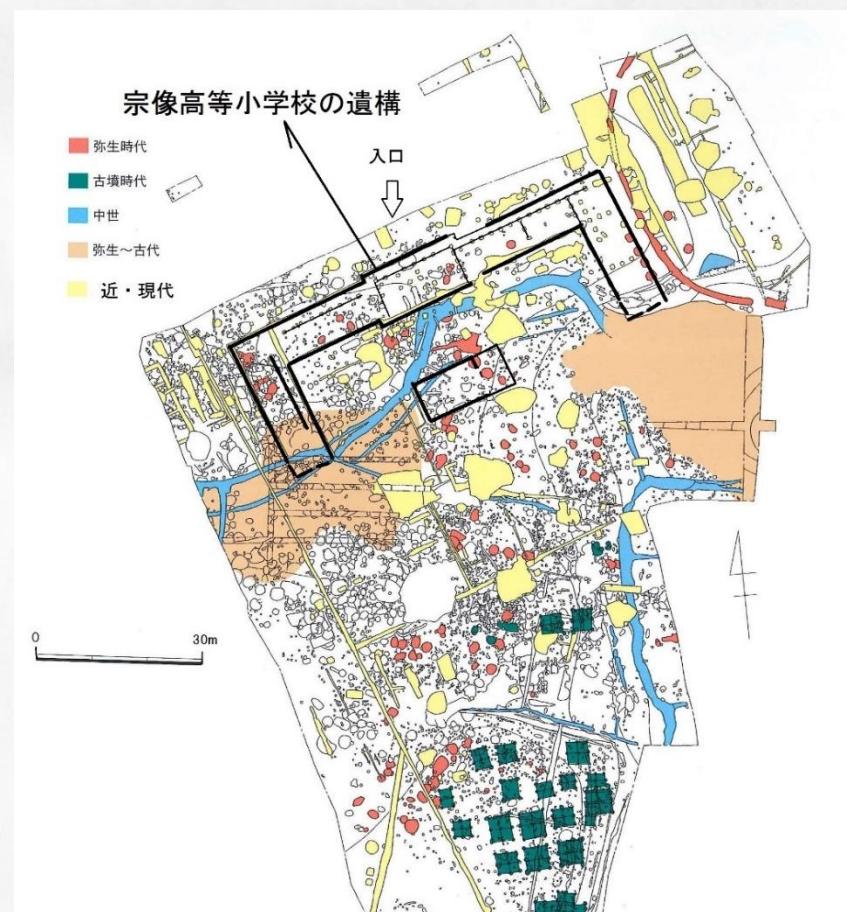
赤間・出光生家



田久の釣川堤防道



宗像高等小学校跡(田熊石畠遺跡史跡公園)



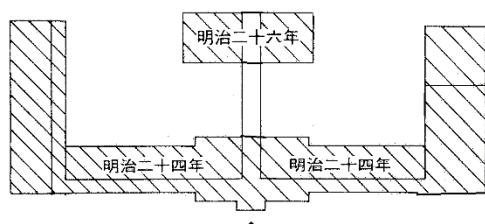
国指定史跡 田熊石畑遺跡の遺構図



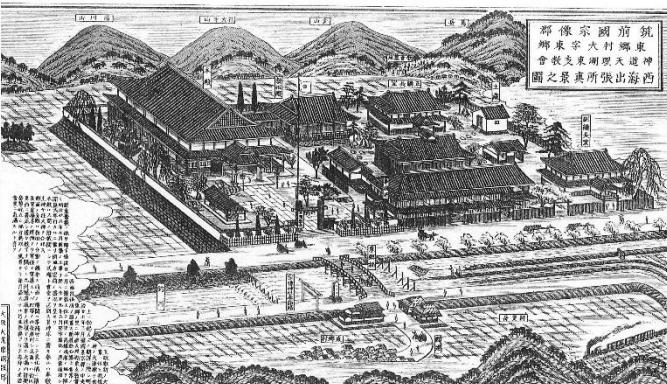
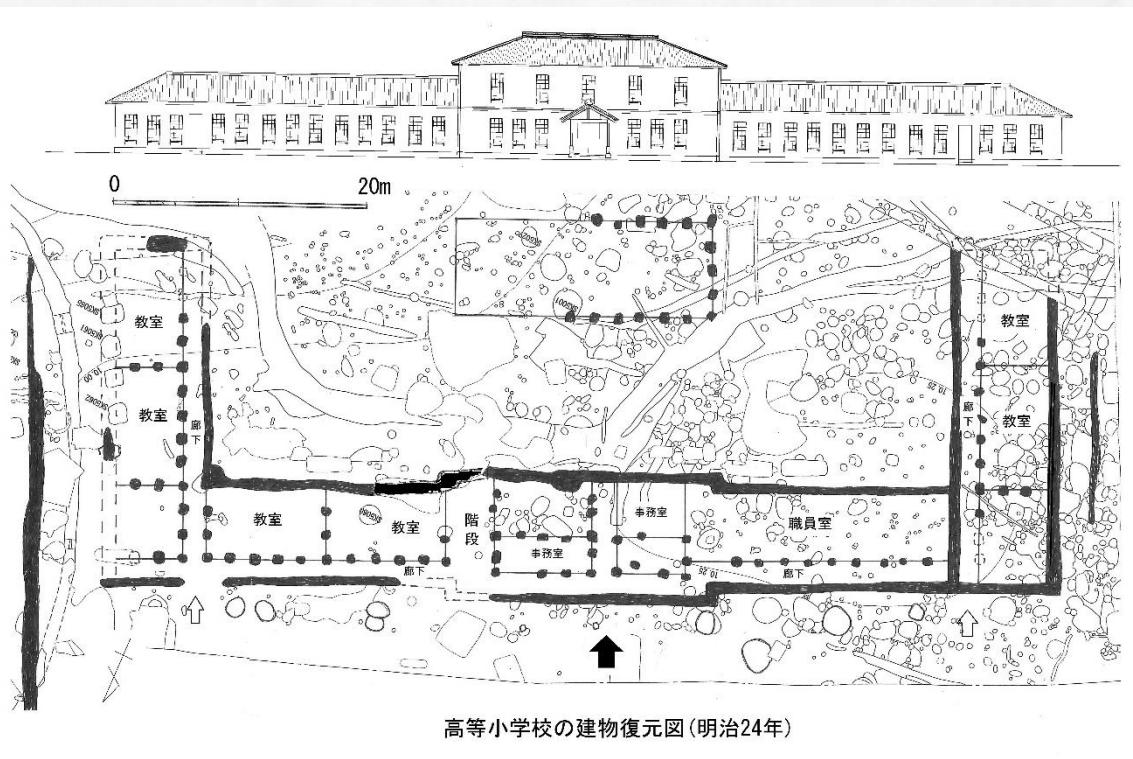
宗像高等小学校(明治 28 年～明治 29 年に通
学)



宗像高等小学校(明治 28 年～明治 29 年に通



校舎配置図



佐三の幼少・青年期年譜 滝口凡夫作成の年譜・『宗像市史 通史編 第3巻』に加筆

西暦	元号	出光佐三の関係	宗像の主な出来事
1885	明治 18 年	8月、宗像郡赤間村で生まれる。父藤六（松寿）、母千代	2月、小倉—赤間—福間—古賀—福岡の国道が34号に指定される。
1886	明治 19 年		9月、赤間警察署が開所
1887	明治 20 年		9月、宗像郡内の官地櫨実（はぜのみ）の入札
1888	明治 21 年		
1889	明治 22 年		4月、町村制施行により、赤間村・吉武村・河東村・東郷村・宮田村・野坂村が発足
1890	明治 23 年		9月、九州鉄道の博多—赤間間が開通、赤間駅と福間駅が開業
1891	明治 24 年	4月、赤間尋常小学校に入学 6歳	11月、宗像会が結成され、『郷友雑誌』が創刊。
1892	明治 25 年		伊豆房太郎が「養蜂」を書く
1893	明治 26 年	4月、校長の大森達が高等小学校に赴任する。	9月に未曾有の大雨洪水、村民困窮と過去帳。日清戦争が始まる。
1894	明治 27 年		
1895	明治 28 年	4月、東郷の宗像高等小学校に入学 10歳	4月、郡制施行で宗像郡が発足、郡役所は東郷村。
1896	明治 29 年	赤間に高等小学校仮校舎ができる。	赤間村が町制施行、赤間町になる
1897	明治 30 年		2月、幕末志士、早川勇が東京で逝去する。
1898	明治 31 年		
1899	明治 32 年	3月、宗像高等小学校を卒業 14歳	宗像第1高等小学校に、宗像郡立宗像農業学校を設立される。
1900	明治 33 年	家業を手伝う。	
1901	明治 34 年	4月、福岡商業学校に入学 16歳	
1902	明治 35 年	八尋俊介らと交遊を深める。仙厓和尚の「指月布袋」を買う。	
1903	明治 36 年		
1904	明治 37 年	宗像会に入会する。会員は同年3月まで。	日露戦争が始まる。
1905	明治 38 年	4月、神戸高商に入学。20歳。在学中に水島校長、内池教授から大きな教訓を受ける。	日本海海戦で勝利する。日露講和条約に調印。製糸工女養成所が神興村八並製糸所内に設置する。
1906	明治 39 年		赤間警察署が東郷に移転、東郷警察署となる。
1907	明治 40 年		
1908	明治 41 年		
1909	明治 42 年	4月、神戸高商を卒業、酒井商会に入る。	城山トンネルが開通。（赤間-海老津間開通）
1910	明治 43 年	酒井商会で丁稚として下積みを行なう。日田重太郎から創業資金を恵まれる。	
1911	明治 44 年	6月、門司市に出光商会を創業する。26歳	

第2題 宗像地域における黎明期の遺跡発掘調査

考古学の本格的な地域解明の意図を持った調査は、戦前の田中幸夫の田熊石畠遺跡の調査から始まる。昭和7年（1932）の宗像高等女学校の運動場拡張に伴う調査である。以後、鐘崎上八貝塚・釣川・沖ノ島・稻元経塚・香葉遺跡などが、昭和14年までに行われる。調査は、現在の試掘、工事立会調査に当たる。これらは、宗像考古刊行会『田中幸夫先生と宗像郷土館』2010年に纏めておいたので、参考されたい。

これ以前は、福岡県史跡天然記念物調査で、島田寅次郎の鐘崎織幡宮の石棺、柴田常恵の上高宮古墳を実施されているが、概要のみで詳細が不明である。

発掘調査の開始は、昭和41年（1961）の東郷遺跡群の本格的な調査から始まる。日本住宅公団の日の里団地造成に伴う大規模開発（200ha）に伴う調査からである。福岡県史跡調査会委託を受け、九州大学（春成秀爾）・福岡教育大学（波多野院三）を担当者とし構成される。波多野先生は、古代史を専門であつたが、考古学に造詣が深く、教育大学の宗像町赤間への移転に伴い、以後は発掘調査の依頼を受け、調査することになる。下記の内容は、この頃から宗像市の市政施行前の昭和54年頃までの内容となる。

1. 波多野先生と福岡教育大学歴史研究部考古班

（1）波多野院三先生（1912～1992）

先生は、明治45年山口県下関市生まれで、九州大学法文学部国史科専攻され、後に福岡教育大学教授となる。退官後の1975年、梅光女学院短期大学教授となる。1978年に福岡教育大学名誉教授となる。福岡県文化財保護審議会専門委員を務める。古代史を中心に研究され、代表的な研究に『筑紫史論1～4輯』、『久留米藩』などがある。福岡教育大学の宗像統合移転に伴い、宗像へ転居される。転居に伴い福岡県教育委員会から宗像地区の調査を依頼され、開発に伴う古墳・集落の調査を実施された。特に、歴史研究部考古班の育成に当られ、宗像郡内の分布調査を促進された。しかし、大学の休み期間中では、急速な開発の対応できず苦悩された。下記の調査は、先生が調査責任者として、実施した緊急発掘調査である。



元号	調査時期	調査された遺跡	備考
昭和 41 年	1966 年 7~12 月	宗像町東郷田熊遺跡群 ・スペットウ古墳の調査	東郷遺跡群 前方後円墳 1 基・円墳 3 基
	1966 年 11 月	福岡教育大学の移転に伴い宗像町へ転居	
昭和 45 年	1970 年 10 月	津屋崎町東郷古墳公園の調査	円墳 1 基
昭和 46 年	1971 年 3 月	宗像町三郎丸古墳群の調査	円墳 9 基
	1971 年 9 月	宗像町稻元墨巡須恵器窯跡の調査	須恵器窯 1 基
	1971 年 10 月	宗像町相原古墳の実測調査	前方後円墳石室の実測
昭和 47 年	1972 年 5~9 月	福間町津丸・久末古墳群の調査	円墳 7 基
	1972 年 10~11 月	玄海町会所坂古墳の調査（高向）	円墳 1 基
昭和 48 年	1973 年 1 月~3 月	宗像郡分布調査（宗像町・玄海町）	
	1973 年 10 月	玄海町田野瀬戸 2 号墳の調査	前方後円墳 1 基
昭和 49 年	1974 年 3~10 月	宗像町城ヶ谷古墳群の調査	円墳 19 基、前方後円墳 1 基
昭和 50 年	1975 年 4 月	福岡教育大学定年退官	
	1975 年 10 月	『筑紫史論 3 輯』の刊行	宗像の報告書を収録

(2) 福岡教育大学歴史研究部考古学班の活動

昭和45年の遠賀郡岡垣町糠塚南遺跡の発掘調査を契機に結成された大学のサークル活動である。活動は、昭和62年度ごろまで自主活動が続いた。考古班の活動を纏めたものは、『城ヶ谷古墳群』1977年から引用しながら、この組織の活動を明らかにしたい。宗像市制前の発掘調査を振り返る。

①目的

「古代宗像史を追求する」を活動方針とし、併せて文化財保護を行なうことを旨とされる。主に①文化財の分布調査、②遺跡の発掘調査、③文化財保護の啓発を活動の柱とされる。

その経過は、「はじめて文化財保護運動が問題となった糠塚南遺跡では、『古代遺跡がなんら調査もされず、人知れず破壊されようとしている。このことはどうしても許しがたく、また全国的に保存運動が叫ばれている情況下に、これを問題として取り上げないわけにはいかない。何とか保存すべき手を打つべきだ。』といった考えのもとに、行政機関へ保存を訴つたえていったが、実らなかつた。

調査要求に対しても、その必要性はないと取り上げられなかつた。そこで『文化財保護運動の一環として、私達自身で発掘調査に踏み切ろう。そして、発掘を契機として文化財保護運動を住民にアピールするとともに、私達のできるかぎりの記録保存につとめよう。』という考えのもとに発掘調査へと踏み切ったのである。』とされる。

②考古班の結成まで

波多野院三先生が顧問であり、発掘調査においては、調査責任者となる。波多野は、福岡教育大学の教授で、昭和41年（1966）の学芸大学統合移転に伴い、11月に久留米市より宗像に転居される。調査担当は、スペットウ古墳・東郷2号墳・東郷7号墳・東郷8号墳、田熊中尾遺跡、田熊上ノ畠南遺跡・田熊上ノ畠北遺跡の調査に当たられた。

昭和45年7月に岡垣町糠塚南遺跡で発掘調査を実施される。翌年の昭和46年（1971）に宗像町三郎丸古墳群で古墳の調査を2月28日～3月18日に実施した頃は、歴史研究グループとあり、この古墳群の調査・整理を経て、12月に報告書刊行が行なわれる。

遺跡名	調査時期	調査成果
スペットウ古墳	昭和41年7月～12月	前方後円墳、横穴式石室の石室
東郷2号墳・東郷7号墳・東郷8号墳		円墳、横穴式石室。石室の基底部を残す。

田熊中尾遺跡	昭和41年7月16日～8月5日	弥生時代前期末～中期
田熊上ノ畠南遺跡	昭和41年9月4日、11月17日	遺物包含層
田熊上ノ畠北遺跡	昭和41年12月1日～	竪穴住居・ピット・土坑

東郷遺跡群 1967年3月日本住宅公団より作成。

遺跡名	調査時期	調査成果
糠塚南遺跡（岡垣町）	昭和45年2月28日～3月18日	弥生時代集落
東郷公園内古墳	昭和45年3月8日～3月17日	円墳、横穴式石室

学生は、報告書によると1年生～4年生まで20名が知られる。新1年生も5名である。

昭和45年（1970）に津屋崎町渡の東郷公園で横穴式石室の調査がなされる。この続いた2件の調査に参加した学生が、翌年の昭和46年4月頃から、歴史研究部考古班として改称、組織化される。

③歴史研究部考古班の構成員

当時、所属していた班員を『三郎丸古墳群』・『津丸・久末古墳群』・『城ヶ谷古墳群』・『清田ヶ浦古墳群』・『野坂の土器について』などで年次と班員の名前を調べたが、昭和53年度以降の学生の名前が不明である。彼らの先輩には、福岡県教育委員会の川述昭人・森田勉が相談相手としてサポートした。

元号・西暦	班員名	参加した遺跡調査・整理
昭和42年度 (1967)入学	芦田博之・高野信行・長嶺豊秀・大石官・尾崎義孝	三郎丸古墳群（調査）、東郷公園（調査）、大石津丸・久末古墳群（発掘）
昭和43年度 (1968)	晃治・光枝房枝・竹林久美子・小島京子・田尻陽之助	光枝房枝（沖ノ島）、三郎丸古墳群（調査）、東郷公園（調査）、晃治・光枝・田尻、津丸・久末古墳群（発掘）、浜宮貝塚（発掘）
昭和44年度 (1969)	江浜明徳・田代修司	三郎丸古墳群（調査）、東郷公園（調査）、浜宮貝塚（発掘）

昭和 45 年度 (1970)	筒井亀・鹿島秀世・中尾徹・重住昌志・小沢純子・浦山博子・犬上芳枝・梶原麗子・大庭洋子・吉松恭子・上野正治・与那嶺裕重	三郎丸古墳群（調査）、城ヶ谷古墳群（発掘）、筒井・鹿島勝浦峯ノ畠古墳（発掘）、浜宮貝塚（発掘）
昭和 46 年度 (1971)	横山栄二・澤田康夫・高崎紀子・与田伸子・河口桂子・原真知子	三郎丸古墳群（整理）、城ヶ谷古墳群（発掘）、澤田 勝浦峯ノ畠古墳（発掘）、宗像町遺跡分布調査
昭和 47 年度 (1972)	荒石正・古賀茂雄・佐野哉夫・岸本真喜子・権藤八千代・直江千秋・鳴海豊子・西依美穂子・平野千鶴子・富士崎秀子・村上千鶴・森木博子・中川原哲治・有津潤・麻生意子・森木弘子・木村あけみ	津丸・久末古墳群（発掘）城ヶ谷古墳群（発掘）、宗像町遺跡分布調査
昭和 48 年度 (1973)	牛島康展・友延正広・山口聖一・菊池和子・三浦美恵子・森方和惠・吉原豊子	津丸・久末古墳群（整理）、城ヶ谷古墳群（発掘）、宗像町遺跡分布調査
昭和 49 年度 (1974)	稻田雄一・木村真一・松原恵治・江口まり子・御屋敷なおみ・倉地寛子・鍬釣真澄・古賀真由美・谷口可賀・永岡史子・平山昌子・木村真一・高木保	城ヶ谷古墳群（整理）、清田ヶ浦古墳群（発掘）、奴山正園古墳（発掘）、石丸遺跡（発掘）、宗像町遺跡分布調査、野坂土器（整理）
昭和 50 年度 (1975)	落石俊則・石塚智子・居原和代・大賀玲子・藤丸悦子・大塚奈美子・古藤敬子・坂本律子・塚田富子・富永光子・村田ひとみ・米田輝子・江口まり子	城ヶ谷古墳群（整理）、清田ヶ浦古墳群（発掘）、奴山正園古墳（発掘）、石丸遺跡（発掘）、野坂土器（整理）
昭和 51 年度 (1976)	高木保・和田文子・森和代・三村芳香・大坪博子・山本嘉子・河野憲朗	城ヶ谷古墳群（整理）、清田ヶ浦古墳群（発掘）、奴山正園古墳（発掘）、石丸遺跡（発掘）、野坂土器（整理）
昭和 52 年度 (1977)	宮内智久・田上憲一・石塚智子	城ヶ谷古墳群（整理）、野坂土器（整理）
昭和 53 年度	以下、不明	
昭和 54 年度		
昭和 55 年度		
昭和 56 年度 (1983)		宗像高校四塚会館資料（整理）
昭和 58 年度 (1983)		城ヶ谷古墳群 II（発掘） 宗像高校四塚会館資料（整理）
昭和 61 年度 (1986)		1月 18 日、久原遺跡で現地説明会を開く

『三郎丸古墳群』・『津丸・久末古墳群』・『城ヶ谷古墳群』・『清田ヶ浦古墳群』・『野坂の土器について』の各報告書より、引用。

(3) 調査活動と成果

①巡検

新入部生の歓迎会を兼ねて毎年4月に実施された。昭和47年4月23日の開始された頃の日程を示す。見学用資料は、10ページのガリ版刷りで作られた。赤間駅に9時集合、宗像大社→牟田尻装飾古墳（桜京）→神湊古墳群→須多田住居跡→天降神社古墳→宮地嶽古墳→宮地住居跡のコースである。当時は、桜京古墳に自由に入れた。

②調査活動

主な活動は、当初は、古墳数基を春・夏期などの休み期間中に実施された。したがって、田野瀬戸2号墳・高向古墳・相原古墳などの緊急調査等の小規模な調査と中規模の三郎丸古墳群、津丸久末古墳群、城ヶ谷古墳群などである。特に、三郎丸古墳群で9基、津丸久末古墳群で4支群7基、城ヶ谷古墳群で20基を調査することになる。三郎丸古墳群は、大学に隣接した地点であり、学生も参加しやすかった。これらは、いわゆる手弁当の調査であった。

ところが、昭和47年頃から、宗像郡の国鉄（JR）沿いの大規模な宅地造成に伴う津丸久末古墳群・城ヶ谷古墳群の調査になり、いわゆる調査費を開発者負担する方式に移行した。三郎丸古墳群は、古墳が9基の調査であり、何とか調査・報告書が纏められた。ところが、福間町津丸・久末古墳群の開発は、対象面積が57万m²あり、野間尻7基、長林2基、長尾2基、赤はげ1基、飛塚9基の計21基と集落遺跡があったが、古墳7基、集落のトレンチ調査しか行なえなかつた。九州大学の学生が応援に駆けつけたが、14基が未調査でなくなることになる。開発業者は工程管理のみで、調査の終えることなく開発となる。大学の休暇利用の調査体制に限界があった。しかし、昭和47年9月5日に津丸公民館で調査説明会が開かれ、公開・啓発は実施されている。当時の新聞記事には、「福間町津丸の東急不動産団地造成で、5月1日開始し、7月13日～8月末まで、現地に泊まり込み十数人が交代で57万m²の古墳を発掘している。」とある。高校時代に手伝いに行つたが、7基の古墳調査が実施されていたが、残る古墳はブルドーザーにより削られ、石室上面が露出していた。ある先輩は、「学生として精一杯やつているが、大学の授業もあり7基を掘ることしか出来ない。そこで、新聞発表をやり、期間の引き延ばしを求めたが無理であった」と聞いた。この教訓は、城ヶ谷古墳群に引き継がれる。報告書は、B5版本文66ページ、図版12ページであり、2年後の昭和49年11月に刊行される。

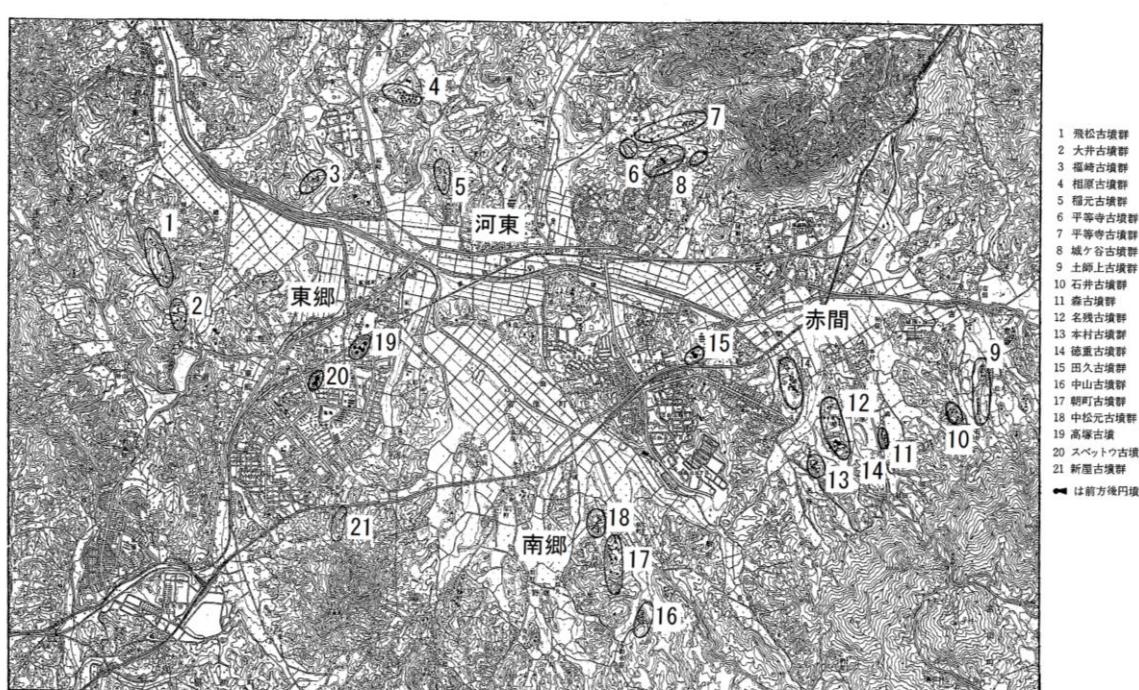
城ヶ谷古墳群は、前方後円墳1基を含む円墳20基が発掘され、群集墳一尾根支群を面で調査された。報告書は、B5版本文185ページ、図版52ページであり、昭和52年11月に刊行される。報告書では、古墳の石室形態、その変遷、年代の検討がなされ、竪穴系横口式石室の変遷が纏められた。また、出土品に鋸があり、その検討と類似品の比較がなされ、出土の意義が書かれる。さらに、出土須恵器の編年案が示され、石室の年代ともあわせて、宗像における最初の土器編年がなされた。報告書は、昭和52年に刊行される。昭和50年3月に波多野院三の退官後は、組織的な発掘調査は実施していない。

昭和53年頃までは、福岡教育大学の調査・研究成果が、宗像の最前線であった。

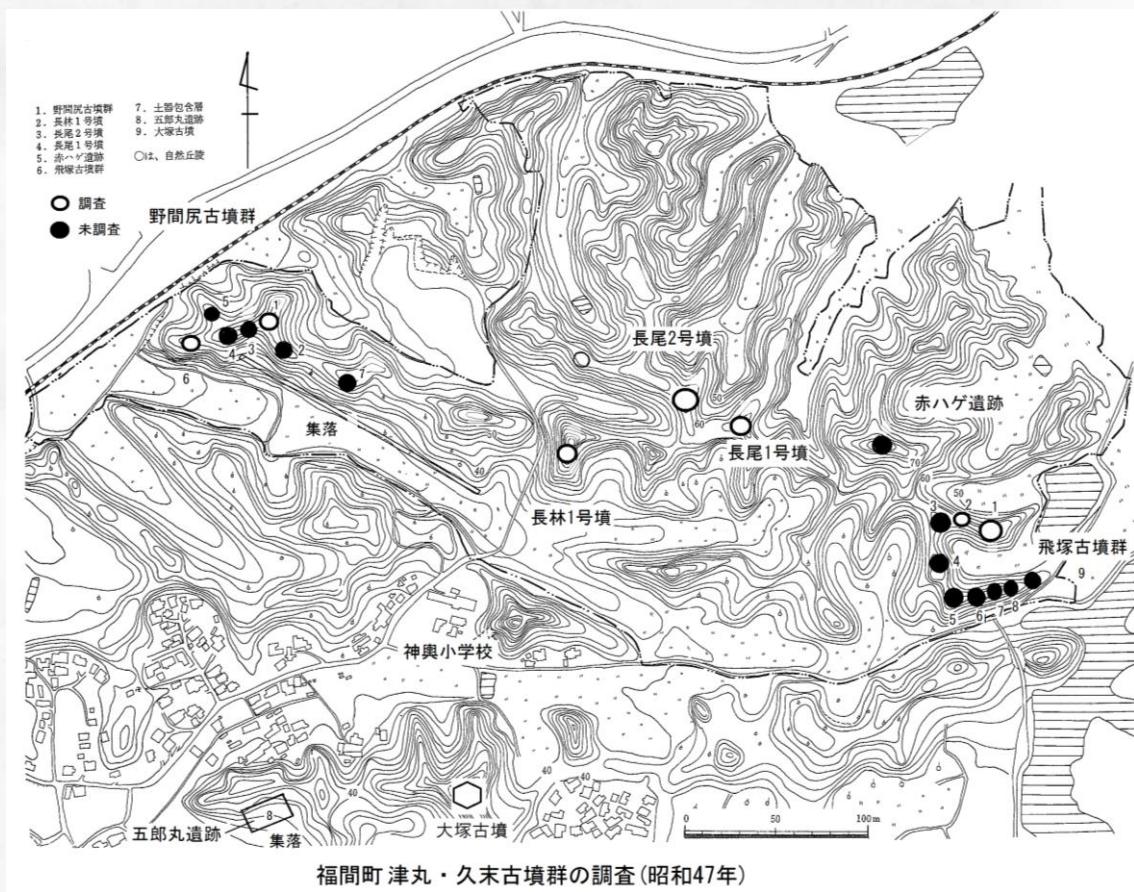
また、分布調査やその知見は、昭和54年の『宗像沖ノ島』の「宗像古代遺跡地名表」の成果として収録される。

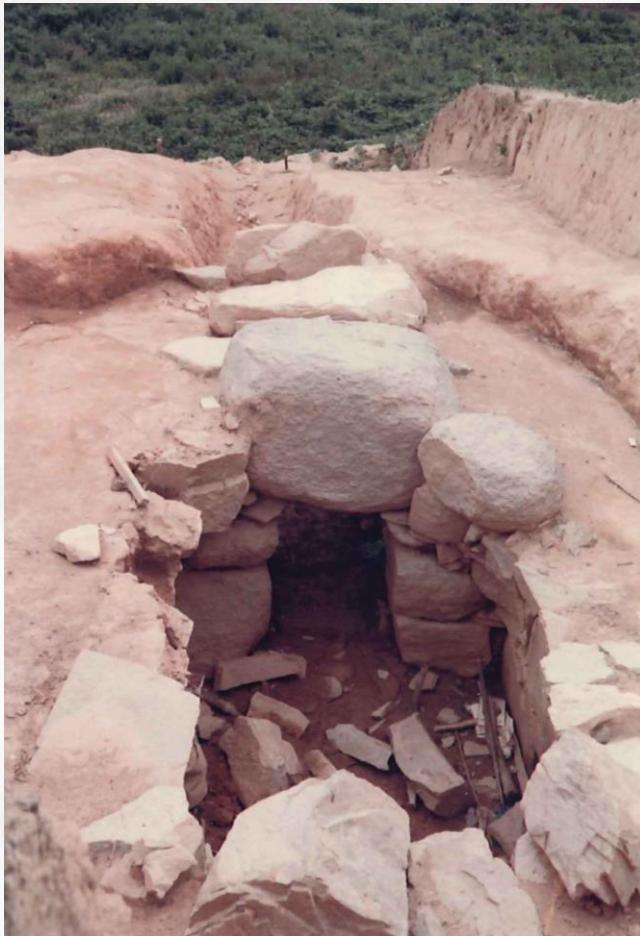
発掘調査黎明期の昭和40年前半～昭和54年までは、発掘調査は小規模であり、「遺跡分布調査」の時代とも云える。

以後宗像市へ引き継がれる。



昭和52年頃の主な古墳の分布図





津丸・久末古墳群（飛塚1号墳）



未調査（破壊）

③波多野先生による歴史研究部考古班の評価

『筑紫史論』第3輯より下記に引用。

「昭和41年に四つの分校が宗像町赤間に統合し、教育大もやっと四年制大学としての正統な歩みを辿り始めた。学生が一ヶ所に集ることで、これまで2年ごとに分断されてきた学生生活が、とにかく4年間一ヶ所で済むことになり、学生との接触の面でも大きな変化があった。新しい校舎にも資料室が準備されてはいたが、持ち込まれたケースも遺物も大部分が久留米からのものである。その年の夏から冬にかけて行われた東郷日の里団地の造成に伴う遺跡調査には、はじめて久留米以外の田川分校から来た学生たちも参加して來たし、それからは年度が變るたびに新しい学生がつぎつぎと参加し、次第に資料室を中心に組織が拡大された。発掘への興味から集った単なる同好学生のグループも、何時かこの大学の歴史研究部考古学班と云う研究団体となり、資料室も土器の復原作業や研究討議の場となり、発掘調査を重ねるうちには資料整理から報告書の作成まで、総てが学生の手で出来るまでに

成長した。そう云う教育大考古学班の先頭にあって県内各地の発掘調査を繰返し、退官の今日まで大過なしに過せたことは、私にとって楽しい思い出の一時である。」

と評価がなされる。

学生であった澤田康夫は、「波多野先生は、人物はやさしく、面倒みの良い先生であったが、気を利かして仕事を手伝おうとすると、自分でやると頑固な側面もあったと云う。明治生まれの気質を感じたと云う。特に、学問に於いては、容赦なく厳しかった」と回想する。

2. 文化財保護と啓発活動

代表的なものが、城ヶ谷古墳群の調査とその取り組みである。『城ヶ谷古墳群』1977年に詳細が書かれるが、具体的取り組みが行なわれた。それは、①発掘ニュース、②現地説明会、教育現場の交流であった。

(1) 城ヶ谷古墳群発掘を通しての文化財保護運動の展開

昭和48年12月、福岡県教育委員会文化課を通して、業者より城ヶ谷古墳群発掘依頼があった。その経過を『城ヶ谷古墳群』より引用する。

「私達は、この発掘依頼を受けて文化財保護の立場・学術的な立場の両面から討論を積み重ねていった。その間、発掘依頼を拒否・全面保存運動を展開していくべきだという意見。いや発掘依頼を受け文化財保護運動を展開すべきだという意見の2つに分かれた。前者の場合、この宗像町内において住民運動を展開できる基盤が班内にも、住民にもまだ形成されていない。時期尚早であるという意見に押し切られた。後者の場合、あくまで発掘（記録保存）を肯定するものではない。いくら記録保存したといつても、その遺跡はこの地上から抹殺されてしまうのである。これでは、私達自身が破壊の手助けをしていると批判されても仕方がない。それで、今までのように記録保存のための発掘調査（最低限の資料保存）といったパターンから発掘をやらずに保存するという運動へ切りかえていくための過渡期であるという考え方である。つまり、地域住民と連帯するための基盤を、この城ヶ谷古墳群発掘調査を通して作っていこうというものである。このような基本方針のもとに、私達は城ヶ谷古墳群発掘依頼を受けていった。」

まず、彼らが取り組んだことは、地域住民との連帯を深めるために発掘調査の随時経過報告（発掘ニュースの発行）・現地説明会の開催・教育現場との交流であった。

「発掘ニュースの発行は、発掘調査開始報告と、第1回現地説明会案内をかねて3月に1回、第2回現地説明会案内で5月に1回それに大学祭（出土遺物展示会・文化財保護シンポジウム）への呼びかけで12月に1回、計3回町内全域を対象として9,000枚を配布した。

第1回現地説明会、第2回現地説明会では、延べ2,000人の町民の参加が得られた。また第2回現地説明会では、現場にて宗像町教育委員会・郷土史家・一般の人々それに私達との4者で、『文化財保護に関するシンポジウム』を開いた。その結果、町行政の文化財問題に取り組む姿勢の甘さがおおいに問題となつた。また、一般の人々からは、『今まで、文化財保護と言われても、実感がなかつた。今、自分が見学して来た。古代遺跡が永久になくなってしまうのかと思うと、どうにかして保存できないものかと痛切に思う。』『発掘調査をしている人々は、もっともっとこのような説明会を催し、1人でも多くの人に文化財保護を訴えて行くべきだ。』等の意見が出されていった。

教育現場との接触では、宗像町教育委員会の賛助をえて、町内の小学校へ発掘現場紹介、見学案内をしてもらった。その結果、河東小学校・赤間小学校の先生方の賛同を得ることができ、発掘現場における小学生の見学会が実現した。その後、赤間小学校では社会科クラブの6年生が、私達のクラブを訪問し、郷土の歴史の勉強会を私達と行なつた。次に、行政機関への対応であるが、4月12日に宗像町町長へ抗議文（資料1）を提出した。これは、広報『むなかた』4月15日発行、第1面、『ご先祖さまも引っ越し』という記事が、私達の提出した文章とあまりにもかけはぜており、これを読んだ人々に誤解を生むと思われたから、その旨を抗議したのであった。その結果、文書での謝罪はなされなかつたが、口頭謝罪という形で収容された。」

—昭和49年度（1974）—

日付	内容
2月15日	班会…城ヶ谷古墳群発掘依頼について
2月16日	班会…城ヶ谷古墳群発掘について
2月28日	班会…城ヶ谷古墳群発掘調査開始にあたつて
3月1日	城ヶ谷古墳群発掘開始
3月7日	班室にて、県教委文化課・奥村組・教育大学波多野教授・考古学班の4者で、城ヶ谷古墳群調査計画打ち合わせ
3月15日	宗像町立河東小学校4年生68人、社会科見学として発掘現場訪問
3月23日	第1回現地説明会（約1,000人）
4月11日	班会…城ヶ谷古墳群発掘について ・期間及び方針・広報「むなかた」について・第1回現地説明会反省 ・第2回現地説明会方針検討
4月12日	宗像町長へ抗議文提出・宗像町教育委員会へ質問状提出
4月15日	宗像町長へ質問状提出
4月22日	班会…城ヶ谷古墳群発掘状況報告 質問状に対する回答報告 現場にて、県教委文化課・奥村組・考古学班の3者で打ち合わせ

4月 26日	班会…文化財保護条例の取り扱い方と、私達の文化保護運動に対する姿勢
5月 2日	町教育委員会と話し合い質問状回答に対するその後の取り組みについて
5月 4日	班会…第2回現地説明会打ち合わせ文化財保護に関する学生向けビラの読み合わせ、5月2日、町教育委員会との話し合い報告
5月 12日	第2回現地説明会（約1,000人）
5月 15日	班会…第2回現地説明会反省町教育委員会からの提起事項について
9月 5日	『文化財についての懇談会』-文化財問題にどう取り組んだらよいか-
	『城ヶ谷古墳群発掘期間中に於ける文化財保護関係活動報告』『城ヶ谷古墳群』より引用。

また、宗像町町長・宗像町教育委員会へ質問状を提出された。これは、今までの宗像町の文化財に対する姿勢を告発するとともに、今後の町行政の文化財に対する基本方針を明らかにしてもらいたいと考え、その手始めとして、4ヶ条からなる質問状を提出された。

その結果、昭和49年9月5日、宗像町教育委員会主催『文化財についての懇談会』-文化財問題にどう取り組んだらよいか-が開催された。

業者に対しては、保存される14基の古墳群が緑地公園として計画されていたので、公園内への収蔵庫の設置、古墳を巡回する遊歩道の設置などを要求された。

そして、このような一連の運動の中間総括として、12月6日～8日の大学祭において、『城ヶ谷古墳群出土遺物展示会』及び『宗像町における文化財保護の現状』というパンフレットを配布し、それとともに懇談会を開かれた。

このように、考古班は城ヶ谷古墳群発掘調査を通して、徹底した班内討議をくり返しつつ、基本方針「文化財保護運動の展開は、単に行政批判のみにおわるのではなく、地域住民との連帯のもとに行なうべきである。そのための連帯基盤を作ろう。」に沿って運動を展開された。

(2) 城ヶ谷古墳群調査の取り組みと評価

発掘ニュースの発行は、発掘調査開始報告と、第1回現地説明会案内をかねて3月に1回、第2回現地説明会案内で5月に1回、それに大学祭（出土遺物展示会・文化財保護シンポジウム）への呼びかけで12月に1回、合計3回町内全域を対象として9,000枚を配布した。

第1回現地説明会、第2回現地説明会では、延べ2,000人の町民の参加が得られた。また第2回現地説明会では、現場にて宗像町教育委員会・郷土史家・一般の人々それに私選との4者で、『文化財保護に関するシンポジウム』を開いた。その結果、町行政の文化財問題に取り組む姿勢の甘さが問題となつた。

また、参加者の意見が紹介されている。

「一般の人々からは、『今まで、文化財保護と言われても、実感がなかった。今、自分が見学して来た。古代遺跡が永久になくなってしまうのかと思うと、どうにかして保存できないものかと痛切に思う。』『発掘調査をしている人々は、もっともっとこのような説明会を催し、1人でも多くの人に文化財保護を訴えて行くべきだ。』等の意見が出されていった。」

また、教育現場との関係では、古墳群に隣接する小学校への現場見学会が実施される。

「教育現場との接触では、宗像町教育委員会の賛助をえて、町内の小学校へ発掘現場紹介、見学案内がなされた。その結果、河東小学校・赤間小学校の先生方の賛同を得ることができ、発掘現場における小学生の見学会が実現した。その後、赤間小学校では社会科クラブの6年生が、私達のクラブを訪問し、郷土の歴史の勉強会を私達と行なった。」

以上のように、当時としては発掘調査→保存啓発→地域学習の流れで、文化財保存の先駆的な取り組みが行われた。現地説明会は、2回実施され合計2,000人である。平成20年(2008)の田熊石畠遺跡の現地説明会(1,800人)でもこの参加者を超えていない。さらに、河東小学校・赤間小学校の生徒数を入れると、更に数が増えるのだろう。

当時、宗像町に出された公開質問状を受けて、宗像町教育委員会主催の「文化財についての懇談会」が実施された。参加した市民、学生、郷土史家に共通の文化財に対する認識ができ成果が上がった。

ある考古班の先輩は、「僕らは、教員となり文化財を大切にする生徒を育てたい」と云われたことが印象的であった。学生たちの積極性と行動力は、凄まじいものがあった。



城ヶ谷 12 号墳



城ヶ谷古墳群（赤間ヶ丘・泉ヶ丘）

この古墳群は、筆者が高校2年生の昭和47年4月に城ヶ谷の丘陵で10基の古墳群を発見し、教育大学の先輩に連絡したものであった。私も、城ヶ谷古墳群の発掘調査に参加し、赤間駅で第1回の現地説明会の案内と保存のビラを配った。翌年には、担当した城ヶ谷12号墳の遺物整理に参加した。

(3) 城ヶ谷古墳群のその後

『城ヶ谷古墳群II』宗像市教育委員会によると、下記の通りの対応となった。

「1982年6月15日、業者から、宗像市大字平等寺・三郎丸地区の土地開発に係る協議書が宗像市に出された。申請地は、かつて、1973年12月に赤間宅地造成事業として開発申請が出されている。この時点では、業者・福岡県教育委員会・宗像町教育委員会・福岡教育大学を交えた協議により、平等寺地区の14基の古墳については緑地帯として保存し、緑地内には資料館・遊歩道を設置して古墳公園とする。そのほかの古墳群は、工事着工前に緊急発振調査をして記録保存することを決めた。これによって、三郎丸地区の古墳群の発掘調査を1974年3月に開始し、同年10月にこの地区的発掘調査を終了した。ところが、平等寺地区の発掘調査に入る段階になって、開発に伴う諸々の条件が整わないと本工事が中止となつた。このため残りの発掘調査も中断することとなつた。」

1982年7月、事業区内を貫通する都市計画道路が事業認可を受けたため、宅地造成と道路建設が同時進行することとなり、緊急発掘は工期との関係上、急を要する事態となった。1982年の申請時点において、平等寺地区の約14,500m²については自然公園として整備保存することが、福岡県教育委員会の指導として明記されていた。このため発掘調査は保存地区以外の平等寺地区の古墳群から着手した。1983年3月1日着手時には、約15基の古墳を確認していたが、調査の進行とともに、丘陵尾線上に、古墳の盛土をほとんど流失した古墳群の存在を知ることとなり、大規模調査の様相を示してきた。それにともない、調査計画は大きく変更され、工期との調整も困難をきわめた。

これとは別に、発掘調査の中途において、宗像市都市計画課から、保存地区の自然公園計画に異議が出された。宗像市が近隣公園として都市計画決定を受けるためには、自然公園としては認められないというものであった。現行の都市計画法では、開発事業区内には児童および近隣公園は開発面積の3%以上必要となっている。法の中では自然公園は含まれないとしている。このために急遽、福岡県教育委員会、宗像市教育委員会、宗像市都市計画課を交えた協議を行ったが、結果として、保存地区の5基の古墳について約5,000m²のみは今後緑地帯として整備保存する。他の古墳については、発掘調査を実施して記録保存することとなった。また、緑地内に建設予定であった資料館は、宗像市中央公民館敷地内にプレハブを建設して、整理・保存することとなった。これを受けて、1983年8月に近隣公園は、「都市計画決定した」。

城ヶ谷古墳群の開発区域には、北西部に5基の古墳が緑地帯（約5,000m²）として整備保存された。

3. 宗像郡内遺跡の分布調査

(1) 調査とその内容

昭和47年から三ヵ年計画で宗像郡内の遺跡分布調査が実施される。当時、宗像郡の遺跡地図は、昭和36年『宗像神社史』収録図で、田中幸夫作成による成果が唯一で最も詳しいものであった。しかし、出土地点が大縮尺地図で照合が困難であった。宗像町では、昭和48年3月に実施され、宗像町役場からは牧田・尾山清・瀧口、教育大学考古班の澤田・高崎・與田・赤星と、東海第五高校の筆者・鎌田が参加し実施された。行政担当者は遺跡に詳しくなく、東海第五高校の歴史クラブの古墳分布図と教育大学歴史研究部考古班の自主分布調査の成果が収録される。調査は、先の調査の追認調査であった。分布調査の対象地は、教育大学考古班の今後の団地開発計画地を中心に精査を目指し、登録した。その成果は、『宗像町埋蔵文化財一覧』宗像町教育委員会1980年に纏められ、下記の表の通りである。

一方、玄海町でも昭和47年12月行われ、玄海町役場の桑野勇、松本肇（宗像大社）・江口航三（玄海中学校）、立部祐道住職（鎮国寺）・波多野先生と教育大生、東海大学付属第五高等学校（2016年度より東海大学付属福岡高等学校と校名変更。以下、東海第五高校）の鎌田・筆者が参加した。宗像町

と同様に、行政担当者は遺跡に詳しくなく、牟田尻・神湊地区、多礼・吉田・田野地区は東海第五高校の分布図、上八・鐘崎・池田地区は教育大学分布図が収録された。昭和54年に『玄海町誌』に収録される。

津屋崎町では、昭和48年1月に田中香苗・北野清美の所属する津屋崎郷土史会に調査が委託された。郷土史会は、昭和44年に結成されたグループで、自主活動をされていた。宗像会員の流れを引くグループである。特記されるのは、津屋崎古墳群の勝浦峯ヶ畠古墳・勝浦井ノ浦古墳・奴山正園古墳・大石岡の谷1号・2号墳などはこのグループの自主活動の発見によるものである。東海第五高校の歴史クラブは、新原・奴山古墳群と宮司地区の分布図を提供した。福間町は、福間町郷土史会により実施された。これらの成果は、昭和52年発行の福岡県教育委員会『福岡県遺跡地図』に収録される。当時、上記のある町の分布調査に参加とき、保存の悪い古墳は登録しない方が良いとか、形あるものは壊れるとか、高校生の筆者と鎌田は度肝を抜く発言に驚いた。この町は、古墳が後の分布調査で増えたのはそれが原因かも知れない。当時は、いわゆる手弁当の調査であった。

1975年 宗像町埋蔵文化財一覧	発見数	1979年 玄海町誌	発見数	2011年 宗像市遺跡等分布地図 +	発見数	発掘調査数
古墳	435	古墳	202	古墳	2, 23 6	780
集落・散布地	10	集落・散布地	2	集落・散布地	※	
須恵器窯	3	須恵器窯	0	須恵器窯	※	
その他	1	その他	10	その他	※	
合計	449		214	※古墳のみ比較		

♦宗像市の古墳数は、原俊一の御教示による。

宗像町の踏査日程 内容・踏査コース

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 3月2日 | 役場打ち合わせ |
| 7日 | 河東・福崎・池浦 |
| 9日 | 須恵・相原・稻元 |
| 12日 | 山田・平等寺・陵巖寺 |
| 15日 | 安倉・武丸・土師上・高六 |
| 16日 | 徳重・富地原・名残・田久・朝町 |
| 18日 | 野坂・中山・総括(東郷) |
| 19日 | 東郷・高塚・用山・平井 |
| 20日 | 大井・総括(東郷) |
| 宗像町遺跡分布調査、昭和48年 | |



津屋崎郷土史会の田中香苗会長

(2) 宗像町遺跡分布調査のまとめ

当時の宗像町遺跡分布調査のまとめを宗像町で纏められている。下記に引用する。

「昭和47年以来、3回にわたって宗像町の埋蔵文化財分布状況調査を行ってまいりました。今回の調査でだいたい完璧にちかいところまでこぎつけたと思います。実におびただしい古墳が宗像町内に散在しております。そして、これらの古墳が毎年確実に、破壊されていっています。急激にベッド・ダウンとして変貌している宗像町は、同時に自然の破損、文化財の破壊を道連れにしてきているといえます。開発と文化財保護との関わりが、相互対立の関係として存在しているところに不正常さがあろうかと思います。ともあれ、文化財の破壊（=都市開発等々）は、また、文化財問題を語り、考える機会を与えてくれます。教育大学歴史研考古学班主催による城ヶ谷古墳群の現地説明会では延べ、1,000名をこえる人々が、稻元古墳群では1日で150人の老若男女が参加しております。日の里の古墳公園が教育大、地元の方々の自主的な集いによって清掃され、古墳公園にふさわしい装いがなされようとしています。

この小冊子が、宗像町における開発問題、あるいは文化財問題を考えるうえで、多少なりともお役にたてば幸いです。昭和50年2月 宗像町教育委員会」

上記の日の里の古墳公園（東郷高塚古墳）の清掃は、次項の昭和49年度・50年度入学生の教育大学考古班の活動である。

4. 野坂の土器と中松元古墳群

昭和49年度・50年度の入学生が中心となり、野坂中松元古墳群の破壊に伴う県・町への通報から、勤労者住宅生活協同組合が実施する開発区域で、古墳・遺跡破壊が行なわれた。

この古墳群は、昭和50年2月に宗像町遺跡の分布調査報告書に記載された、周知の遺跡である。この古墳群は、昭和46年度・47年度の彼らの先輩により、発見されたものである。

『野坂の土器について』宗像町教育委員会 昭和53年（1978）より、引用しながら記述する。

野坂中松元古墳群の破壊経過

昭和51年 3月	労住協（勤労者住宅生活協同組合）宅地造成をはじめる。
4月 15日	“北側8基発掘の上破壊、南側8基緑地として保存”という旨が、県の文化課と町の社会教育課と業者によって口答で確認される。 (業者はこの確認にもかかわらず、発掘予定の3基を未調査のまま壊し、更に、保存されるはずの南側8基の山裾も削ってしまう。)
8月 20日	労住協の依頼した発掘調査団によって、北側8基のうち壊されていない5基の発掘調査に着手する。（この発掘は充分とはいえない。）
9月 15日	考古学班員によって住居跡らしいものが発見される。 (町の社会教育課を通して、県文化課に調査を要請)
9月 22日	県文化課の技師による調査がなされたが、遺跡ではなく、流された土砂に土器が含まれていたにすぎない、と判明される。

	(多量の土器があったために27日50m四方に縄を張り、以後3日間工事がストップされることとなる。実際に10月7日まで工事はストップされた。)
10月15日	町主催の土器説明会が、中央公民館にて行なわれた。 (文化課の技師を招いて採集土器の説明、簡単な須恵器の変遷・窯・甑の説明などがなされた。出席者は小学校の先生6名、一般の人8名)
昭和52年 5月	町に「土器の整理」をするように提起する。
6月15日	町から「土器の整理」を依頼される。
7月10日	野坂に関する現状報告と7月21日～24日の「土器の整理」を知らせるビラを配布する。
7月21日～24日	中央公民館において「土器の整理」が行なわれる。考古学班は土器を整理ことにより住民の人と共に、文化財に触れていくこうという主旨のもとで行なう。参加者50名あまり。
7月25日～8月20日	同志社大学が発掘調査を開始する。
9月頃	県の文化課によって、保存されるはずの8基が発掘される。
昭和53年 3月11日	採集遺物の本格的に報告書作成にとりかかる。

中松元には、確実な2つの古墳群（8基ずつ計16基）の存在が確認されていた。昭和53年3月1日現在、中松元の古墳は、最初保存されるはずだった南側8基の発掘中に、8基の他に4基見つかり、残されるはずの3基のうちの1基が今年度中に発掘される予定であるとされる。当時のことが『野坂の土器について』に「宗像の文化財の現状」として記載されるので、下記に引用する。

「先人の歴史をありのままに伝えてくれる文化財は、現代に生きる私達にとってかけがえのないものと思います。特に、十分明らかにされていない原始・古代の歴史を知る上で、古代住居跡・貝塚といった埋蔵文化財は貴重な史料です。1960年以来、高度経済成長の名のもとに、全国いたるところで開発がすすめられています。それは、ここ宗像においても例外ではありません。宗像は、福岡・北九州のベッドタウンとして最適であるため、宅地造成、道路建設等によって日ごと変化しています。

宗像町には、約500の遺跡が確認されていますが、そのうちすでに開発の名のもとに壊されていった埋蔵文化財は、相当数にのぼっています。今年度・宗像町においても、開発優先の行政のもとで、住民に十分知らされることなく、石丸遺跡（弥生・古墳時代）、中松元・相原の古墳群が、期限つきの緊急調査をしたうえで壊されてしまっています。このように現在ほとんどの埋蔵文化財は、開発の中で破壊にひんしているのです。一方、この開発の波の中で、国指定・県指定として、また公園として残されている古墳等の埋蔵文化財も存在しています。しかし、せっかく残された文化財も、その地域の人々の間でどういうふうに活用されていいかわからない状況の中では、遺跡の価値さえ半減してしまうと思います。この宗像にも、日の里に古墳公園が存在していますが、私達は、この日の里の古墳を宗像の地方史を知る上で十分に活用しているでしょうか。昨今、奈良県明日香村マルコ山古墳の発掘調査がマスコミで大きくとりあげられています。あのような著名な古墳だけが、埋蔵文化財だと考えている人も多いことでしょう。皆さんのまわりを見まわしてください。この宗像においても、宗像の歴史を物語ってくれる埋蔵文化財が数多く存在しているのです。今日の埋蔵文化財の破壊

の状況を考えると、すべての文化財が、いつの日かなくなってしまうのではないかと思うほどです。文化財の価値を十分に理解し、利用していくために、私達は文化財の保存を真剣に考えないと、とりかえしのきかないような状態になるのではないでしようか。

<私達の活動について>

野坂とは別に、石丸遺跡を例にとってみますと、宅地造成中・偶然に考古学班点が土器片を一発見したことから、そこに宗像では珍しい弥生時代の遺跡が存在していたことがわかりました。そこで、私達は町の社会教育課に工事の中止と発掘調査を要請しましたが、工事は中止されず、かたわらでブルドーザーが動くなかで、わずか10日間の危険な発掘調査でした。それもただ掘り上げるといった程度のものでした。この破壊された遺跡の重要さを知っていただくために、私達は昨年7月4日、石丸公民館で独自に報告会を開きました。現在のような状況の中にあって、私達は昨年度、「文化財保護運動」を年間テーマの一つにかけ、日常の活動として、遺跡の存在を発見・確認するための分布調査、また対外的には、中央公民館における野坂の土器整理など、十分であるとはいえないが、私達なりに取り組んできました。住民の皆さんに、文化財を身近に感じていただき、文化財の現状・文化財保護について考えていただけたらと思い、この報告書を出版することになりました。今年度も、「文化財保護運動」を年間テーマの一つにかけ活動していくつもりです。今後の私達の企画に、住民の皆さんが多い数参加されることを期待します。」

当時、津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査に教育大学歴史研究部と共に参加していた筆者も、後に詳しく聞くことになった。当時の印象は、また同じ事が繰り返されたと感じた。波多野先生が退官後、教育大学で調査が実施できないので、開発が優先され、破壊が繰り返された。『野坂の土器について』宗像町のまとめが記述されるので、引用する。

「宗像の人口も5万をこえました。山紫水明の片田舎の町から、文字通り巨大なベッド・タウンへと変貌してきております。急激な変化は当然様々な矛盾を生みますが、宗像町の場合も例外ではなく、水問題・下水処理問題・公共施設の問題そして文化財問題等々生まれてきております。人口急増のあとに息をきらして追っかけていく宗像町政と評した方がおられますが、うがったことばだと思います。しかし、又、人口急増は住民間における多様な教育・文化要求の花も開かせています。ふるさとを見直す運動とサークル、地域史の発掘と学習等々…。さて、確たる歴史の事実をつみあげていくことで、宗像の歴史を明らかにしていく作業が今求められています。今回、その作業の一環にと、ほぼ一ヵ年かけて、野坂で採集された土器の整理と分析が行われてきました。そして、この小冊子にまとまりました。この作業にあたられた教育大歴研のメンバーを中心とする方々に、あらためて深甚の謝意を表します。この冊子が多くの方々に地域史学習の教材の一つとしてあつかわれれば大変さいわいです。昭和53年3月 宗像町教育委員会」

元号	年度	遺跡名
昭和 45	1966 年	東郷遺跡群（福岡県史跡調査会）
昭和 46	1971 年	三郎丸古墳群（福岡教育大学）
昭和 48	1973 年	陵巖寺茶屋辻遺跡（福岡教育大学）・三郎丸前田遺跡（福岡県教育委員会）・城ヶ谷古墳群（福岡教育大学）
昭和 49	1974 年	稻元古墳群 1（稻元古墳群調査団） 昭和 51 年に報告書が刊行される。
昭和 50	1975 年	稻元古墳群 2（稻元古墳群調査団）
昭和 51	1976 年	野坂中松元古墳群 1（野坂中松元古墳群調査団）・野坂大木遺跡（福岡教育大学）
昭和 52	1977 年	野坂中松元古墳群 2（野坂中松元古墳群調査団）・石丸遺跡（福岡県教育委員会）・相原古墳群 1（福岡県教育委員会）
昭和 53	1978 年	野坂中松元古墳群 3（福岡県教育委員会）・相原古墳群 2（福岡県教育委員会）・久戸古墳群 1（福岡県教育委員会）
昭和 54	1979 年	久戸古墳群 2（福岡県教育委員会）

黎明期の発掘調査（外部委託）

当時、町には専門の文化財担当はおらず、社会教育主事が開発に伴い、開発業者に調査者を直接依頼する状況であった。筆者は、奈良の大学に進学したが、稻元古墳群の調査の依頼が業者から考古学の恩師教授にあった。断った方が良いですよと云った覚えがある。業者は関西や関東まで探していたようだ。

5. 考古班活動がその後に及ぼした影響

(1) 田熊石畠遺跡の保存

宗像町遺跡分布調査の成果が、昭和 50 年 3 月に刊行された。これらの成果は、玄海町・津屋崎町・福間町の調査成果などと共に、福岡県教育委員会『福岡県遺跡地図』昭和 52 年（1973）で公開され、全国的に周知の遺跡として認識されることになる。宗像町庁舎は、昭和 48 に庁舎建設特別委員会を設置、昭和 50 年に建設委員会が設置、昭和 51 年に用地購入が済み、12 月に起工式が行なわれた。

昭和 49 年の後半は、稻元古墳群などの調査が問題となり、福岡教育大学考古班の町へ公開質問状等が提出されていた段階であった。由良半三郎の町長時代であった。知人より、宗像町庁舎を田熊石畠遺跡のある荒廃地に計画が検討された事もあったと云う。あそこは、「遺跡が出るから開発に手間が掛かる」との事で、候補から外され、現在の地に土盛されて着工されている。このころ、城ヶ谷古墳群の保存問題がなければ、市役所はこの地に建設された可能性があり、銅剣類も工事中の発見になっていたと思う。当時であれば、調査は不十分であったと思う。上記の件で、後に田熊石畠遺跡が残ることになる。城ヶ谷古墳群の保存運動は、一定の開発に対する抑止力が働いた一例である。その後、平成 20 年に田熊石畠遺跡の保存を求める会が結成され、市民の尽力と市長の英断で保存される。このことは、矢田公子「田熊石畠遺跡の保存を求める市民運動について」『むなかた電子博物館』創刊号（2009 年）を

参照されたい。また、昭和47年7月に牟田尻古墳群で東京の会社のゴルフ場開発計画があった。しかし、桜京古墳の発見と分布調査の成果で、92基の大型群集墳と判明しており、15年ほど開発を遅らせることができた。その結果、古墳群の開発による破壊から逃れ、多くの古墳が残る事になる。

(2) 人材と育成

歴史研究部考古班の卒業生は、多く方が教員となられた。全盛期の昭和45年入学生（1970）～昭和50年（1975）も、昭和49年を挟んで還暦前後となる。宗像の関係では、中尾徹が、昭和56年（1983）に宗像高校に赴任され、占部玄海と郷土研究部を復活され、旧宗像郷土館資料の整理を行い、昭和59年に『宗像高校視聴覚ホール資料図版・目録』を刊行された。中尾は、考古資料を担当された。さらに、資料を四塚会館に収蔵・展示された。澤田康夫は、唯一、教育の道から離れ、文化財担当者として福岡県那珂川町で遺跡調査に勤務された。江浜明徳は、2014年に『九州の戦争遺跡』海鳥社で刊行される。彼は、高校教諭で平和教育担当として、戦跡遺跡をライフワークとして活動されている。多くの方が、昨今の教育現場でご苦労されていると思うが、盆栽の道で活躍される先輩もおられた。福岡県の教員で考古学に知識のある熱心な先生、管理職が多いと思うが教育大の考古班の方々かも知れない。

筆者や鎌田隆徳は、高校時代に三郎丸古墳群・津丸久末古墳群・城ヶ谷古墳群の調査に参加し、最も影響を受けた。田熊石畠遺跡の保存を求める会の発起人に参加したのは、その影響と思う。筆者が宗像に異常に拘るのはその影響である。さらに、城ヶ谷古墳群の調査で影響を受けた少年がいる。調査後の古墳で遺物を拾い考古学を始めた白木英敏である。彼は、のちに宗像市で国指定史跡の田熊石畠遺跡の調査・保存整備を行うことになる。また、耜田雄一と交流し、彼らが日の里古墳公園の清掃活動を行っている頃である。その少年は、考古学に興味を持った川畠和弘（滋賀県守山市）で、弥生時代の環濠集落である国指定史跡の下ノ郷遺跡の調査・保存整備の担当者となる。

このように、40年を振り返ると、直接的な方々を書いたが間接的に影響を受けている方々も多いと思う。

6. 高校クラブの活動

(1) 宗像高校郷土研究部の活動

宗像高校四塚会館の資料で、宗像高校郷土研究部の活動アルバムを4冊ほど発見した。昭和38年～46年頃の資料で、クラブ活動での遺跡発掘調査、踏査の記録が収録される。

宗像考古刊行会の『宗像高校郷土研究部資料 遺跡写真』で報告したが、再録する。

特に、宗像市神湊上野古墳、宗像市相原古墳群、宗像市浜宮貝塚、宗像市大井三倉古墳など埋蔵文化財報告書が刊行されないもの、当時の調査風景を知る上で貴重な資料が含まれる。郷土研究部の当時の記録類がほとんど残っておらず、知見する調査資料より、活動と調査を復元してみた。細部は、不明な点もあるが、大まかな概要を纏めた。

活動は、昭和38年（1963）～昭和59年（1984）までの資料である。自主調査は、相原古墳群の分布調査と大井石棺の調査がある。主に、宗像で実施された東郷遺跡群・神湊上野古墳・浜宮貝塚の参加が知られる。

顧問は、山田清・松永雅生→正木喜三郎・篠崎泰真→占部玄海・中尾徹先生に引き継がれた。正木喜三郎は、「旧宗像郷土館資料」について、当時のことを書いている。下記に引用する。

「私が宗像高校に赴任したのは昭和40年4月のことである。着任早々、山本三吾校長の案内で荒廃した郷土館内を見て廻った私は、校長の希望もあり、郷土館資料を引き取り、その保管を考え、社会科諸先生の賛同を得た。移管に際して、事前に相談した小田富士雄先生の御教示に従って、木端一つ残らず運ぶことにした。社会科主任の松永雅生先生指揮のもと社会科教師全員でこれに当り、社会科授業の時間を割き、生徒諸君二人に搬送用の魚箱一つを充て、魚箱に入れて人海作戦で社会科教室へ移し終えたのである。

移管された資料は反古とゴミ。塵にまみれた土器・石器の山であった。授業の合間をぬって資料を分類、ゴミ・ヨゴレ取りは郷土部女生徒諸君が担当した。着任された篠崎泰真先生を郷土部顧問に迎え資料の整理をお願いした。その後、新校舎が落成し空室となった旧六棟の家庭科教室の一室に陳列ケースを収め、これに資料を収納することになった。社会科教室からの搬送は諸先生や、郷土部諸君の協力で行い、大まかながらも整理もでき、展示出来る状況となった。一部の資料委託者が宗高事務へ返還を要求され、私の知らぬ間に引き取られてという事態が起ったのである。宗高は資料を移管しているだけで所有権はないという事務の説明である。移管と同時に所有権も移っていると思っていた私にとって寝耳に水の驚きで、同時に整理の情熱も冷める気持である。また資料を入れた旧家庭科教室は新校舎から離れており、心なき者によって窓ガラス・陳列ケースが破られる事件が続発した。その補修を再三、学校に申し入れたが駄目で、迷惑顔されながら、窓に格子を打つことで落着した。移管した時の先生方は転出されてしまい、協力者はなく、折からの校長着任拒否闘争（昭和43年）もあって一時的にしろ、ついに管理放棄をしてしまった。だがこうした私を深く反省させることがあったのである。また管理を放棄した後の資料室を見学（昭和45年5月）された九州大学岡崎敬先生から資料保管の重要性を説かれたこと、そして特に、放棄してしまった資料室の整頓と清掃を郷土部の諸君が黙々と続けてくれている姿を見たことが私の胸を強くうつたのである。気を取り直し、整備を再開した。今日、郷土資料の散逸を免れたのは、学校当局・諸先生方の尽力もさることながら歴代の

郷土部諸君の無償の奉仕の賜物だと感謝し考えている。資料移管から7年、部員減少から郷土部は休部し資料室の清掃をする者もなく、格子はあってもガラスは破れたままで、時折、一人で掃除をしていたものの、埃が積るままの資料を見ると尽力され転出されていった先生方やかつての郷土部諸君を考えれば、胸の痛む想いであった。昭和50年、私は退職することになった。気にかかるのは資料である。社会科の船津隆造先生の勧めもあり、今宮新校長とも相談し、九州歴史資料館の渡辺正氣先生に子持勾玉・青磁碗・石剣や古文書など重要物品だけでもと保存管理をお願いした。快諾され館員の方々が引き取りに見えた。他は盗まれる心配はないであろうと判断し、後事を託すべき人もなく、複雑な想いのまま宗像を旅立ったのである。」

昭和43年の校長着任拒否闘争は、教員の疲労となり、文化財の保存にも影響を与えた。

特記されるのは、宗像高校教諭であった占部玄海・中尾徹先生によって、旧家庭科教室資料を再度整理がなされた。整理は、**脛形目録**と資料を確認し、1点ずつ写真撮影がなされ、写真図版を中心に目録が作られた。昭和59年(1984)発行の「宗像高校視聴覚ホール・郷土資料目録」がそれで、収蔵資料の全てが明らかとなった。作業は、郷土歴史研究会の協力を受けて、考古資料を中尾徹、古文書等を占部玄海が担当された。なお、収蔵資料の重要性を公開するため目録を刊行し、費用は占部玄海の自費出版によってなされた。

元号（西暦）	調査内容	顧問（先生）
昭和38年 (1963)	宗像町相原古墳群の調査・岡垣町高倉古墳群の調査参加、文化祭は「相原古墳群」の展示	山田清・松永雅生
昭和39年		山田清・松永雅生
昭和40年 (1965)	宗像郷土館資料を宗像高校へ移動、8月、東郷遺跡群（日の里団地内の分布調査を実施）	山田清・松永雅生・正木喜三郎
昭和41年 (1966)	東郷登り立遺跡4月～6月、7月～昭和42年2月に東郷遺跡群（日の里団地 スペットウ古墳調査参加）、8月頃か、玄海町神湊上野古墳に調査参加	山田清は10月明善高校へ転勤、正木喜三郎・篠崎泰真
昭和42年		正木喜三郎・篠崎泰真
昭和43年	4月～7月、校長着任拒否闘争となる。	正木喜三郎・篠崎泰真
昭和44年	(宗像町大井石棺の調査)	正木喜三郎
昭和45年 (1970)	5月、宗像高校創立50周年 岡崎敬先生の「沖ノ島遺跡について」講演、文化祭は「宗像の仏教」	正木喜三郎
昭和46年 (1971)	5月 玄海町浜宮貝塚の調査参加、文化祭は「宗像の万葉の道」	正木喜三郎・赤松
昭和47年	部員の減少で休部	正木喜三郎
昭和48年		正木喜三郎（管理）
昭和49年		正木喜三郎（管理）
昭和50年	4月、正木先生が東海大学へ転勤。	
昭和51年		
昭和52年		
昭和56年	4月に郷土研究部の復活	占部玄海
昭和57年	宗像郷土館資料の整理開始（歴史研究同好会）	占部玄海・中尾徹
昭和58年	宗像郷土館資料の整理	占部玄海・中尾徹

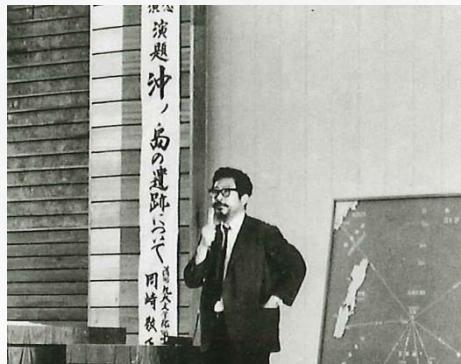
昭和 59 年	『宗像高校視聴覚ホール郷土資料図版・目録』の刊行	占部玄海・中尾 徹
平成元年	四塚会館の竣工 宗像高校創立70周年	藤 清治
宗像高校活動アルバム・『宗像高校視聴覚ホール郷土資料図版・目録』昭和 59 年より作成		



クラブ記録写真集



昭和 46 年



岡崎敬（九州大学）の講演 昭和 45 年



正木喜三郎先生とクラブ員

桑田和明は、正木先生について、「当時、先生は服装など気にせず、教員としても異質な感じで、学者風の方であった。高校時代は歴史部には女子が多く入らなかったが、文化祭の借用で甲冑を先生と借りに行ったこと、神湊浜宮貝塚の調査に参加したことを覚えている」、また先生との関係が深くなったのは大学時代、地元の宗像に戻り先生の退官後、『津屋崎町史』・『宗像市史』の執筆を依頼されている。

宗像の中世史は正木と桑田の師弟の研究で、画期的に進んだ。桑田は『中世筑前国宗像氏と宗像社』を 2004 年に発刊する。また、正木喜三郎執筆の『古代・中世 宗像の歴史と伝承』2005 年の刊行を病床の正木に代わり、実質的な編集・刊行を行なっている。

写真と解説

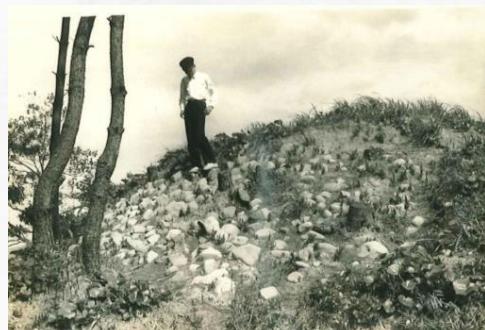
① 古墳時代 神湊上野古墳（宗像市神湊）



神湊上野古墳



神湊上野古墳



(上) 神湊上野古墳の覆石

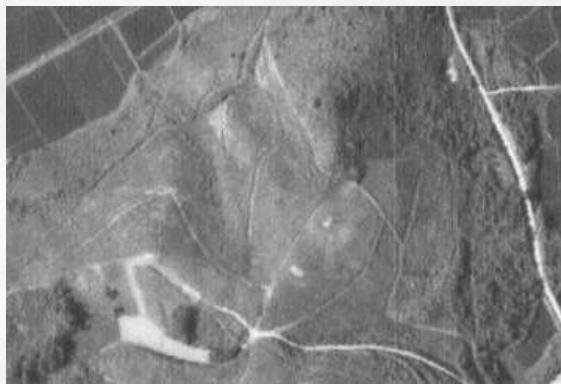
(右) 神湊上野古墳の石室



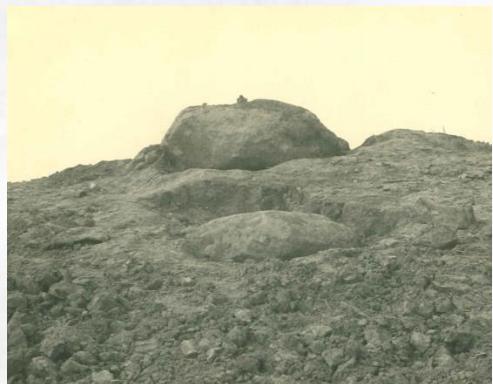
玄海町誌・宗像沖ノ島に前方後円墳の記事がある。横穴式石室を内部主体とする。後円部が前方部より高い。『アエラ』の武末純一の当時の想い出に、5世紀末の古墳とされる。調査担当者は、森貞次郎・渡辺正氣とされる。短甲が出土する。

昭和46年の鎌田隆徳の見学メモに葺石と昭和41年8月ごろの調査とされる。今回の写真で、横穴式石室で墳丘に葺石を配置することが判明した。

② 古墳時代 相原古墳（宗像市相原）



相原古墳群 昭和41年



相原3号墳の天井石

古墳群は、宗像平野の右岸、釣川の支流である横山川流域にあたり、谷奥を見下す丘陵上に位置している。丘陵は平野部との比高30mあり、平坦で緩やかである。周辺には、須恵墨巡・稻元日焼原・須賀浦の窯址群や稻元、久戸古墳群、須恵ケヒノ浦古墳が分布している。視下の小平野は盆地状を呈し、古墳時代の集落である池浦高田遺跡が広がっている。相原古墳群は、昭和35年頃に福岡県教育委員会の分布地図に5~6基が登録されている。その頃は、雑木の茂る丘陵で、5号墳の天井石や古墳の墳丘が比較的良好に保存されていた。古墳の所在する丘陵は、牧草地の開発によって、大きく3回にわたって削平が行われた。

宗像高校の分布調査は、昭和38年に前方後円墳を含む7基の古墳が発見される。1号墳の側面の写真と3号・5号墳の石室石材が撮影される。一部、掘削される。相原の前方後円墳は、昭和41年までは完存していた。

③ 古墳時代 東郷登り立遺跡（宗像市日の里）

東郷高塚古墳に近接する遺跡で、春成秀爾（九州大学助手）を担当者として発掘調査が実施された。調査の結果、石蓋土坑・竪穴住居などが検出された。宗像高校に隣接しているので、参加したクラブ生徒のスナップが残される。

- ・日本住宅公団1967年『東郷遺跡群』福岡県史跡調査会



東郷登り立遺跡の住居



東郷登り立遺跡の石蓋土坑

④ 古墳時代 スベットウ古墳（宗像市日の里）

スベットウ古墳は、東郷田熊の小丘陵北端に位置する前方後円墳で、全長35～40mと考えられる。主体部は、竪穴系横口式石室で、玄室は長さ3.6m×幅2m、高さ3.8mのやや胴張りの長方形プランを呈する。玄門部には框があり、墓通が上方へ上っている。出土遺物は、挂甲・鉄鎌・刀子・帶金具・金銅製品・ガラス製小玉719個・ガラスの切子玉・須恵器片が出土している。造墓時期は石室の形態より、6世紀前半に比定される。

日の里団地の造成後に消滅した。中学生時代の筆者の大井の友人が当時、採集したガラス小玉を10点ほど持っていた。調査参加写真は、事前調査の写真、発掘参加時の写真があり、報告書掲載以外のスナップがあり重要である。

- ・日本住宅公団 1967年『東郷遺跡群』福岡県史跡調査会



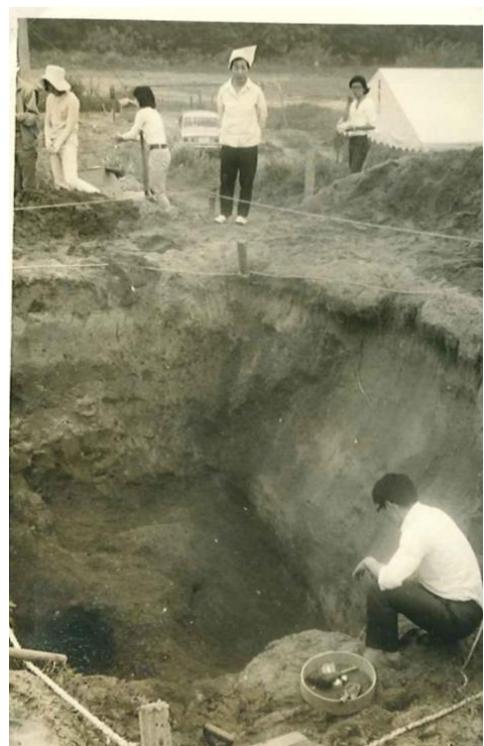
東郷・スベットウ古墳の石室(玄門)



東郷・スベットウ古墳の石室(天井)

⑤ 古墳時代 神湊浜宮貝塚（宗像市神湊）

神湊の丘陵は、赤土の上に砂層が厚く堆積しており、砂層面に遺構群が検出される。神湊集落の東側の砂丘上に位置する貝塚で、確実な範囲でも東西 80m × 南北 160m の範囲に貝の分布が確認でき、さらに両側に 50m の広がりが知られる。海拔 10m の宗像神社浜宮を中心に、北に伸びる緩い砂丘に立地し、もつとも低い 4 m の位置まで貝層がみられる。玄界灘沿岸で最大の古墳時代貝塚である。最初に田中幸夫により、「神湊貝塚」として紹介され、石井 忠によって貝層・土器・骨格器が採集され、遺跡の見直しが始まった。昭和 46 年 5 月に筑紫野史学会によって、北端の部分が調査される。現地表面から、0.5m までは、二次堆積であるが、海拔 4.2m の基盤層の上に、混貝土層が確認された。混貝土層には須恵器が検出されており、6 世紀中～7 世紀前半に比定される。自然遺物は魚骨（サメ・マダイ類・フグ・クロダイ・スズキ・カツオ・エイ）・貝類（ザエ・アワビ）は岩礁性のものが多く、潜水漁法の存在が予想される。これらに伴って鉄製ヤス・釣針・刀子・骨鏃・鹿角製品・土錘が出土している。当時としては、画期的な問題意識を持った調査であった。



神湊浜宮貝塚

⑥ 古墳時代 大井三倉古墳 石棺（宗像市大井）

スナップ写真が 3 枚あり、箱式石棺と内部の石敷きが確認できる。別の写真に蓋石が写っており、『宗像市史』に掲載の大井三倉の石棺と特徴が一致する。市史は、撮影時期不詳とされる。私は、昭和 38～44 年の間に調査されたと推察する。水糸が見えるため、実測がなされている可能性がある。当時おられた臨時職員の前川威洋先生（後に福岡県教育委員会文化課）あたりが、図化されたのではないか。再度、確認が必要。



大井（三倉）石棺

⑦ 古墳時代 宮地嶽古墳（福津市宮司）

金銅製冠を含めて昭和 27 年と 36 年に新国宝に指定された。破損が著しいため昭和 41 年～43 年の 3 年間

で文化庁の補助を受け保存修理がなされた。昭和48年より、東京国立博物館に勧告出品として、常設展示される。写真は、馬具の保存修理前であり、昭和41年以前に宮地嶽神社で撮影されたものである。また、鐘崎海女の資料がある。



宮地嶽古墳出土品(修理前)



鐘崎海女 はちこなわ



鐘崎海女 いそべこ



鐘崎海女（昭和30～40年代）



鐘崎海女 いそじゅばん

参考文献

- ・占部玄海・中尾徹『宗像高校視聴覚ホール 郷土資料目録』宗像高校 1984年
- ・正木喜三郎「宗像郷土館資料の再生」『ふるさとの自然と歴史』110号 1985年

- ・福岡県立宗像高校『創立 70 周年記念』1989 年
- ・宗像考古刊行会『宗像高校郷土研究部資料 遺跡写真』2011 年 CD 版
- ・宗像考古刊行会『田中幸夫先生と宗像郷土館—そして田熊石畠遺跡の保存—』2010 年 CD 版
- ・宮地嶽神社『国宝 宮地嶽古墳出土品修理報告書』1968 年

(2) 東海大学付属第五高校歴史クラブの活動

2016 年 4 月より東海大学付属福岡高等学校と校名が変更される。ここでは旧校名（以下、東海第五高校と略す）を使用する。

昭和 45 年に高校陸上部で筆者と鎌田隆徳と出会い、共に考古学に興味があり、意気投合した。玄海町・津屋崎町には鎌田、宗像町は筆者が興味を持っていた遺跡の踏査からこのクラブの歴史が始まる。高校時代のクラブノート手元にあり、これに沿って記述する。

顧問は、山隈惟美・秋元勇夫・高岡清・松岡哲先生で社会科担当であった。

昭和 45 年（1970） 高校 1 年生は、4 月 9 日・10 日、東海第五高校の曲丘陵の踏査から始めた。曲丘陵は、谷部に黒耀石・須恵器、丘陵頂部の平坦面に弥生時代前期の土器類を採集した。後に曲香畠遺跡と呼ばれ、発掘調査が実施される。

高宮祭場の周辺は、当時段々畑となっており、滑石製品・須恵器が散布していた。踏査の際に、水溜の畦に土師器（複合口縁の壺・甕）などが露出しており採集した。

9 月 20 日には、山隈・秋元両先生の指導を受け、須恵窯跡群の新池・古池の踏査を行い、灰原などを発見した。そして谷沿いの崖面の須恵器散布状況から、新池・古池周辺の分布図を作成した。10 月 8 日には、鎌田と考古学研究会を二人で立ち上げ、陸上部の合間や土曜・日曜日に遺跡の見学、分布調査を行った。11 月 7 日・10 日には、須恵・曲遺跡の踏査を再び行なった。12 月には、鎌田の村である桜京古墳周辺の牟田尻の踏査を安部・末続・鎌田・筆者が実施した。大島の踏査もこの頃である。12 月 16 日は、三郎丸古墳群の丘陵が伐採されたので、分布調査で 6 基の古墳を発見したが、開発業者に調査することをお願いしたが、殆どが破壊されたため、現状の記録を取った。

昭和 46 年（1971） 3 月に、三郎丸古墳群の残存する古墳を福岡教育大学の波多野先生が発掘調査を実施された。この時に、筒井亀などの教育大学の先輩らと出会うことになる。

研究会は、高校の必須クラブ活動で、歴史研究部となり部員も増えた。高校 2 年生は、4 月に城ヶ谷の丘陵で 10 基の古墳群を発見し、教育大学の先輩に連絡した。後の昭和 49 年に筆者が発掘調査と整

理に参加することになる。5月の連休には、神湊浜宮貝塚の調査が筑紫野史学会主催であり、宗像高校郷土部と共に参加した。5月には、牟田尻古墳群に尾根上に多くの古墳が群集しているので、再び分布調査を行なった。さらに、津屋崎町の新原・奴山の前方後円墳と円墳の分布調査を行なった。7月には、宮地嶽古墳の見学の帰りに、境内の切り通しで環頭太刀の柄頭を採集し、宮司に届けたが、以後、この資料は、神社で行方不明となる。玄海町田野丘陵で、土器を採集したのもこの頃である。8月には、田熊示現神社境内の裏で弥生前期の貯蔵穴が崖面に露出しており、土器を採集した。当時、『福岡県の歴史』に青銅器の地名表があり、田熊中尾(忠靈塔)で銅剣が出土しており、注意していた場所である。9月には、福岡教育大学の稻元墨巡窓跡の調査を見学に行った。続く10月に福岡教育大学の相原古墳の石室調査が行なわれた。10月23日の学園祭にクラブの展示に伴い牟田尻の桜京古墳が、秋元・高岡・鎌田・筆者が装飾古墳であることを確認した。11月12日には、宗像神社遷宮大祭があり、出光佐三翁に出会った。

11月の学園祭では、鎌田が中心となり、桜京古墳石室の実大模型を作成した。12月には、新原百塔の配置図、拓本・実測調査を行った。

昭和47年（1972） 昭和47年2月には牟田尻古墳群の第1回目の分布調査を実施し、60基の古墳を確認した。2月には、奥野正男先生の主催する筑紫古代史研究会が、宮地嶽神社で開催されたので参加し、奥野先生に出会った。3月には、池浦の削平された古墳より、ガラス丸玉を採集した。同じく、津屋崎団地東側の古墳削平地より、鉄器類を採集した。併せて山麓部の古墳の分布調査を行なった。高校3年生の4月23日には、福岡教育大学歴史研究部考古班と東海第五高校のクラブ合同の『巡検』を行った。私たちの古墳・遺跡の情報を共有することができた。澤田康夫とは、この頃からの知り合いとなる。4月13日～16日に相原古墳群の造成があり、削平された古墳の記録を取った。5月には、大井丘陵上の2箇所で弥生土器を採集し、黒耀石なども採集した。さらに、南側の崖面で大量の弥生土器を採集した。この遺跡は、後に大井三倉遺跡と呼ばれる。この頃に田熊石畠遺跡南の崖面で弥生土器を採集した。また、廃屋となった宗像郷土館の写真撮影を行なった。5月には、博多で『奴国展』を見学した。関心は、遠賀郡にひろがり、水巻町立屋敷遺跡、遠賀町城ノ越貝塚、鬼津横穴、鞍手町鎧塚古墳・古月横穴、中間市羅漢公園の見学に行った。6月には、正木喜三郎先生の案内で、格子窓の部屋に納められた郷土館資料を見学し感銘を覚えた。6月25日に相原・田野の分布調査を実施し、記録を報告した。8月には、福間町の津丸古墳群を福岡教育大学の発掘調査に参加した。9月10日は、牟田尻古墳群の第2回目の分布調査を実施、合計92基からなる大型群集墳であることを確認した。10月は、学園祭に伴い須多田ニタ塚古墳の石室の計測を行なった。同時期に福岡教育大学による高向古墳（会所坂）・瀬戸2号墳の発掘が行なわれた。田野瀬戸2号墳は、私たちが工事中に発見し、福岡教育大学に通報したもので、波多野先生が緊急調査を実施された。10月28日には、相原前方後円墳の墳丘が牧場の拡張で削平された。11月の学園祭に『古墳宗像』を鎌田の編集で作成した。この時に正木喜三郎先生も見学に来られた。この時期に陵厳寺の高樹山の山頂に登った。12月には、須多田天降神社古墳にて須

恵器・埴輪を採集した。また、宗像郡遺跡分布調査の一環で、玄海町の分布調査に参加した。この時に、松本 肇・桑野主事・立部住職と出会い、私達の高校時代の古墳・遺跡分布図を玄海町に提供した。

昭和 48 年（1973） 昭和 48 年は、1 月に宗像郡遺跡分布調査の一環で津屋崎町の遺跡調査に参加した。津屋崎郷土史会は、調査を委託されており、自主活動の成果を盛り込まれた。私達も高校時代の古墳分布図を会に提供した。前年より研究会に参加していたので、田中が声を掛けてくれた。この時に、田中香苗・北野清美の所属する津屋崎郷土史会の皆さんにお世話になった。2 月には、許斐山城の踏査を行い、保存状況が良いことを知った。ただし、一部に電波塔が設置されていた。3 月 2 日～4 月は、宗像郡遺跡分布調査の一環で宗像町の調査が実施された。宗像町の牧田・尾山・瀧口、教育大学考古班の澤田・高崎・與田・赤星と実施した。宗像町の赤間地区は、福岡教育大学の歴史研究部が自主活動で、分布調査をされたものを提供された。なお、私達も高校時代の古墳・遺跡分布図を宗像町に提供した。分布調査報告書は、昭和 50 年 2 月に刊行された。

なお、東海第五高校旧蔵資料は、下記に報告した。

- ・花田勝広『宗像考古 1 号』 宗像考古刊行会 1976 年
- ・花田勝広『宗像考古 2 号』 宗像考古刊行会 1992 年
- ・花田勝広『宗像考古 6 号』 宗像考古刊行会 CD 版 1992 年
- ・花田勝広『宗像考古 7 号』 宗像考古刊行会 CD 版 2008 年
- ・宗像考古刊行会『東海大学第五高校歴史クラブ考古班の活動記録』 CD 版 2015 年

高校時代は、宗像町三郎丸古墳群(6 基)、相原古墳群(13 基)、福間町井手ノ上古墳群(4 基)や、津丸・久末古墳群(12 基)、玄海町田野瀬戸 1 号墳などの多くの古墳が目の前で、未調査でなくなった。常に無力感を感じたので、余りいい思い出はない。また、大学時代も、津屋崎町宮地団地山麓の古墳群も登録されたはずなのに、調査されず住宅地となっていた。

クラブ顧問の山隈惟美・秋元勇夫先生は、生徒の調査に同行してもらったり、調査の方法や記録の取り方を教わった、よき恩師であった。先生方の導きには、今でも感謝しており、筆者や鎌田の歴史好きが「宗像のために役立てる」のは先生の教えによるものである。よく誤解されるが、筆者が直接宗像に関わるのは、高校・大学時代の 5 年間である。



山隈・秋元先生と歴史クラブ（昭和 48 年）



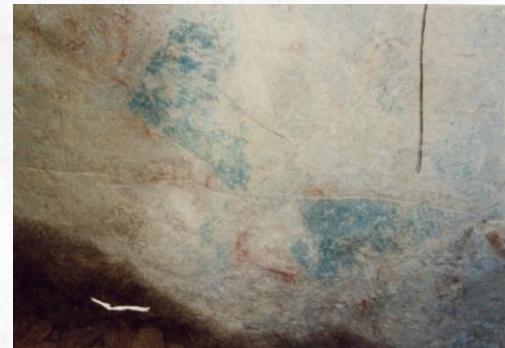
玄海町田野・池田分布調査（昭和 47 年）



相原古墳（前方後円墳 昭和 46 年）



正木先生（文化祭見学）



桜京古墳の連続三角文



田野瀬戸 2 号墳（前方後円墳 昭和 47 年）



桜京古墳（装飾）発見当時



三郎丸 9号墳（昭和46年）



田野上林 2号墳（前方後円墳）



旧宗像郷土館資料（昭和47年）

高校時代以後について

筆者は、昭和49年（1973）に城ヶ谷古墳群の調査に参加、昭和51年に津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査に参加する。

平成4年（1992）から、鎌田と宗像郷土館考古資料の整理を行う。平成20年には、田熊石畠遺跡の保存を求める会の発起人に2人が参加することになる。

以下はその成果である。

- ・花田勝広「宗像郷土館の研究1」『古文化談叢』30号 九州古文化研究会 1994年
- ・花田勝広「宗像郷土館の研究2」『文化財学論集』 奈良大学 1994年
- ・花田勝広「宗像郷土館の研究3」『滋賀考古』15号 滋賀考古学研究会 1994年
- ・宗像考古刊行会『田中幸夫先生と宗像郷土館—そして田熊石畠遺跡の保存—』 2010年 CD版
- ・花田勝広『宗像の歴史と文化遺産の研究』CD版 2013年



相原古墳（前方後円墳） 昭和 46 年



相原古墳 昭和 46 年



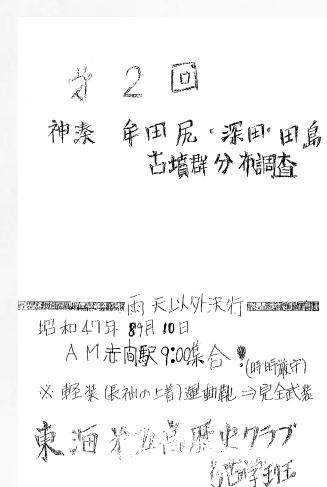
桜京古墳発見当時（昭和 46 年 10 月 23 日）



旧宗像郷土館資料の整理



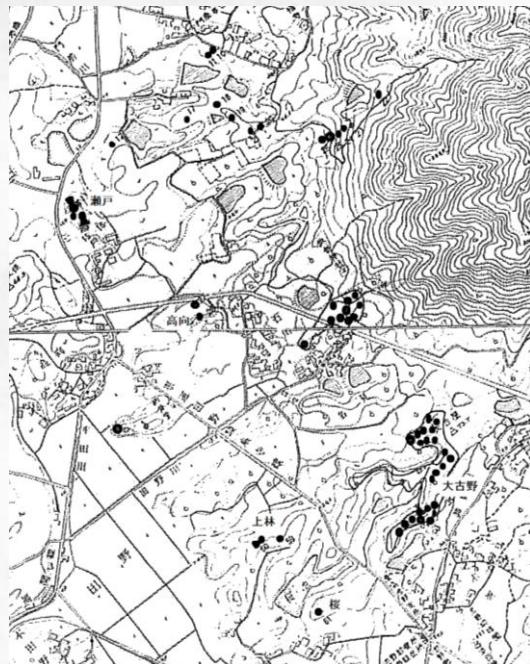
津丸・久末古墳群の調査 昭和 47 年 8 月



牟田尻古墳群分布調査



玄海町牟田尻古墳群（92基を発見）



玄海町田野地区・古墳分布図



宗像町遺跡分布調査報告より（須恵・河東）



宗像町遺跡分布調査報告より（三郎丸）

歴史クラブ考古班の調査

学年	西暦	元号	月	クラブの活動内容	資料	福岡教育大学の調査
小学 5年	1966	昭和41年		牟田尻で古墳発見(鎌田) 相原古墳の見学(花田)		教育大学の移転に伴い波多野院三先生が転居 宗像町東郷遺跡群の調査 7月～12月
6年	1967	昭和42年	6月～9月	牟田尻で紡錘車・須恵器出土(鎌田)		
中学 3年				宗像郷土館の見学(花田) 東郷高塚で弥生土器採集(花田)	○	
高校 1年	1970	昭和45年	4月9日・10日	曲香烟遺跡の発見	○	
			7月	相原古墳群踏査		
			9月20日	須恵・須恵器採集		
			10月8日	考古学研究会結成(鎌田・花田)		
			10月			
			11月7・10日	須恵窯跡分布調査		
			11月14日	曲香烟遺跡の分布調査		
			12月	牟田尻、数回調査(鎌田・安部・花田・末続)		
			12月	大島調査		
			12月16日	三郎丸古墳群発見と記録	○	
高校 2年	1971	昭和46年	3月	下高宮で土器採集		三郎丸古墳群の調査(福岡教育大学)
			3月			
			4月	牟田尻古墳群見学(山隈・秋元・鎌田・花田)		
			4月	宗像町城ヶ谷古墳群の発見		
			5月	浜宮貝塚調査参加		
			5月	牟田尻古墳群分布調査 新原・奴山・須多田古墳群分布調査		
			7月	宮地嶽2号墳の大刀発見	○	
			7月	田野で土器採集		
			8月	田熊中尾遺跡で貯蔵穴発見		
			9月			
高校 3年	1972	昭和47年	10月			
			10月23日	桜京装飾古墳の発見(秋元・高岡・鎌田・花田)、 石室の計測		
			11月・学園祭	桜京古墳の模型	●	
			12月	多礼で石器採集	○	
			12月15日	奴山百塔圓面		
			2月	牟田尻古墳群分布調査(1) 60基確認		
			2月	筑紫古代史研究会(宮地嶽神社)参加		
			3月	池浦古墳よりガラス玉採集		
			3月	津屋崎・宮司分布調査・鉄器採集		
			4月21～23日	相原(13～16号墳)記録・消滅		
1973	昭和48年		4月25日	巡査(教育大・歴史クラブ)	●	
			5月	大井三倉遺跡で土器採集	○	
			5月	田熊石畑遺跡で土器採集		
			5月3日	奴園屋の見学		
			5月5日	立屋敷・城ノ越遺跡見学		
			6月	宗像郷土館資料の見学(鎌田・花田)		
			6月25日	相原・田野・鈴山分布調査		
			8月	津丸古墳群調査参加		
			9月10日	牟田尻分布調査(2回) 92基を確認 (1班・北側、2班・南限確認)	●	
			10月	須多田二夕塚古墳実測	○	
大学 1年	1974	昭和49年	10月	玄海町高向古墳の調査(福岡教育大学)		
			10月	玄海町瀬戸古墳の不時発見		
			10月28日	相原前方後円墳の墳丘消滅		
			10月22日	須多田天降神社古墳で埴輪・須恵器の採集		
			11月	学園祭(正木喜三郎先生が来る)		
			12月	新原・奴山・須多田古墳群分布調査		
			12月	玄海町分布調査に参加(花田・鎌田)		
			1月	津屋崎町分布調査に参加、津屋崎郷土史会が実施(花田・鎌田)		
			2月16日	許斐山城調査		
			2月18日	遠賀町鬼津横穴		
2年		昭和50年	3月2日～4月2日	宗像町分布調査に参加(花田・鎌田)		
			日			
			3月	大井三倉遺跡で石包丁採集、久戸で土器採集	○	
3年	1976	昭和51年	3月	宗像町城ヶ谷古墳群の整理		宗像町城ヶ谷古墳群の調査 3月～10月
			8月	宗像郷土館考古資料の実測(花田)		津丸・久末古墳群報告書の刊行
			10月			瀬戸古墳の調査(福岡教育大学)
			12月	津屋崎町勝浦峯ノ烟古墳の見学(花田)		宗像町城ヶ谷古墳群の整理
4年	1977	昭和52年	3月	むなかた考古1の発刊(花田)		波多野退官論集『筑紫史論Ⅲ』
			8月	宗像郷土館考古資料の実測(鎌田)		
			8月	津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査参加(花田)		
			12月	奈良大考古学研究会の古墳見学		津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査参加
4年	1978	昭和53年	8月			
			12月			城ヶ谷古墳群報告書の刊行
1992 平成4年 8月～ 宗像郷土館考古資料の実測開始(花田・鎌田)						
2008 ～ 2009	平成20年 ～21年			田熊石畑遺跡の保存を求める会の発起人に参加 (鎌田・花田)		

7. まとめ

(1) 40年後の宗像の古墳

高校を卒業して44年が経ち、今書いていることは、既に昔話になり歴史の一部となる。気付いたことを纏めておきたい。宗像市の遺跡数は、2011年の分布調査の成果が明らかにされており、古墳総数2,236基となる。40年前に比べるとの3.5倍になっている。古代の胸形君が予想以上に大きな勢力と考えられることになった。

特に、古墳の調査数が、非常に多いことである。古墳が多い事は、当時の埋葬される被葬者が多いことを示す。筆者は友人達と平成19年（2007）に横穴式研究会を関西で実施したが、その際に近畿地方の横穴式石室を集成した。ネットの【横穴式石室集成】を検索参照。

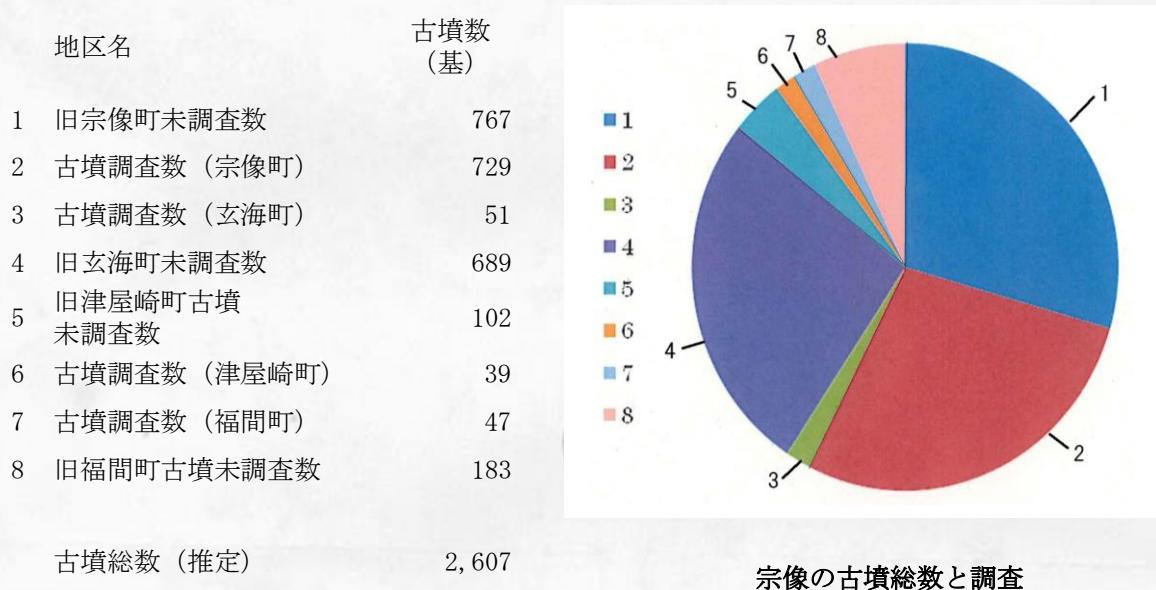
この時の発掘されている古墳数を調べたが、大阪府で673基、奈良県で583基、滋賀県でも477基であった。未報告があるので、各100基を加えても、旧宗像郡古墳調査数866基は、これら超える調査数である。福岡県行橋市の竹並横穴群は単独で1,000基を超えることは有名であったが、宗像もこんなに多いとは思わなかった。数値は、宗像市にご教示頂いた総数2,236基、調査数780基に福津市の10年前の数値を加えて独自に作成してので、概数は福津市分が増加する可能性がある。池ノ上宏の集計によると、総数は2,830基とする。

この表を基にすると、旧宗像町の半分の古墳は既に存在しない。旧福間町の20%は、存在しない。これらは、JR沿いであり、交通の便が良く、宅地造成に伴う調査である。旧玄海町は、玄海ゴルフ場建設に伴うものが多い。旧津屋崎町は、宮地団地の未調査分を含めるともう少し増加すると思われる。旧宗像郡の古墳総数の3分の1前後はもう消滅している。この数値は、直視すべきである。全国的に群集墳の多い福岡県の開発が高度成長に伴い過激に進んだことが分かる。

宗像以外の福岡県の地域も同様な現象である。しかし、全国的にみると、関西の方が多くの古墳が残っていることになる。10年前に調べた時も調査数が、約550基であったので気にはなっていたが、非常に大変に驚いた。

前方後円墳は、確実なのが44基あり、旧玄海町9基、旧津屋崎町17基、旧福間町3基、旧宗像町15基が知られる。旧宗像町の半分弱は、調査・消滅する。旧福間町・旧玄海町が各1基となる。旧津屋崎町は半壊3基を含めると、ほぼ17基が完存する。津屋崎の古墳群は町文化財担当者の池ノ上宏の尽力により、国指定史跡となり、今後も保存される。

	前方後円墳数			備 考 (全壙の古墳)
	現存	半壙	全壙	
旧玄海町	8	0	1	田野瀬戸 2号墳
旧宗像町	8	1	6	須恵クヒノ浦古墳・城ヶ谷3号墳・スペットウ古墳・田久瓜ヶ坂1号墳・徳重高田16号墳、徳重本村2号墳
旧津屋崎町	14	3	0	
旧福間町	2	0	1	手光大人4号墳
合計	32	4	8	総合計 44基



筆者が田熊石畠遺跡の保存を求める会の発起人に参加したのも、少なくとも田熊を残さなければ、今後未来はないと感じたからである。沖ノ島や宗像大社だけが、宗像の遺跡ではない。世界遺産の認定後は、多くの遺跡が保存されることを「宗像大神」に祈るだけである。

(2) 40年後の後悔

赤間宿の御茶屋 黒田藩の宿に設けられた別館で、『筑前国続風土記』に元禄年間に19箇所あった。藩主別邸として利用され、唐津街道を利用する大名や幕府役人の宿泊所として利用される。ネットの「唐津街道歴史研究所」で位置が検討されている。幕末に岩倉具視などが五卿落ちの一行が、赤間宿の御茶屋に慶応元年（1865）1月18日～2月11日に滞在した所である。

「赤間塾」の中村哲一郎塾長ら3人は、小郡市の九州歴史資料館収蔵庫で発見された福岡藩御用大工の本陣の間取り、仕様を記録した古文書をもとに御茶屋の復元図を作成している。下記のものは、提供されたものである。天保5（1834）年に黒田藩御用大工、林家文書（九州歴史資料館蔵）の指図がある。

明治時代の版籍奉還、廃藩置県後に御茶屋は、どうなったのかよく分からぬ。

赤間尋常小学校は、明治18年8月に太政大臣の岩倉具視が、教育令改正で設置されたもので、「当初は赤間本町の米屋を改造したものであったと。まもなく、正式なものが御茶屋の跡に造られた」と出光佐三は記す。さらに、「私どもの尋常小学校は赤間にあったが、明治28年に尋常小学校を卒業して高等小学校に通うようになった。・・・高等小学校の二年の時に、赤間に仮校舎ができた。勧善舎という芝居小屋を一時的に改修したものである。そこで私は林繁蔵君と机をならべて勉強したらしい」とある。

前者は、黒田藩の赤間宿にあった御茶屋の後の建物であったのだろう。後者は位置が分からぬ。位置は、赤間村に隣接するが、陵厳寺村字寺田となる。

明治24年に陵嚴寺に校舎を新築し、赤間尋常小学校と改称する。出光の記事と合う。おそらく、御茶屋の後の建物が利用された可能性がある。

明治42年に字茶屋辻に位置し、赤間尋常高等小学校と改称する。昭和16年に赤間国民学校と改称、昭和22年に新学制で赤間小学校となる。

昭和3年の『宗像郡史蹟名勝写真帖』に「お茶屋跡」の記事がある。

「当時の茶屋跡は、赤間小学校の校庭東、小丘上、現在畠となっている。その玄関の扉が今、赤間有吉常松氏宅に保存されているときく、町内の有志の中に此地に記念碑を建立して遺跡を世にあらわさんと計画中である」

と記事の内容が分かる。

占部玄海の知見は、「茶屋の思い出」占部玄海『郷土歴史叢書』第1冊より引用。

「子供のころ城山中学の運動場は小高い森であった。こんもり茂った雑木の中にとんがり屋根の洋館と純日本風の二階建ての豪邸があった。森の入口には子供三人でやっと抱きかかえるような杉の丸木が三本無造作に並んでいてそれが、茶屋の入口である。その門の一つ一つに管笠が宜しく大きな、それは大きなすり鉢がかぶせてあったのを思い出す。門は厚く戸板で閉ざされ、その奥に誰が住んでいるかも知らなかった。「茶屋の辻」この小字とも茶屋も森も消えてしまった。」

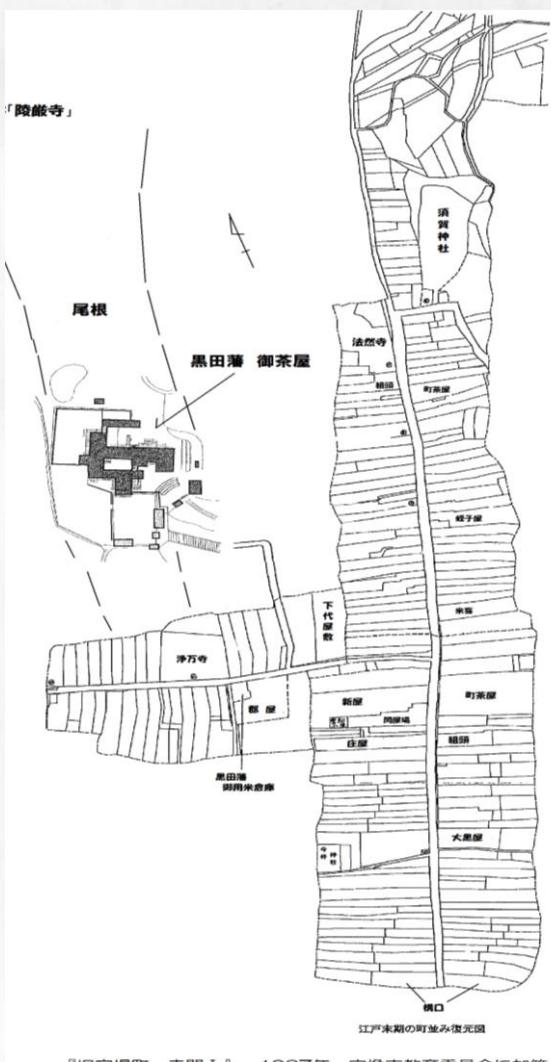
子供ごろとあり、昭和9年（1934）年生まれからすると、昭和23年までの事と思われる。航空写真に建物が写る。とんがり屋根の洋館と純日本風の二階建ての豪邸は、個人の住宅で写真にぼんやり写る。御玄関の前の広場は、畠となる。他に、数棟の建物が確認できる。

昭和22年4月22日に赤間・吉武村学校組合東部学校として開校する。昭和26年9月1日に現在の位置に新築の木造建物校舎が建設される。とんがり屋根の洋館と純日本風の二階建ての豪邸は、中学校に取り込まれ昭和49年ごろまで残る。

昭和23年1月19日に米軍の航空撮影が行なわれる。昭和36年9月2日に国土地理院が撮影する。昭和50年3月8日に国土地理院が、カラー写真を撮影する。城山中学校の鉄筋校舎新築造成中の写真で、遺跡が削られる。御茶屋跡は現在の城山中学校のグランドにあたるが、完全に消滅した。御茶屋を失ったことは、今後、赤間宿の文化再生に大きく影響を与えると思う。

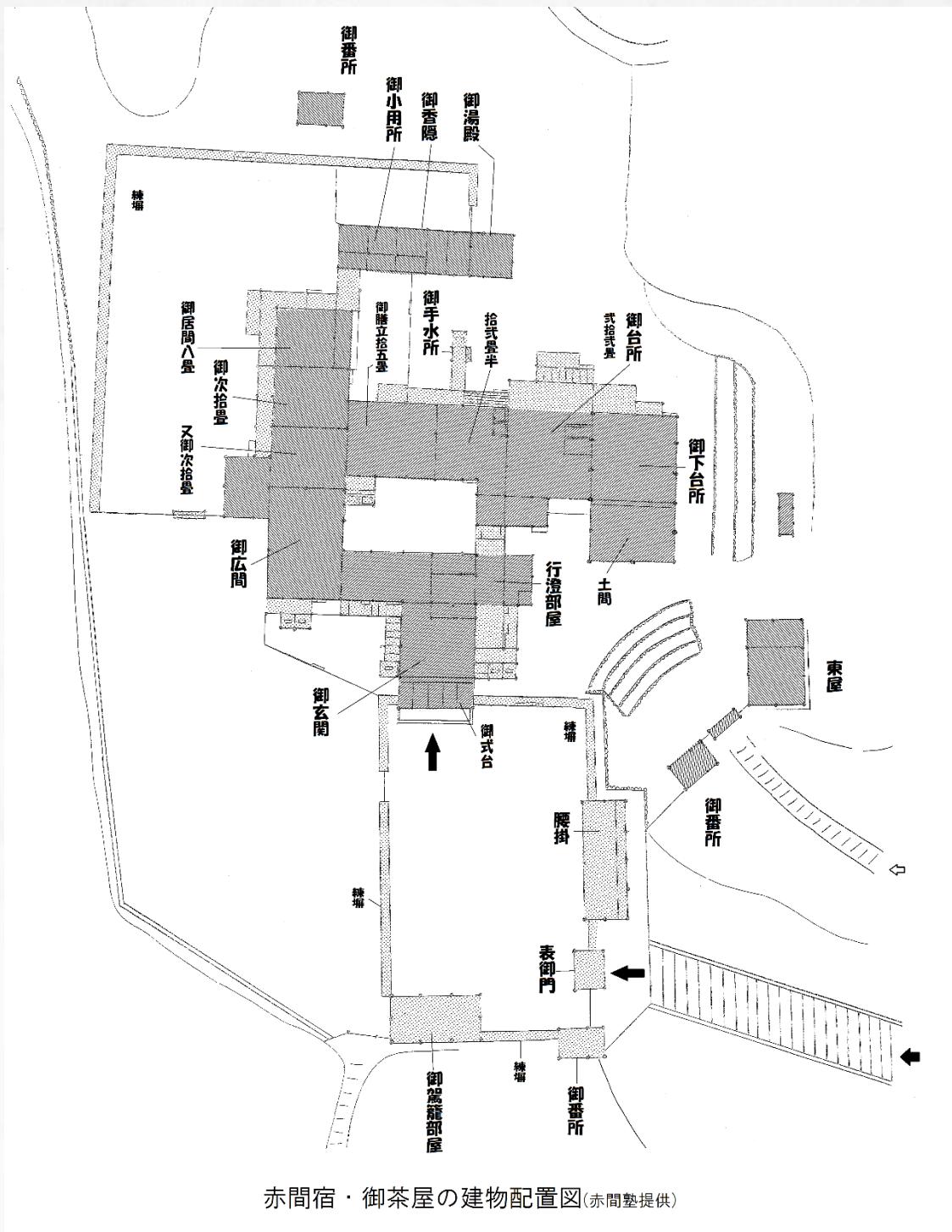


昭和23年1月 赤間撮影 (3Dに変更) 写真は拡大のため不明瞭だが、左の森に建物が確認できる。



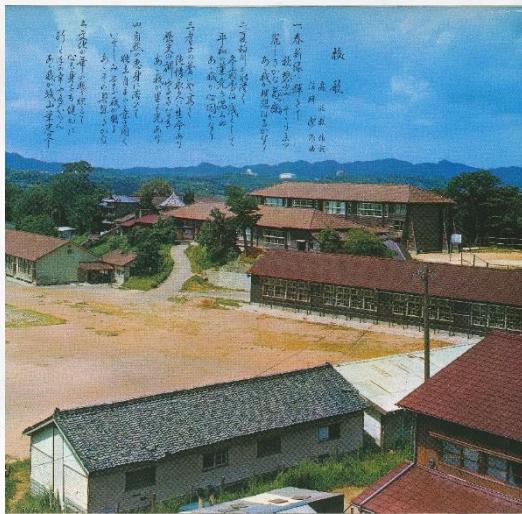
赤間宿と御茶屋の配置（江戸時代末期の宿）



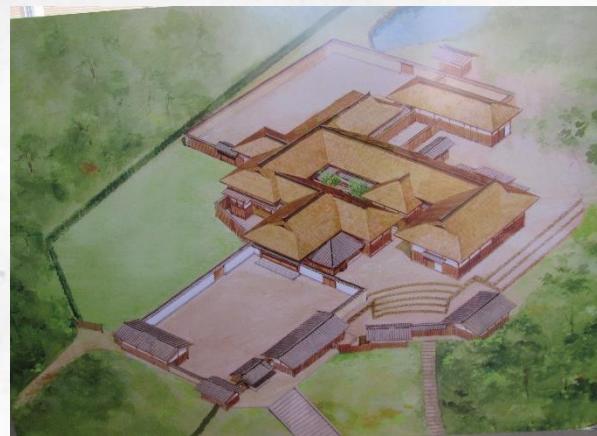


赤間宿・御茶屋の建物配置図(赤間塾提供)

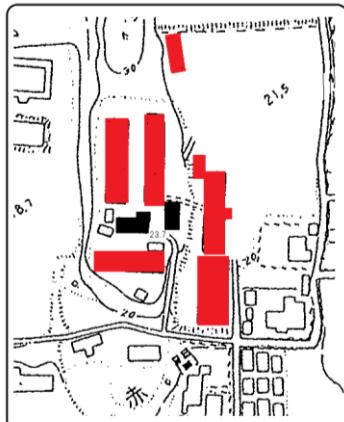
御茶屋は、丘陵上に位置し階段を上り、表御門を入り籠に掛ける建物と、家臣の控える腰掛がある。上級武士は、御玄関で挨拶を交わし、大広間で会見をする。大名や幕府役人は、御居間八畳の部屋が宿泊所となる。建物には、御台所・御手水所・御湯殿などの施設がある。岩倉具視などの公家も御居間八畳(上)・御次間拾畳(中)・御次間拾畳(下)の部屋に宿泊したのだろう。各所に番所があり、練塀で守られる。現存する門部材は、東屋と御番所の間の勝手口に当たる通用門と推察される。



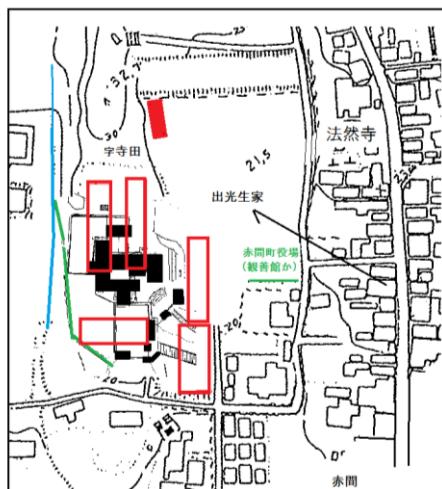
昭和45年の城山中学校卒業アルバム
(奥の二つ校舎の位置が、御茶屋の位置となる)



赤間宿・御茶屋の復元図（赤間塾提供）
天保5年（1834）の指図（施工図）より復元された建物群、その一部は、戦後まで残っていたようだ。



城山中学校校舎の配置
(昭和36年)



御茶屋と校舎の整合図

当時、昭和50年以前には、絵図（指図）の存在は知られていなかった。このころは、埋蔵文化財は、古代を中心に登録され、周知の遺跡となっていた。城郭は、登録されていたが、近世はよっぽどのものでないと対象にならなかった。ふと思う、旧宗像郷土館が廃館とならず、公的に機能していたならば多くの人々に知られ、昭和48年の分布調査の台帳に登録され、調査ができたと思う。校舎は建設されていたが木造であり、地下に遺構は残っていたと思う。筆者は、昭和50年3月には帰省、赤間の福岡教育大学で遺物整理に2週間ほど赤間に通っていた。帰りに城山中学校のフェンス越しに造成をボートと見ていた。昼も夜も前を通っていたのに、存在を知つていれば記録を取れたものを。残念でならない。

総括

1. 宗像の特性

第1題と第2題は、一見別々の内容に捉えがちだが、これらは歴史の一連の流れである。早川勇の後進育成が宗像会を生み、教育者が多く発生し教育郡と呼ばれ、会の雑誌を通じた交流が刺激となる。会で育った事業家・官界・学会関係者が、再び後進育成を行う宗像塾が東京に生まれ、戦前に宗像郷土館・郷土会館建設事業で結束した。宗像会本部が移転した宗像神社を核として継続される。戦争で中断した会は、戦後本格的に出光佐三の始めた宗像神社復興事業と共に集結があり、復刊宗像会・再興宗像会が再び結成され、出光の強烈な個性と実行力で、多くの事業の支援や直接執行が行われる。福岡教育大学の移転により、波多野先生と歴史研究部考古班がいち早く、埋蔵文化財の緊急調査にあたり、文化財調査・保存の啓発を行う。波多野・正木先生の活躍により宗像の文化財調査で、宗像高校や東海大学第五高校生徒の歴史クラブに影響を与える。また、復刊宗像会・再興宗像会の世代の郷土史系団体や個人は、城ヶ谷古墳群の保存啓発後、宗像の自然・歴史・文化財保存研究会の結成となる。一方、宗像神社の復興期成会の事業は、沖ノ島調査で成果を上げ、出土品が、神宝館の建設と公開となる。

全く関係ないように思われるが、元は一つであり、戦後に宗像神社系譜（宗像会）と福岡教育大学の系譜があり、これに昭和56年以降の行政が影響を与えた系譜の3つとなる。三つ目の行政系譜は、いずれ関係者に纏めて戴きたい。

雑誌『宗像』 この雑誌は、考古学の研究資料としては、ほとんど使い道がない。しかし、明治24年から大正時代を経て昭和40年代のこの地域の歴史を、民衆の立場から記録したものであり、宗像市町村史に記載と評価が欠落していた。宗像の人が歴史好き、宗像神社がなぜ復興できたか、郷土館に多くの淨財が集まったなど、多くのこの地域の伝統を読み取ることができる。おそらく、高度成長期までの地域像を知るうえで興味ある内容である。宗像の文化財・歴史好きの伝統の根幹にかかわる資料と思い、あえて集成を進めた。

『宗像』は、明治24年～昭和18年までの約50年間続いた雑誌である。戦後再興され、昭和30～43年まで発刊された。184冊の冊子は、宗像の人・文化の地域的気質・特性を窺う上で興味のある雑誌である。今後の文化財理解の啓発資料となると思う。

特に、戦前に伊東尾四郎が『宗像郡誌』と『福岡県史』を並行して無理してなぜ全三巻を編纂されたか。宗像は教育熱心な土地柄とは。宗像神社の信仰心が強い、宗像の心一つである一体感の理由。なぜ、世界遺産の基盤をつくった出光佐三があれほど、神社の復興に執着したのか。出光家の人々が宗像の地へ経済的・人的支援をいとまなかったのは何故か。宗像郷土館建設に寄附金があれほど集まった理由、戦後の再興宗像の雑誌が影響を与えた上妻国雄、吉武謹一、田中香苗、安川淨生、日並文夫、占

部玄海、安部郁朗、小方正人などの人々。私達から見たかつての年寄（第3世代）が自費出版までもして、なぜ郷土史研究に熱心だったのか。すぐに思いつく事例は、明治から発刊されたこの雑誌の気風が影響を与えたものである。この雑誌は、先人の活躍を記録したものであるが、多くのヒントがあるのだろう。もっと早い時期に、一般的の多くの方が知られれば、今と違う宗像地域の構築が可能であつたと思う。過去の人々の思想が、現代に継承されることは何か。当時、郡単位での組織で50年近く続いたものは少なく、九州でも個性の強い一種独特の世界であると。筆者も全体像を初めて知った。

2. 文化財の調査・啓発の歴史

雑誌『宗像』の集成を行い、その内容を読めるようにした。その中で、明治時代より50年以上も続いた宗像郡の同胞雑誌を読んでいる内に、この地域の独自性を知ることになった。雑誌『宗像』は、全国でも最も古く長く続いた地方雑誌である。筆者の関心に沿って、文化財理解・啓発を時系列でまとめてみた。

（1）明治24年～昭和19年 第一波

明治24年、東京に在住する宗像郡出身者の間で、宗像郷友会が結成、雑誌『郷友雑誌』が発行されたが、その後『宗像』と名を変え会誌を媒介として大阪・福岡・北九州・飯塚等の各市をはじめ、海外（アメリカ）でも結成されるようになり、会員数は1,200人を越えた。宗像会は雑誌から機関紙へ変貌した『宗像』を通じ、会員及び宗像大社との連携をはかるとともに、新知識の取得や切磋琢磨を目的としている。宗像会の変遷を概観すると、まず東京宗像会で発刊した会誌「宗像」は、在京の学生が輪番幹事になって編集にあたり、毎年4回発行して昭和10年に至る間に既に144号まで発行している。東京本部は、大正末年の関東大震災で被災したにも関わらず、昭和10年まで宗像塾の学生が編集・発刊した。昭和11年には、本部を宗像神社に移して敏腕編集長の宗像辰美・石田和吉により発刊がなされた。このころから時局の影響を受け、会誌はつい漸次遅延し、遂に自然休刊の止むなきに至った。

雑誌『宗像』に歴史関連記事を書いたのが、伊東尾四郎（福岡県立図書館初代館長）である。彼は、当初の発起人で、その件数は、27篇あり、彼が宗像の歴史啓発の嚆矢であり第一人者である。昭和5年ごろに『宗像郡誌』の執筆を任せられたのは、経験豊富と宗像会幹部であった為である。明治30年に『宗像郡誌』の必要性を説いたのが、伊東新であった。早くして逝去されたのは残念であった。昭和12年に江戸時代の百姓をまとめた脇野磐（八並村）は、自宅の古文書を纏め、優れた地域研究である。

昭和13年に宗像高等女学校内に建設された宗像郷土館は、当時女学校に奉職されていた田中幸夫の尽力と神郡宗像に誇りをもつ郡民により創設された。郡民の浄財の寄附は、全国の宗像会を通じて行われた。この間、田中幸夫の『宗像の旅』『脇形』、『宗像郷土読本』、田中政喜の『神郡宗像郷土史』が刊行される。当時、伊東が専門書の『宗像郡誌』、田中幸夫が郷土館建設と普及本のベストセラーと

なった『宗像の旅』を執筆した。沖ノ島の調査は、江藤正澄の「沖津島紀行」、柴田常恵の「沖島の御金蔵」、田中幸夫の「沖ノ島に詣で」、豊元国の遺物調査などがある。昭和6年に、桜田勝徳の鐘崎・大島の民俗調査はこの時期のものである。昭和17年、出光佐三を会長に宗像神社復興期成会が結成される。

(2) 昭和20年～昭和28年

宗像郷土館の廃館状態により、歴史啓発施設の消滅となる。この施設が存続しなかつたため、高度成長期の開発に文化財への理解が大幅に遅れ、多くの遺跡を失うことになる。このことは前述した。しかし、宗像神社復興期成会の事業が着実に進む。この間に、野間吉夫の鐘崎海女の民俗調査が特記される。

(3) 昭和29年～昭和54年

宗像神社復興期成会の事業が本格化し、高宮祭場の買収・整備、宝物館の完成が上げられる。宝物館の完成により、宗像の重要資料が保管・管理・展示される。小嶋鉢作による戦後に進められた『宗像神社史』の刊行があり、神社の学術的成果が纏められた。この時、神社の始原に沖ノ島調査が欠かせないので、神域の学術調査が行われ、ヤマト政権による国家的祭祀が明らかになった。その成果は、『沖ノ島』『続沖ノ島』『宗像沖ノ島』として刊行され、併せて『宗像大社昭和造営誌』も纏められた。これらの成果に基づいて、境内地内の買収、社殿の整備、重要文化財本殿・拝殿の保存修理が行われ、遷宮大祭でピークに達した。この頃、宗像・沖ノ島出土品は全国で「海の正倉院 沖ノ島展」で一般公開が実施された。出光佐三の諦めない復興への行動力が際立っている。復興期成会は、氏子・信者も多いが、戦前からの宗像会がその精神的な母体であったことを忘れてはならない。

戦後、昭和30年、中野正之によって、復刊記念号雑誌『宗像』が発行された。昭和38年には、宗像会の会則を基として、再興宗像会が発足した。その翌39年～昭和43年までに19号が発刊される。宗像の人・文化の地域的気質・特性を窺う上で、興味のある雑誌である。注目されるのは、戦後も元軍人の顕彰もあり、以外と思ったが、明治時代から出光万兵衛・伊豆凡夫らは、宗像塾の学生達の面倒や良き相談相手となっている。旧軍人より、「宗像」の同胞が重視された。

この雑誌に歴史関連記事が多く収録された。そのメンバーは、上妻国雄・松崎武俊・安部郁郎・田中嘉三などである。戦前に宗像会の雑誌編集を行ったこともある古野清人は、『農耕儀礼の研究—筑前宗像における調査—』を地域の記録として刊行された。普及本として、安川淨生の『宗像の歴史散歩』が刊行される。宗像で最も多く読まれる普及本である。昭和46年に津屋崎郷土史研究会が田中香苗によって結成される。また、松崎武俊・尾山清などの古文書を読む会が結成される。

この時期は、宗像市日の里団地造成に伴う218万m²の開発にかかる調査、自由ヶ丘団地の開発など住宅開発の徵候がみられる。昭和45年以降、福岡教育大学の波多野院三による開発に伴う事前調査が

行われる。同大学歴史研究部考古学班も発掘調査を実施する傍ら、宗像郡内の分布調査を精力的に行った。分布調査による基礎的作業が遺跡保存の前提という路線へ意向し、城ヶ谷古墳群以降、主たる発掘調査への組織的参加を行っていない。昭和50年以降は、稻元古墳群の調査に代表される大規模開発が本格化しはじめた段階で清田ヶ浦・相原・久戸古墳群等の調査が目白押しとなる。県道建設に伴って、勝浦峯ノ畠・井ノ浦・新原奴山1号墳等の前方後円墳が調査された。次第に宗像氏の奥津城の一角も明らかになった。この時期に、宗像神社境内（昭和46年）、装飾古墳である桜京古墳（昭和51年）に国指定史跡となる。

（4）昭和55年～平成15年 第二波

宗像神社復興期成会の一連の復興事業が終わり、神宝館の開館により、沖ノ島の国宝が身近に見学できるようになる。宗像地域の自然・歴史系団体が集結し、宗像の自然・歴史・文化財保存研究会が結成された。田村圓澄を会長に、吉武謹一・田中香苗・上田年見・松崎武俊・尾山 清などの、個性的な面々の活動が、会誌を通じて精力的に「ふるさと宗像」の学習が始まる。そして、博物館の設置を求められた。後半期には、むなかた歴史を学ぼう会（会長 平松秋子）が結成され、講座・学習会が続けられた。20周年誌によると、約370回の講座・見学会を実施された。小方正人が中心に宗像生活史研究会は、『宗像むかしの生活研究』を刊行され、土地の民俗伝承を詳細に纏められた。土地の伝承も含まれており、考古学の分野も活かせると考える。占部玄海は、宗像郷土資料を『郷土歴史資料叢書1～6』として纏め、郷土史の集大成を発刊する。宗像会系の最後の郷土史である。中村正夫の『宗像郡地誌総覧』は、『宗像市史』近世編の補足するために、自費で出版される。古野清人に続く学者の故郷を思う出版である。日並文夫による『鐘崎漁業誌』は、鐘崎の歴史を知る上で欠かせない。

宗像市の大規模開発が本格化するに伴って、文化財行政職員が配置される。その後の経過については、原俊一の「宗像の考古学」や『宗像市史』に詳しく纏められている。

文化財行政職員は、宗像市（1981年）・津屋崎町（1989年）・福間町（1990年）・玄海町に配置され、宗像市町の大規模開発に伴う埋蔵文化財調査や、農業基盤整備・圃場整備事業に伴う発掘調査が実施され、遺跡の現地見学会が数多く開催された。調査も、弥生集落・前方後円墳・群集墳・須恵器窯、奈良～鎌倉時代の集落・墓址と全時代を通じた遺構群と遺物が出土し、宗像の全体像が把握される段階である。その中で、「海人シンポジウム」の開催、『宗像の遺跡をたずねて』などが刊行され、海人文化を理解が深まった。『宗像市史』が刊行され、地域の通史が明らかとなる。注目すべきは、昭和62～63年の『旧宿場町赤間』の記録調査は当時の建物群が詳細にわかる。

（5）平成16年～平成27年 第三波

平成17年に多くの前方後円墳が含む津屋崎古墳群が国指定史跡指定となる。さらに、国指定史跡の宗像神社境内である沖ノ島遺跡を中心に津屋崎古墳群、桜京古墳、東郷高塚古墳に田熊石畠遺跡を

追加し、「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」として、世界遺産の暫定リストに登録される。福岡県・宗像市・福津市を中心に世界遺産登録のために、尽力がなされる。この中で、沖ノ島国宝展、田熊石畠遺跡の国史跡指定に伴う田熊石畠遺跡とムナカタ展などが開催される。むなかた電子博物館は、ネットを活用・情報を俊敏に伝える取り組みがなされ、紀要1~6号刊行される。宗像の情報を世界に伝える広報の窓口となる。

この時期の特徴としては、『津屋崎町史』・『福間町史』などの刊行で、宗像地域の市町村史が全てまとまり、資料編と共に、容易に一般の方々にも歴史の学習が容易になった事があげられる。

さらに、桑田和明の『中世筑前国宗像氏と宗像社』・正木喜三郎の『古代・中世 宗像の歴史と伝承』、河窪奈津子の尽力した『宗像大社文書』の出版などの専門書が刊行され、基礎研究も蓄積がなされる。平成23年実施の九州前方後円墳研究会の『宗像地域の古墳』は、原俊一を中心とした古墳資料の集成が行なわれ、宗像の実相が明らかになった。特記されるのは、国指定史跡田熊石畠遺跡の保存は、市民の手によるものであり、市民参加主導の歴史学習が進んだ結果とみられる。宗像市の講座等に見られる息の長い地味な講座が、その基盤にあることは間違いないだろう。

今後、むなかた歴史を学ぼう会・福津郷土史研究会は、地域歴史学習と啓発を進める役割を果たすのであろう。宗像の歴史観光ボランティアの会の結成は、身近な遺跡の理解が深まっている。福岡教育大学の公開講座は、歴史に関心のある人々へ、専門的学習を促し、変化の起爆剤となっている。平成24年度の「海の道 むなかた館」の開館は、宗像文化を通史的に知る施設と歴史の啓発拠点になっている。平成24年8月には、市民団体の「赤間塾」、中村哲一郎を中心に実行委員会による「大赤間展」では御茶屋・幕末の偉人らを紹介している。近年は、「街道の駅 赤馬館」の開館、岩熊寛を中心とした畦町宿の再生イベントが実施される。

書籍は、むなかた歴史を学ぼう会の平松秋子の『八所宮のおくんち』、安部照生の『福崎ものがたり』、吉村青春の『津屋崎学』、山口浩の『宗像あれこれ』、むなかた歴史を学ぼう会『創立20年記念誌』、吉武歴史観光ボランティアの会の『吉武物語』、平等寺伝承行事を伝える会『伝承行事を守り続ける平等寺』などの個人・団体系の出版がある。『福崎ものがたり』は、筆者の集落の歴史である。また、国指定田熊石畠遺跡の開園・イベント、宗像市主催の「邪馬台国とムナカタ国」の講演会などで、沖ノ島以外の文化財の理解が深まっている。田熊石畠遺跡は、田中幸夫先生が宗像を去り、76年を経て復活し、宗像の歴史の基盤となり、新たな歴史の再出発となっている。

宗像でのかつてない第三波は、世界遺産の推進と共に、地域の文化財、文化遺産の認識と地域再生へ続くのだろう。明治24年の『郷友』『宗像』から流れる文化財への関心は、断絶はあったが変容しながらも、風土と共に地域的気質として受け継がれている。なお、宗像の世界遺産は、ホームページを参照されたい。

「宗像はなぜ歴史好きが再生産されるか。」

明治の歴史研究・啓発は、伊東尾四郎の第1・2世代（宗像会）、第3世代（復刊・再興宗像会）、筆者の属する第4世代となる。元祖は、早川勇の人徳による雑誌『宗像』の出現が、宗像の歴史好きを発生させ、会誌を通じて地域ナショナリズムによる出版物が現れ、伊東尾四郎・田中幸夫の1・2世代の影響が次ぎの3世代に引き継がれる。下記の表で最も多いのが、宗像会系譜の個人著作・団体ものである。ここが宗像の地域史の特徴である。行政刊行物を敢えて除いたのは、この地域の自力を知るためである。興味深い特徴は、「宗像のために」と自費刊行されたものが多く、第3世代が後進のための宗像会の精神が続いている事が分かる。特に、教員関係者の出版が多い。つまり、10年間単位でみても、普及本により、歴史知識の再生産が行われる。これに、出光兄弟による復興された宗像大社・鎮国寺の保存された景観、行政の文化財調査・啓発活動・イベントが加わるためであろう。

	宗像会系（在地系）	研究系	団体系
明治・大正年間	石田和吉『むなかた』、野口美造『宗像の歴史』・『宗像遺徳集』、『貞婦はん・孝女こや』・『孝子正助伝』、『宗像郡郷土史』		
昭和元年～昭和10年	幡掛正木『沖津宮』		宗像郡教育会『宗像郡史跡名勝写真帖』
昭和11～20年	田中幸夫『宗像の旅』・『胘形』、田中政喜『神郡宗像郷土読本』、福原軍造『宗像郷土史』	伊東尾四郎『宗像郡誌・上・中・下』	
昭和21～30年	田中嘉三『増福寺始末記』、佐々木滋寛『純孝武丸正助』	伊東尾四郎『福岡県史料叢書』	
昭和31～40年	出光佐三『人間尊重50年』、瀧口雪雄『武丸正助さん』	小嶋鉄作『宗像神社史』	
昭和41～50年	上妻国雄『郷土の民話』・『宗像人物風土記』・『続宗像人物風土記』・『続々宗像人物風土記』・『宗像路散歩』・『宗像伝説風土記』、安川淨生『大島郷土誌』、田中嘉三『孔太寺神社考』、檜垣元吉『早川勇伝』、安部正弘『東郷公園と私』	波多野院三『筑紫史論3輯』、古野清人『筑前宗像の農耕儀礼』、木村俊隆『宗像郡本木村定札制』、瀧口凡夫『創造と可能の挑戦』	宗像大社『許斐山物語』・『宗像史話伝説』
昭和51～63年	上妻国雄『宗像風物誌』・『福間の又べえ』、田中香苗『津屋崎風土記』、松崎武俊『部落解放史発掘一追悼集』、安川淨生『筑前の流人』・『宗像歴史散歩』・『安部宗任』・『宗像の歴史』、占部玄海『宗像高校郷土資料目録図版』、『郷土歴史資料叢書1～3』、井上隆三郎『筑前宗像の定札』、立部瑞祐『心の旅路』	石井忠『漂着物の博物誌』、原田大六『阿弥陀仏教の謎』	正助翁遺徳顕彰会『筑前宗像郡孝子武丸正助伝拾遺』、宗像大社『むなかたさま』・『宗像20年の歩み』、壱岐貞実ほか『宗像高校60年誌』※『福岡県地誌全誌二』
平成元年～10年	上田年見『ふるさと文化財探訪記』・『福間のあのころ』、日並文夫『鐘崎漁業誌』、吉武謹一『玄海町史話伝説』、占部玄海『郷土歴史資料叢書4～5』、高山勉『たった1460日されど1460日』、木村俊隆『宗像の塩浜』、日並文夫『玄海町の民俗資料集』	中村正夫『宗像郡地誌総覧』、石井忠『海辺の民俗学』、楠本正『玄界の漁撈民俗』、秀村選三・西村政子・平嶋浩子・瀬戸美津子『筑前国宗像郡吉田家家事日記帳』、宗像大社文書編纂刊行委員会『宗像大社文書』	宗像を知る会『宗像ふるさと紀行』、宗像の自然歴史文化保存研究会『新抄宗像記・同追考』・宗像生活史聞き書き研究会『宗像むかしの生活研究』、日並文夫ほか『鐘崎漁業誌』
平成11～20年	吉村青春『津屋崎センゲン』	正木喜三郎『古代中世宗像の歴史と伝承』、	福津郷土史会『福津の絵馬』、許斐山愛好会『風と森』

	この時期は、市町村史に宗像会系が携わる。	桑田和明『筑前宗像氏と宗像社』、宗像大社文書編纂刊行委員会『宗像大社文書』	との物語』、むなかた歴史を学ぼう会『創立20年記念誌』
平成21～27年	平松秋子『八所宮のおくんち』、安部照生『福崎ものがたり』、吉村青春『津屋崎学』、山口浩『宗像あれこれ』・『ふるさと三郎丸のすがた』		吉武歴史観光ボランティア『吉武物語』、平等寺伝承行事を伝える会『伝承行事を守り続ける平等寺』、福津郷土史会『吉原文書追加目録』、津屋崎祇園山笠会『津屋崎祇園山笠300年記念誌』
主な単行本著作者（個人・団体）を集め、行政刊行物・沖ノ島関連を除く。 ※参考 太字は、宗像会会員・系が関与する。知見するもののみ。			

3. 結語

一見、自然以外に何も恵まれていない宗像地域は、江戸時代以降の宗像の特産物は、ご承知のとおり、「教員・鶏の玉子」が多いのがこの郡の名物であった。明治時代に宗像会の結成により人材育成、「大きくなれ」を合言葉に人材が育つ。宗像会は、宗像と東京を直接繋ぎ、明治の気風を強く持った雑誌『宗像』を通じて、郷友の交友と新知識の取得や切磋琢磨を目的としている団体であった。その広がりは、国内を超えてアメリカ宗像会まで結成される。全国的に見ても、50年以上続く地方雑誌は珍しく、九州の中でも同胞意識の強い特殊な地域であった。戦後も高度成長期まで引き継がれた。

滝口凡夫は、かつての宗像郡は「自作農が圧倒的に多く、地主一小作農の関係は小規模、沿岸漁業は、鐘崎、勝浦、津屋崎を基地として行われている。人情は純朴であり、敬神崇祖の念が強い。婚姻関係も郡内にとどまり、宗像神社の氏子としての一体感、相互扶養の気風も強い」とされる。そして、郡民の共通の性格、特徴を、「自作農的な土くささ、頑固一徹さ、それでいて温かい人間味といったものを感じられないだろうか」と評している。

しかし、近年はこの地を選んで住んだ新興住宅の人々は、宗像への関心が強く、積極性・行動力があるが、宗像会崩壊後の在地系の人々は、保守性が強いと見ることもでき、滝口の評した面影は薄らいだ。これは、全国的に地域の特徴として、同じ傾向である。昭和55年を境に人口も在地系と新興系の人口比は、1対2で既に逆転し、新しい気風が入っており、今後が楽しみである。現在の人口は、15万5千人（宗像市・福津市）となる。

子供のころは、宗像神社の放生会（秋季大祭）に参るのが、1年のうち最高の楽しみであった。宗像以外の人々は不思議と思われるかも知れないが、結婚式を宗像大社で挙げる人々が今も多い。氏神が身近に感じられる土地柄である。それでも、戦前は「裏伊勢」と自称し、戦後は「田島さま」、復興後は「むなかたさま」となり、時代の要請と共に変容する。したがって、時代の権力の関与により神社祭祀も左右され、昔のままでない。

ところで、出光佐三が、宗像神社復興に人的・金銭的支援を実施したのに、“境内に自分の記念碑的なものをのこすな”が気になっていたが、これは、宗像神社復興期成会の母体が宗像会であり、戦後も出光兄弟は「宗像人・宗像会の一員」とする意識が強いと思う。

早川勇の人徳から、宗像会が生まれ、有能な人材を輩出し、出光も一員と思う意識が強く、自らの事業理念とも合致し、宗像神社の復興で「一生の念願」とする発言となったと思う。

遺言に、自分の銅像・顕彰碑・施設などを建設するなど伝え聞くが、宗像会の一員意識によるものと考える。

宗像への支援は、宗像神社の復興・福岡教育大学誘致・宗像高校50周年事業と体育馆への直接的な寄附が、判明するだけでも当時の6億円以上である。現在の価値の2~3倍となろうか。惜しみない多額の寄附金は、福岡教育大学の学生奨学金制度、教官への研究助成以外に、城山中学校の旧体育馆、旧赤間小学校の図書館、宗像神社宝物館・神宝館、四塚会館建設、鎮国寺の復興、福津市の東郷神社など施設、さらに、出光佐三が自ら買い集め、神社に寄附奉納した中世の「宗像神社文書」なども多数あり、正確な寄附額はわからない。

目的は、宗像神社の復興と教育施設の充実・人材育成の為と考えられる。

佐三の逝去後も、宗像大社平成御造営奉賛者の銅版には、出光興産並び関係会社、同販売店有志で7億円ほど寄附金がある。まだ、航海安全の神、宗像大社への支援は続く。

出光の企業理念とされるものは、宗像の風土と教育、宗像会の交流によったものが、基層部分のような気がする。出光は、これらを独自に特化させ、戦後に宗像地域を引っ張っていく。よく、宗像の子といわれる由縁である。

さらに佐三は、晩年に事業の芸術化を目指し、出光の事業はかくあるべきとした。

「真の藝術と眞の事業とは、その美、その創作、その努力において相一致し、その尊厳と強さにおいて相譲らざるものである。美の創作に対して努力するわれわれが、事業の藝術化を信じ、これを主張するようになったのも当然の結果である。出光の事業は誰が見ても美しからねばならぬ。醜惡なる、単なる金儲けであってはならぬ」

出光の事業は、「誰が見ても美しからねばならぬ」は、今後、宗像が世界遺産登録により、彼の事業が芸術化され「永遠の日本」・「日本人にかれれ」の出光佐三翁の名言ともに「事業の美」として継承されるのだろう。今後も、出光興産の故郷の地として宗像が意識され、宗像大社が航海安全の神として、祭祀と支援が続くのだろう。

筆者は、宗像での彼の事業は、宗像神社の復興が「国家のために尽くす」の核であり、武丸正助翁顕彰が、親孝行・恩が「日本人の持つ互讓互助の精神、恩を知る」などの宗像の農耕社会に由来するものである。合せて、宗像郡にあった健康保険制度のモデルである江戸時代から続く「定札」（じょうれい）の相互互助精神が加味されると思う。福岡教育大学の誘致は、明治時代からの宗像会の教育を核とした人材育成の基盤を、宗像の地に持ってきたと考える。彼は、人間尊重の理念を宗像で体現されたとみる。

最近、「海賊とよばれた男」と再び脚光を浴びるが、筆者は、弟の計助社長が『二つの人生』に「周りから“一匹オオカミ”というようなことをいわれるので、その語源を外人に調べてもらったら、ローン・ウルフ（一匹オオカミ）とは[集団の力を借りることなく独立独歩、荒野を進んで恐れないような事業家のこと]だそうで、一般に云われるような悪い意味でないことがわかった」と書かれる。こちら方が、的をえているような気がする。

今日の宗像大社の復興は、出光佐三の熱意と尽力である。そして、学園都市の流れは、戦前にその要素があり、現在の教育・文化の振興の特質を規定していると見る。

明治時代以降の 150 年を振り返ると、歴史は常に前代に要因があり、次の時代に変容しながら踏襲される。そして、社会の大きな変革があっても、人の基層意識は変わるものでない。宗像会を詳しく知ることが、今後の展望を知る上で重要と思う。

一方、平成 15 年（2003）に、出光真子『ホワット・ア・うーまんめいど ある映像作家の自伝』の中で娘の真子は、佐三について「徹底した儒教的、家父長的男女観を抱いており、妻及び四人の娘を「女子ども」として軽蔑しその自立を否定し人格的に抑圧した」と語っている。また、彼女は、「宗像から夜汽車で持ってきたのだろう」と厳しい批判が痛烈に書かれる。これは、江戸時代以来の宗像の家父長的男女観を引き継ぐ明治精神を機軸とし、民主化しなかったためであろう。お父さん譲りのストレートな内容である。

出光の人生理念は、明治時代の宗像の価値観を伝えるものであり、出光真子の記事や天皇に対する考え方には批判される部分もあると思うが、人には一長、一短があるのだろう。

最後に回想を書きながら一文が気になった。『人間尊重 50 年』収録の「私の人生観」である。若者に話した言葉である。

「人生というものは老後にあるのだ。君らが六十ぐらいなって過去を顧みて、過去六十年間だったというだけで、一瞬にすぎない。その間に贅沢をしたとか、いいことをとか、反対に苦しんだとかいうことはたいした問題じゃない。ひと思いで消えてしまう。ところが、老後の一時間、一日というものは実に長い。その長い 1 日、1 ヶ月、1 年というものを不愉快な思いをして暮らすか、ああいいこと

をしたと思って暮らすか、これが人生の幸、不幸のきまるところだ。それだから過去は短い、将来は長い、それならば過去にいいことをして将来を楽しめ」

とある。70歳の時に書かれたものである。出光興産株式会社の『我が60年間』第1~4巻は、宗像の近代・現代史を知る上で貴重な資料であるが、佐三翁の人生訓を知る上でも興味は尽きない。

本稿は、近現代史を取り扱うために、本人自著、本人に近い方々の書き物を多く引用させていただき、実態が正確になるようにした。書き残された方々に謝意を表する。なお、内容が一面的な捉え方があるかもしれないため、関係者に失礼があつたら、御容謝戴きたい。敬称は、偉大な先輩たちであり、失礼とは思ったものの略させて戴いた。

昭和30年生まれの筆者は、宗像神社の復興と変化を身近に接することができ、遷宮大祭で厳かに式典に出席する佐三翁を見たことがある。伝説のように語られた彼が、なぜここまで宗像に尽力するのかが、いつも不思議であった。本稿は、余り触れられることのなかった宗像の行動（事業）とその影響を明らかにする事に努めた。

地元の方々に、佐三翁の「宗像の心」が知られ、良い部分を受け継がれることを願望する。今後も出光関連資料を収集して行きたい。

謝辞

作成にあたり、滝口凡夫、出光弘、石田正實、出光昭介、柴田節郎・占部玄海・堤宏の各氏の文章を引用させていただいた。出光興産株式会社には、佐三翁の写真掲載の快諾を戴いた。さらに、井上正文氏には、宗像市商工会、公益法人 宗像青年会議所に『出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985年を写真・引用に御配意を戴き、神山義信氏に貴重な写真の提供を頂いた。また、宗像高校四塚会館には、四塚会館収蔵資料を再録させて戴いた。

なお、澤田康夫、桑田和明、鎌田隆徳、山中紀美子の各氏には40年前の忘れ行く記憶を思い出してもらい、平松秋子、中村哲一郎、岩熊寛、尾山清、原俊一、白木英敏、山田広幸、稻田雄一、川畑和弘、伊藤美智留の各氏、赤間塾の方々には、資料提供に御協力を戴いた。記して感謝を申し上げる。最後に、本稿をむなかた電子博物館紀要委員会（平井正則委員長）に掲載の快諾を賜り、編集実務の宮川幹平氏には、長文の編集・校正で忍耐強く、御尽力を戴いた。心より深謝を申し上げる。

また、引用原文について、現在では不適切な表現・語句も含まれるが、歴史資料としてそのままとした。なお、市町村名は、当時のものである。ちなみに旧宗像郡は、現在の宗像市（旧宗像町・旧玄海町・旧大島村）、福津市（旧福間町・旧津屋崎町）の2市からなる。

（宗像市福崎生まれ、日本考古学协会会员）

出典・参考文献

出光佐三と宗像関連記事の出典一覧

元号	西暦	記事内容	出典
明治 39	1906	・編集部「会員消息」入会	『宗像』64号 宗像会
明治 42	1909	・編集部「会員消息」脱会	『宗像』72号 宗像会
大正 6	1917	・編集部「会員消息」再入会	『宗像』110号 宗像会
大正 13	1924	・編集部「会員消息」	『宗像』138号 宗像会
昭和 14	1939	・編集部「郷土特輯」	『宗像』158号 宗像会
昭和 15	1940	・編集部「出光商会の飛躍」	『宗像』159号 宗像会
昭和 18	1943	・竹間保史「宗像神社に仕へ奉りて」	『宗像』163号 宗像会
		・高橋 昇「宗像神社復興計画の趣旨と経過を述べて神郡郷友一般の憤起を望む」	『宗像』163号 宗像会
		・宗像志江「宗像神社復興期成会の設立」	『宗像』163号 宗像会
昭和 26	1951	・出光佐三「美しい旅」	『我が60年間』第1巻
昭和 29	1954	・出光佐三「天災と九州」	『人間尊重五十年』 春秋社
		・出光佐三「水を呑み冷暖自ら知る」	『宗像 復刊記念号』宗像会
昭和 30	1955	・出光佐三「宗像族の雄心を」	『復興 宗像』2号 宗像会
昭和 31	1956	・出光佐三「アメリカを視察して」	『我が60年間』第2巻
昭和 35	1960	・出光佐三「心の世界」	『宗像神社史』宗像神社復興期成会
昭和 36	1961	・出光佐三「序」	『人間尊重五十年』春秋社
		・小島鉢作「後記」	『我が60年間』第2巻に収録
昭和 37	1962	・出光佐三「宗像神社」	『我が60年間』第2巻
		・出光佐三「夢」	『再興 宗像』1号 宗像会
		・出光佐三「古稀を迎えて」	『再興 宗像』2号 宗像会
		・出光佐三「仙厓和尚」	孝聖武丸正助翁顕彰会
		・出光佐三「虎から兎へ」	『武丸正助翁顕彰会』
昭和 38	1963	・出光佐三「宗像会に寄す」	『出光オイルダイジェスト』11号
昭和 39	1964	・出光佐三「年頭所感」	『再興 宗像』8号 宗像会
		・出光佐三「武丸正助さんの話」	『再興 宗像』14号 宗像会
昭和 41	1966	・出光佐三「瓦となるな」	『我が60年間』第3巻
		・出光佐三「宗像人の使命」	『再興 宗像』1号 宗像会
		・石田正美「出光丸」	『再興 宗像』2号 宗像会
		・出光佐三「不思議な宿命」	『再興 宗像』3号 宗像会
		・出光佐三「人間尊重の50年の完成は20代社員の責任」	『我が60年間』第3巻
		・出光佐三「こんな大きな船は日本人だけが造れる」	『我が60年間』第3巻
昭和 42	1967	・出光佐三「仲よくする力」	『我が60年間』第3巻
		・編集部「早川勇の顕彰碑」	『再興 宗像』第3巻 宗像会
		・出光佐三「若い人への遺産相続」—出光丸の竣工-	『我が60年間』第3巻
昭和 45	1970	・出光佐三「ひとすじの人生」	『我が60年間』第3巻
昭和 48	1973	・滝口凡夫「風土とおいたち」	『創造と可能の挑戦 出光佐三の事業理念』西日本新聞社
昭和 50	1975	・出光佐三「御神徳の尊さ」	『我が60年間』第4巻
昭和 51	1976	・出光佐三「序」	『宗像大社昭和造営史』
昭和 53	1978	・編集部「出光佐三氏 宗像町初の名誉町民に迎えられる」	社報『宗像』宗像大社

昭和 54	1979	・石田正美「宗像の伝統と歴史に誇りと自覚を」	『宗像高校 60 年誌』宗像高校
昭和 60	1985	・出光佐三「日本人の世界的使命」	『出光佐三翁生誕百周年記念誌』収録
		・滝口凡夫「出光佐三さんと私」	『出光佐三翁生誕百周年記念誌』 宗像市商工会青年部
昭和 61	1986	・出光計助「オオカミのあととのネズミ」	『二つの人生』講談社
		・出光計助「店主の思い出」	
昭和 62	1987	・出光昭介「眞の日本人を育てる鑑に」	『孝子武丸正助拾遺』
		・占部玄海「金山の章」	『郷土歴史叢書-人物往来-』第 3 冊
平成 6	1994	・高山 勉「出光社長と私」	『たった 1460 日されど 1460 日』
		・高山 勉「人間出光佐三翁像」	
平成 11	1999	・川口洋一「刑務所と学芸大」	『宗像市史 通史編第 3 卷 近現代』
平成 22	2010	・川嶋照亮「出光佐三翁の深い心」	『宗像高校同窓会会誌』平成 22 年
平成 24	2012	・滝口凡夫「あるべき人間の姿を求めて」	『出光佐三 魂の言葉』

参考文献

- ・ 出光佐三「私の人生観」は「水を呑み冷暖自ら知る」に収録『人間尊重 50 年』
- ・ 高山勉『たった 1460 日されど 1460 日』1994 年
- ・ 高倉秀二『評伝 出光佐三』プレジデント社 1990 年
- ・ 竹原元凱「沖ノ島祭祀遺跡」『日本の遺跡発掘物語』7 社会思想社 1984 年 田中幸夫と宗像の関係がまとめられている。氏によると、出光佐三に宗像の歴史の理解に大きく影響を与えたとする。
- ・ 占部玄海『郷土歴史叢書-早川勇とその群像-』第 1 冊 1985 年
- ・ 占部玄海『郷土歴史叢書-人物往来-』第 3 冊 1987 年 出光佐三翁以外の宗像会員の人物について、詳しく調べられおり、詳細はこれらを参照して頂きたい。なお、柴田節郎の回想録「宗像塾の思い出」の初出は、『宗像高校 60 年誌』宗像高校 1979 年に全文が記載され、関係資料が収録される。また、釜瀬新平「宗像中学校開校式にのぞみて」も参照されたし。
- ・ 宗像市商工会青年部『日本人 出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年
- ・ 壱岐貞実ほか『宗像高校 60 年誌』宗像高校 1979 年、『宗像高校 70 年誌』宗像高校 1989 年
- ・ 福岡教育大学歴史研究部考古班『津丸・久末古墳群』1974 年
- ・ 福岡教育大学歴史研究部考古班『城ヶ谷古墳群』1977 年
- ・ 宗像市教育委員会『城ヶ谷古墳群 II』宗像市文化財調査報告書第 8 集 1985 年
- ・ 宗像市教育委員会『旧宿場町赤間 I ~ III』1986~1989 年
- ・ 宗像神社復興期成会『宗像大社昭和造営誌』1976 年
- ・ 吉武歴史観光ボランティアの会『吉武物語』2010 年
- ・ 安部照生「鎮国寺」『神郡宗像 8 号』2015 年 宗像大社ホームページより。
- ・ 立部瑞祐『心の旅路』鎮国寺 1982 年 法藏館

出光佐三の著作、出光興産株式会社

- ・ 『四十年間を顧る』 1951 年
- ・ 『わが四十五年間』 1956 年
- ・ 「前垂掛けから始めて」『現代教養全集 8-わが生涯-』筑摩書房 1959 年
- ・ 『人間尊重五十年』 春秋社 1962 年
- ・ 『人間尊重の事業経営』春秋社 1962 年
- ・ 『「人の世界」と「物の世界」-四十の質問に答える-』出光興産社長室 1963 年
- ・ 『マルクスが日本に生れていたら』春秋社 1966 年 (1972 年改訂)
- ・ 『働く人の資本主義』春秋社 1969 年
- ・ 『日本人にかえれ』ダイヤモンド社 1971 年
(のちに『出光佐三の日本人にかえれ』あさ出版 2013 年)
- ・ 『出光の言葉』出光興産 1974 年

- ・『永遠の日本-二千六百年と三百年- 出光佐三対談集』 平凡社 1975 年
- ・『道徳とモラルは完全に違ふ』 出光興産 1983 年
- ・「出光佐三」『私の履歴書-昭和の経営者群像-5』1992 年 日本経済新聞社
- ・「生き仏との出会い」『鈴木大拙-没後 40 年-』河出書房新社 2006 年
- ・出光興産株式会社『出光五十年史』1970 年
- ・出光興産株式会社『ペルシャ湾上の日章丸—出光とイラン石油』1978 年
- ・出光興産株式会社『アバダンに行け—「出光とイラン石油」外史』1980 年
- ・出光興産株式会社『我が六十年間（第 1 卷）創業より～昭和 34 年 1985 年
- ・出光興産株式会社『我が六十年間（第 2 卷）昭和 35 年～40 年』1985 年
- ・出光興産株式会社『我が六十年間（第 3 卷）昭和 41 年～46 年』1985 年

出光興産株式会社『我が六十年間（追補）昭和 47 年～56 年』 1981 年

- ・出光興産株式会社『月刊出光-店主追悼号-』1981 年

★近親者の執筆

- ★ 出光計助『二つの人生』講談社 1986 年
- ★ 滝口凡夫『創造と可能の挑戦 出光佐三の事業理念』西日本新聞社 1973 年
- ★ 滝口凡夫『決断力（中）』日本工業新聞社 2001 年
- ★ 滝口凡夫『出光佐三 魂の言葉』海鳥社 2012 年
- ★ 高倉秀二『評伝 出光佐三』プレジデント社 1990 年
- ★ 出光真子「父の名をのがれて」『ホワット・ア・うーまんめいど』2003 年
- ・ 佐々木聰編『日本の戦後企業家史-反骨の系譜-』有斐閣選書 2001 年
- ・ 水木楊『難にありて人を切らす』2003 年（のち、『出光佐三 反骨の言魂』PHP 研究所 2013 年）
- ・ 堀江義人『石油王 出光佐三 発想の原点』三心堂出版社 1998 年
- ・ 斐富吉「出光佐三の経営思想の行方-日本的精神と日本経営-」『大阪産業大学経営論集』第 3 卷 2 号 2002 年

倉田主税の著作・出典

- ・ 倉田主税「私の履歴書」『私の履歴書（経済人 12）』1982 年 日本経済新聞社
- ・ 倉田主税『しみだらけの人生-日立・戦後 20 年-』1969 年 野田経済社
- ・ 倉田主税『倉田主税の半生記』1962 年 日本時報社
- ・ 倉田主税追悼集編纂委員会編『倉田主税追悼集』1970 年
- ・ 安部正弘『東郷公園と私』1966 年